

て試めされよ。」などと言ひ合せて、埋めて置いた木の下に向つて数珠を押しすり、印を仰山に結び出しなどして、鹿爪らしく行をした。それから愈々木の葉をかき除け、詮索したけれど、少しも物も見えない。それでは場所が違つてゐるのであらうかと、廻らない場所もない程一面に山中を求めた。それ以前に埋めたのを、人が見ておいて、僧共が御所へ行つた留守に盗んだのであつた。法師共は兒に對して不面目で何ともいふ詞も無い、それが爲に聞き悪い程言ひ

といふ詩句を引いて言つたのだ。◎しるしあらん。祈の靈験があらう。◎いひ試みられよ。祈つて靈験があるかどうか、ためして見る。◎いひしるひて。互に言ひ合せて。◎数珠おしすり。数珠は数多の珠を練で貫いて造り、念佛を唱へる時につまぐるもの。珠の数は百八個を常とする。◎印ことんしくむすび出で。仰山に印を結んで。印結びは一の秘法で、印とは象徴の意、即ち、印は宇宙の神祕を表すので、一種靈妙な力を有つてゐる。だから自然印結びをする時、それから靈妙が起つて來るのだ。◎いらなくふるまひて。しかつめらしく、立ちふるまうて。「いらなく」は奇甚しい意。ことんしく、荒々しいなどいふ。◎つや／＼。「つや／＼」といふに同じ。俗にいふ、一切、スヨシモ。◎物も見えず。前に埋めて置いた物も見えない。◎山をあされども。山中を求め探すけれど。「あさる」は求める意。◎法師どもことの葉なくて。法師共が兒に對して面目なく、何とも言ふべき詞がなくて。◎いさかひ。「言ひ違ふ」の約言。言ひ争ふ、口論などの意。◎あまり興あらんと。是は兼好の批評の詞。◎あいなきものなり。面白くないものだ。「あいなき」は無愛の意で、興味のないいふ。

争ひ、腹立て、歸つた。あまり興味のあらうとする事は、蛇腹面白くないものだ。

【大意】

家は夏向きを主として作るがよい。庭の遺水なども浅い方が涼しげに見える。天井も高いのは冬寒く、燈も暗い。造作は用のない所を作つて置くのも、何かの便利となつてよい。

【通釋】

「家の作り方は夏向きを主とするがよい。冬はどのやうな處でも住める。暑い頃は作り具合の悪い住居は堪へ難いものだ。泉水池などの深い水は、

五十五段

家の造りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まゝる。暑き頃、わろき住居は堪へがたきことなり。深き水はすゞしげなし。浅くて流れたる、遙かにすゞし。こまかなる物を見るに、遣戸は蔀の間よりも明し。天井の高きは、冬寒く燈くらし、造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、萬の用にもたちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

◎夏をむねとすべし。夏向きを主として作るがよい。「むね」は宗の字を書く、心の義で、主とする、專とするなどの意。◎深き水はすゞしげなし。泉水や池などの水が深く溜つて流れず底の見えないのは涼しくない事をいふ。◎浅くて流れたる。水浅くてチヨロ／＼と流れてゐるのだ。遺水などの趣をいうたのだらう。◎遙かにすゞし。ズット涼しい。池水などよりは底の礫も数へ得る遺水

涼味がない。遺水の淺くてチヨロチヨロと流れてゐるのが遙に涼しい。細かいものを見るに、遣戸は葺の間よりも明かい。天井の高いのは冬寒く、燈が暗い。又造作は平素用のない所を造つて置いたのは、見ても面白く、何かいろ／＼の用に立つてよいものだ。」と人が評定し合つた。

【大意】「久し振りで逢つた人が、遠慮なく饒舌するのは、面白くない。」とて、下賤の

の滯々たるが爽涼の感深いものだ。◎やり戸。引戸の事。◎天井の高きは。天井が高いからというて、それのみでは夏涼しいものでない。だから成る可く夏を主としつゝも、冬の都合よい様に作るがよいといふのだ。◎造作は用なき所をつくりたる。造作は常は用事もないやうな所を造つてあるのが。これには、母屋、書院など、外の用なき所をいふといふ説と、空地を廣くして置く意味だとの説とあるが、兼好の考は、書院、母屋又は室の天井、床の間、戸棚の如きものまでも、強ち實用本位で作らずに、室の雅致興趣を添へるやうに作つてあるのが面白いものだと、彼の趣味性の上からいうたのであらう。◎よろづの用にたちて。家に何か用のある場合など、萬の用に使はれて。◎人のさだめあひ侍りし。人が評定し合ひました。何人が明かにさして居らぬ。第三者の言に托して、兼好自身の考を婉曲に表白したものと見てもよい。

五十六段

久しく隔りて逢ひたる人の、我方にありつる事、かす／＼に、残りなく語りつゞくるこそあいなけれ。隔なく馴れぬる人も、

人と上品の人との話し振り、話を聞く折の態度を比較評論し、轉じて、人の美醜學才などを批評するに、自己を標準としてするのは、面白くない。」と述べてゐる。

【通釋】久しく疎遠にして逢つて逢つた人が、自分の方にあつた出来事を深山残りなく語り續けるのは面白くない。心置きなく馴れ込んでゐる人も、暫時離れて居つてから逢ふといふ事は、氣恥しい思のするものだ。下賤の人は一寸外出しても、今日あつた事だというて、息もつき切れぬ程に、世話敷く語

程へて見るは恥しからぬかは。つぎさまの人は、あからさまに立ち出でて、けふありつる事とて、息もつきあへず語り興するぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、自ら人も聴くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく數多の中にうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひてもいたく興せぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにそ、品のほどははかられぬべき。人のみざまのよしあし、才ある人は、その事など定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし。

◎久しくへだたりて逢ひたる人。久しく遠かつて居つて逢つた知人。◎我方にありつること。自分の方にあつた事柄。相手の話を聞かうとせず、唯自分の

り興するぞよ。之に反して、上品な人の物語するのは、人が大勢居つても、その中の一人に向つて靜かに話すのを、一座の人も自然と聞くのである。然るに、下品な人は誰といふ相手もなく、衆人中に出て、丁度其事柄を眼前で見るやうな、手眞似、口眞似の態度で語りなすから、一座の人は、同様にそれを笑ひ厭ぐ。これは甚だ亂りがはしい。すべて、面白い事をいうても、甚しく面白がらぬのと、格別興のない事をいらしても、よく笑ふ事に因つて、人の素性の程度は推測出来るであら

方の事許り語る様をいふ。◎隔なく馴れぬる人。自分と心置きなく馴れ親んでゐた人。是からが兼好の批評の詞だ。◎程へて。時日が経過して。暫くたつて。◎恥しからぬかは。恥しくないものかマア耻しいものだ。如何に心の隔なく馴れ親んでゐた友人でも、長い間別れてゐて逢うたのは、誰しも一種恥しいやうな遠慮の起るものだといふので、人情のやさしい趣を述べてゐる。◎つぎさまの人。下賤の人。上品な人の次の人。◎あからさまに。かりそめに「あからさま」の「あ」は「いや」である。「からさま」は「かりそめ」である。「いやかりそめ」の意。普通のかりそめといふよりも一層重い「かりそめ」である。「明々白々」などの意の「あからさま」は明様の義で、これとは語源が異なる。◎けふありつることとて。今日あつた事だといつて。◎息もつきあへず。息もつききれない程に。「あへ」は「敢て」である、敢て息もつかずの意。「敢て」は推して爲す意。◎よき人。上品な人。◎一人に向きて。一人に對つて。慎しやかに落着いてゐる有様である。◎おのづから人も聴くにこそあれ。別に多勢の人に語るのではないが、自然、衆人がその話を聴くのである。◎みなおなじく。一座の人が皆同様に。◎いとらうがはし。甚だ亂りがはしい。「らう」は亂の字の音便。「がはし」は他語を形容詞とする接尾語。狼藉めいてゐるなと

う。又人の見た様子の善悪や、學才のある人の上をば、その事など評定し合ふ場合に、自己を標準として言ひ出したのは、いやな感じがする。

の意。◎いたく。甚しく。◎興ぜぬ。面白がらぬ。上品の人は、喜怒哀樂の情を抑止して、人の前では露骨に表はさぬものだ。◎よく笑ふにぞ。よく笑ふことに依つて。下賤の人は、些細な事柄にでも、矢鱈に自分の感情を表はすものだ。◎品のほど。氏、素性の程合。◎人のみさまのよしあし。人の見た様子のよい、わるい。「みさま」を身様と解し形容様體の意とするは誤だ。この「みさま」は單に外形上の容貌でなく、眼に映じた動作、應對、一切をいふ意。◎さへある人。學才のある人。◎その事など定めあへるに。人の見さまの善悪、學才の如何などを評定しあふ場合に。◎おのが身にひきかけて。自己を標準にして。◎わびし。物足らぬ。いやな面白くない感がする。

五十七段

人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道知らん人は、いみじと思ひてはかたらじ。すべて、いとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく聞きにくし。

【大意】人が語りいでた歌物語の歌のわるいのは心外なものだ。凡て自分が深く知らぬ道の話をするのは聞きにくい。

【通釋】人が語り出した、歌に關する物語の中の、歌の拙いのは、心外なものだ。少し歌道を心得て居らう人は、かゝる歌を立派なものだと思つては語るまい。總體自分が精通した居らぬ道々の物語をしたのは、側^{ソバ}耻^{ハツカ}しくて聞き憎いものだ。

◎歌物語。歌に關する物語。單に作歌上の逸話美談、秀歌名歌の話のみでなく、歌を以て増答應對したといふやうな物語までを廣く含む。◎歌、わるきこそ。物語の中に出て来る歌が拙い歌であるのが。◎本意なけれ。心外なものだ。◎その道知らん人。歌の道を知り居らう人。◎いみじと思ひては。その歌がいみじく立派であると思つては「歌の道を知らう人は立派な歌だと思つては語るまい、然るに、よい歌だと思つて語るのは歌道知らぬからだ。」との意を言外に含めて、次の「すべて云々」といへる句を引き起す伏線としてゐる。◎いとも知らぬ。精通して居らぬ。「も」は感動詞。「いとも」というてゐるので、單に玄關丈け位知つて居て、如何にもそれを精しく知つて居るらしく語るのはいけぬといふ意味が見えてゐる。◎物がたりしたる。物語をしたのが。「たる」といふ連體形で句を切つてある、かういふ所は常に其次に「のが」といふ助詞を置いて解釋する。◎かたはらいたく聞きにくし。側^{ソバ}耻^{ハツカ}しく聞きにくいものだ。「かたはらいたく」は「傍^{カサ}痛^{ハツ}し」で「傍^{カサ}にきゝゝなるのも心痛し」の意。片腹痛と書くはあて字で、語意に關係がない。「傍^{カサ}から見ても笑止だ、氣の毒に思ふ」などいふのと同じ。

【大意】

「道心さへあれば、住む場所に關係なく、後世往生の出来るものだ。」などといふのは、後世を知らぬ人の言ふ事だ。心は境遇に支配されるものだから、世を離れた閑寂な處でなくして道は行へない。勿論山林寂寞の地にあつても、凡人の事だから多少は浮世との交渉を持つが、然し俗世間に權勢を漲る人の望よりは遙かに其欲望が簡易で求め易い。且、世を脱れた人は惡には疎く善に近づく事が多い。兎に角、人は俗世を脱離するのがよい。菩提を知らぬ人間は畜類

五十八段

「道心あらば住む所にしもよらじ。家にあり人にまじはるとも、後世^{ゴゼ}を願はんにかたかるべきかは。」といふは、更に、後世知らぬ人なり。げにはこの世をはかなみ、必ず生死^{シヤウジ}を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家を願るいとなみのいさましからん。心は縁にひかれて移るものなれば、靜ならでは道は行じがたし。そのうつはものむかしの人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ嵐を防ぐよすがなくては、あらねぬわざなれば、おのづから世を貧るに似たることも、便^{たより}にふれば、などかなからん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし。」などいはんは、むげの事なり。さすがに、

同然である。
 【通釋】「菩提心があるならば、佛道に入るのは、必ずしも住む場所に關係すまい。わが家に居り、又は世人に交つてゐても、後世を願ふにむつかしい事があるまいか、むづかしい事はあるまい。」と説く人は、一向後世を願ふ事を知らぬ人だ。實際に現世を果敢なく思ひ、必ず生死の巷を超越しようと思ふであらうには、朝夕君に仕へたり、妻子眷族を顧慮したりする渡世の業に、何の興味があり、又何の元氣があらうぞ、普通には、イツ／＼として心の

一たび道に入りて、世をいとはん人、たとひ望ありとも、勢ある人の、貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜の羹、いくばくか人のついえをなさん。もとむる所は易く、その心はやく足りぬべし。かたちにはづる所もあれば、さはいへど、悪には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして、世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に貧ることをつとめて、菩提に赴かざらんは、萬の畜類にかはる所あるまじくや。

◎道心。佛道に歸依する心。菩提心。◎住む所にしもよらじ。住む場所の如何には因るまい。何處に住んでも、其住む場所に關係なしで、佛道を修める事の出来るものだ。「しも」の「し」は意味を強める助辭、「も」は感動詞。必ずといふ程に強めてあるのだ。「大隱隱朝市」◎家にあり。妻子眷族と共に自分の家に住み。◎人にまじはるとも。俗世間の人に交際しても。◎後世を願はん

引き立たぬ等の者である。一體心は境遂に左右せられるものであるから、俗界を離れ閑寂でなくては、道は修行し難い。その人物才幹が、今の人には昔の人に及ばない。随つて山林に引退しても、餓を救ひ嵐を防ぐ衣食の便宜がなくては、存命の出来ぬ事であるから、出世間の人でも、俗世間の人の長命を欲し財貨を貪るやうな行爲に似てゐる點も、自然、都合に依つてはどうして無い事があるか、あるであらう。さうあるからといって、この一事を見て直に、世を脱離した甲斐がない、

に。異本に「道をわがはんに」とある。後世は當來世、即ち人が未來に於いて生れる世界をいふ。道を修めて、佛果を求めようといふ意。◎かたがるべきかは。難くあらうか、難くはない。何處に居ても後世を願へるとの意。◎更に後世知らぬ人なり。一向後世を願ふ事を知らぬ人だ。◎げには。實際には。◎この世をはかなみ。俗世を果敢ないと思ひ。或は「はかなみ」といふ語は「はかなし」といふ形容詞の語根の「はかな」に「さに」といふ意味の接尾語「み」の加つたもので、「果敢なきに」といふ意と説くものがあるが、首肯しがたい。◎必ず生死を出でんと思はん。必ず苦界の生死を脱離して往生を遂げようと思はうに。◎家を願ふ。妻子眷族を顧慮する。◎いとなみの。世渡りのわざが。◎いさましからん。勇しく元氣があらうぞ、イツ／＼として心が引き立たない。即ち、實際苦界の生死を脱離して極樂往生をしようと思ふと、君に仕へ、家を顧慮する渡世の道には元氣がないはずだ。然るに、この世にあつて、仕官その他事に熱心なのは、實は道心がないからだ。◎心は縁にひかれて移るものなれば。人の心は境遇にひかれて移り變るものだから。本生心地觀經、「心隨萬境轉々所實能轉。」孟子、「居移氣、養移體。」◎靜かならでは。世俗の一切を離れ心閑かなくては。◎そのうつはもの。その人物。才幹。論語、「子曰

それ程であるならば、な
んでマア世を棄てたの
などと冷評するのは、極
端な言ひ分だ。世を食
るに似てゐる行爲がある
はいふものゝ、一度道に
志して俗世を厭うてを
う人は、よしんば望があ
つてもそれが、欲望の盛
んな俗人の欲深いには
似ても似つかぬであら
う。即ちその望といふの
も、紙の衾・麻の衣・鉢
の食物・あかさの汁物で
足りるので、其等のもの
がどれ程人の費用をかけ
ようぞ、いくらもかけら
ぬ事だ。かく求める所の
ものは容易で、其人の心
は早速満足する事が出来

汝器也、曰何器也、曰瑚璉也。「器」は器量の意。◎むかしの人に及ばず。今
の人は器量才幹が昔の人に追ひ付かぬ。昔の人とは釋迦在世の時の阿羅漢など
といふ苦行した人をさす。◎山林に入りても。世を脱し、俗塵を離れて、山林
寂寞の境涯に入つても。是から兼好が當時の遁世者の有様に就いて述べるの
だ。然るに、是を「家を捨てかゝる人の詞」などいふは誤。◎飢をたすけ。
飢を救ふないふ。下の「一鉢のもうけ、藜のあつもの」に對して見るべきもの
である。◎嵐を防ぐ。衣服の意。下の「紙の衾、あさの衣」に對して見るべき
ものである。◎よすが。たより。◎あられぬわざなれば。存命出来ぬ事である
から。◎世食るに似たること。俗世間の人の長命を欲し財物を食る行爲に似
てゐる事柄。俗世間の人の如く世を食るのではないが、一寸考へると、世を食る
かのやうに見える事柄。◎便にふれば。都合によつては。◎などかなからん。
どうしてない事があらう、世を食る行爲の如く見える事柄もある。◎さればと
て。世を食るに似てゐる所の事柄があればと云うて。◎背けるかひなし。俗塵
を脱離して山林寂寞の境涯に入つた甲斐がない。◎さばかりならば。それ位な
らば。衣食を食を程ならば。◎なじかは捨てし。何んでマア世を背いたのか。
◎むげの事なり。極端な言ひ分である。◎さすがに。シカスカニ。さうはいふ

る。
又衣食の欲があつた所
で、沙門は圓頂縮衣の姿
の手前、心に耻ぢる點が
あるから、悪事には縁遠
く、善事には親む事許り
多い。だから、人と生れ
た隙には、どうぞして俗
世を脱する事がありた
い事だ。偏に食欲をこれ
事として、菩提心を起さ
ない者は、萬の畜類に異
ならないであらう。

ものゝ。世を食るに似た行爲があるとは言ふものゝ。◎勢ある人。俗世にかゝ
はつて居て、慾望の盛んに發する人。◎似るべからず。似ないであらう。◎紙
の衾。紙でこしらへた衾。衾は寝る時に身の上に被るもの、「臥す衾」の意か。
◎麻の衣。麻で仕立てた衣。麻衣は多く喪服に用ゐるものだが、こゝでは單に
粗末無飾の意味でいうたのである。◎一鉢のまうけ。一鉢の用意。鉢は佛弟子
が食を受ける器。◎あかさのあつもの。あかさの汁物。白氏文集、「布衾不周
レ體、藜茹纒充レ腹。」◎いくばくか人のついでなさん。どれ程人の費用をか
けようぞ、いくらもかけらぬ。◎もとむる所は易く。願ひ欲する所のものは容
易に得られ。◎その心はやく足りぬべし。その求める心は早く満足するであら
う。◎かたちにはづる。剃髮黒衣の出家の姿に對して耻しいと思ふ。慈鎮和尚
「何故に捨てける身ぞと折々は、姿に耻ぢよ墨染の袖。」◎さはいへど。世を食
るに似てゐる事があるとはいふけれど。◎人と生れたらんしには。この世
に人となつて生れたらう證には。人として生れず畜類であるならばともかく
も、人となつて生れ出でた以上、人らしいといふ事の證左には。◎いかにもし
て。どうぞして。◎世を遣れん事こそ。塵の世を離れて佛道に歸依しよう事
が。◎食ることなつとめて。世を食り美衣美食を欲し名利を得ん事なつとめ

【大意】
 遁世出家を思ひ立つ人は、眼を潰つて葛進猪突しなければ駄目だ。この事を處理して、あの談を纏めて置いて、など、考へてゐると、何時まで経つても願望を決行する時がない。大方の道心を有つてゐる人は、かくの如く豫定だけで死んで終ふ。

て。「むさぼる」は、欲する意。◎菩提に赴かざらんは。佛道に歸依しなからう人は。菩提とは佛の正覺の智識のこと。◎萬の畜類に。人は萬物の靈長であるとしてあるが、その靈長たるべき人も、萬の畜類に。◎かはる所あるまじくや。異なつた點があるまいであらう。「や」は軽い疑。次に「あらん」といふ句を省いてある。

五十九段

大事を思ひたゝん人は、さがたき、心にかゝらん事の本意を遂げずして、さながらすつべきなり。しばしこの事果てゝ、同じくは、彼の事沙汰し置きて、しかぐの事、人の嘲やあらん、行く末難なくしたゝめまうけて、年比もあればこそあれ、その事またん程あらじ、物騒しからぬやうになど思はんには、えさらぬことのみ、いとどかさなりて、事の盡くる限りもなく、思

無常の來る事は迅速で且逃避の出來ぬものだから、大事を決行するに油斷があつてはならぬ。

【通釋】

出家遁世を思ひ立つ人は、據所無い氣がかりな事があつても、その目的をば達せず、中途で其儘棄てなくてはならない。暫く此事が終つてからしようとか、同じものならばあの事も處分しておいて、然る後に出家しようとか、又はこれこれの事を中途半途で棄ておいては人の嘲があらう、將來人から非難のないやうに處理して、それから後に出家しようとか、過

ひ立つ目もあるべからず、おほやう、人を見るに、すこし心あるきはは、皆このあらましにてぞ、一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしやといふ。身を助けんとすれば、耻をもかへりみず、財をも棄てゝ遁れ去るぞかし。命は、人を待つものかは。無常のきたることは、水火のせむるよりも速に、遁れがたきものを、その時老いたる親、いとけなき子、君の恩、人の情すてがたしとて棄てざらんや。

◎大事。佛者は生死の二つを大事といふ。こゝにては、出家遁世を指す。俗を離れ佛に歸依するのが人生終極の一大事だ。◎思ひたゝん人。出家遁世して佛に歸依しようと思ひ起たう人。◎さがたき心にかゝらん事。よんどころない、心が、りにならう事。一本に「さがたき」とある。◎さながらすつべきなり。その儘に捨てなければならぬ事である。本意を遂げずにその儘に捨てよといふのだ。◎しばしこの事果てゝ。暫くこの仕事か済んでから。大事を思ひた

去半生の間かく出家せず
に居れば居られる、其事
の處分のつくのを待つ
に、長い時日もかかるま
いから、騒しくないやう
に落着いてしよう、など
と思ふであらうには、去
り得ざる事許り層一層重
なり来て、それが盡きる
際限もなく、随つて出家
を思ひ立つ日もないであ
らう。

う。この句は「など思はんには」にかゝる。◎同じくは。同じ事には。「は」を
濁つて「おなじくば」とすると「同じ事ならば」の意。◎彼の事沙汰し置きて。
アノ事を處分し置いて、然る後に大事を營まう。◎しかんくの事、人の嘲やあ
らん。かやうくの事を中途半分で捨て、出家しては人の嘲笑があらうか。◎
行末難なくした、めまうけて。將來人から非難のないやうに整理しこしらへ
て、然る後に大事を營まう。◎年比もあればこそあれ、今まで何年かの間、か
うして大事を營ますにあれば居る。文段抄は「あらばこそあれ」とありたい所
であるといつてゐるが、「あればこそあれ」は、既定の形に於て甲乙の語句が共
に當然の原因結果をなしてゐるのであるから、文段抄の説は誤だ。もし是を「あ
ればこそありしか」「あればこそありけれ」とするならば差間ない。◎物さわ
がしからぬやうに。物事につけて騒しくないやうに、靜かに落着いて、大事を
營まう。◎えさらぬ。回避する事の出来ない。◎いとく。「いとく」の約言。
一層甚しく。◎おほやう人を見るに。大體、世人を觀察するに。◎すこし心あ
るきはは。少し考のある分際の者は。心とは道に志す考をいふのだ。◎このあ
らましにてぞ。大事を思ひ立たうといふ豫定で。風雅集「俗世とは思ひながら
にすてやらで、あらましにのみ過しつるかな。」新後拾遺「如何なればわがあら

うとすると、耻をも顧み
ず財寶をも捨て、逃走す
るぞよ。壽命は人の事業
の完成するまで、待つも
のか、待ちはしない。死
といふもの、襲ひ來るの
は、水火の攻め寄せるよ
りも速か、且遁れ難い
ものであるのを、其臨終
の時になつて、老親幼兒
君恩人情などいふ事を捨
て難いというて、捨てず
にあらうか、捨てなければ
ならない。

ましの末をだに、思ひ定めぬ心なるらん。」堀川百首、「果敢なきを思ひ知らず
はなけれども、あらましにのみ目を暮すかな。」◎一期。一生。◎近き火。是か
ら兼好が無常の來るのは迅速なものだから、大事を思ひ立つ人は、即刻世を捨
てればならぬといふ事を、近火水難の譬を引いて説くのである。◎しばしとや
いふ。暫く待つて呉れよなど、いふか、言ひはしまい。◎耻をもかへりみず。
己が身は耻よりも貴重であるから、耻など顧慮して居ない。◎命は人を待つも
のかは。壽命といふものは人を待つものが、待つものぢやない。壽命といふも
のは、人が大事を執行するまで待つて居るものではない。◎速に遁れがたき
な。速で且遁れる事が出来ないものである、然るを。水火は逃れる事が出来る
が、無常といふもの、來るのは水火なとよりも速で且逃れる事が出来ぬ。◎そ
の時。臨終の時。◎すてがたしとすてざらんや。捨てる事が出来ぬというて
捨てないであらうか、捨てずにはゐない。出家などの時は親兄弟妻子の愛情に
絆されて、その本意をも遂げずに居られるが、無常の襲來に逢うては、世上一
切の物を捨てなくてはならぬ。だから、由なき情愛欲望にかゝづらふ事なく、
早く、大事を執行するがよいといふのだ。花山院は御年十九にならせられた折、
悲花經に、「妻子珍寶及王位臨終命時不隨者。」とあるを御覽じて、ひそか

に位をのがれ、出家されたといふ事である。

六十段

【大意】
盛親僧都といふ智者が、好んで芋魁を食うた。或時は自分の師匠から譲られた錢二百貫と坊一つとを、皆芋魁に代へて終つた。世人は僧都のこの行なを、有難き道心者だと讃めた。又此僧都が、ある法師にシロウリといふ名を付けたが、そのシロウリとは何物であるかは僧都自身も知らなかつた。僧都是一宗の法燈で重く思はれた人であつたが、決して人に従ふ事がなく、自分の心の欲する

眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いもがしらといふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日など療治とて籠り居て、思ふやうによき芋魁をえらびて、ことに多く食ひて、萬の病をいやしけり。人にくはすることなし。たゞ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にさまに、錢二百貫と坊ひとつとをゆづりたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋魁のあしとさだめて、京なる人に預けおきて、十貫づゝとりよ

まゝに、食ひたい時に食ひ、寝たい時に寝て自己本位の振舞をしたが、人に厭はれず済んだ。極めて奇行に富んだ人であつた。

【通釋】

眞乘院に、盛親僧都といふて、尊い智者があつた。その人は親芋を好んで多く喰つた。佛敎の講釋をする席でも、大きな鉢にそれを高く盛つて、膝近くに置いて、喰ひながら經文を讀んだ。氣色のわるい折には、七日か十四日の間、療治だといふて閉ぢ籠つて居て、思ふ存分よい親芋を撰擇して、格別に多く喰つて、萬の

せて、芋頭を乏しかちすめしけるほどに、又ことよ用に用ゐる事なくて、そのあしみなになりけり。三百貫の物を、貧しき身にまうけてかくはからひける、誠にありがたき道心者なりとぞ、人申しける。この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ。」と人の問ひければ、「さる物を我も知らず、もしあらましかば、この僧の顔に似てん。」とぞいひける。この僧都みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説、人に勝れて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれど、世を軽く思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、大かた人に隨ふといふことなし。出仕して饗膳などに就く時も、皆人の前するわたすを待たず、我前にするぬれば、やがて、ひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。とき非時も

病を癒した。然し他人に與へる事をしない、たゞ自分だけで喰つた。僧都は極く貧しかったが、或時、師匠が死に際に、錢二百貫と坊一つとを彼に譲つた。彼はそこで坊を百貫に賣り、都合三萬疋を親芋の代金と定めて、それを京にやる人にあづけておいて、一度に十貫づつとりよせては、親芋を不自由なく喰つた。さうしてゐる中に、他の事には少しも用ゐないで其金が盡きて終つた。實に三百貫の金を、貧しい身分に儲けて、かく親芋の代道心者であると、人が評

人にひとしく定めて食はず、わが食ひたき時、夜中にも、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども、人のいふ事聽き入れず。目覺めぬれば、幾夜もいねず、心をすまして、うそぶきありきなど、尋常ならぬさまなれども、人にいとほれず、よろづゆるされけり。徳の至れりけるにや。

◎眞乘院。仁和寺中にある寺。◎盛親僧都。傳不詳。◎いもがしら。親芋の事。芋頭、芋魁、何れにも書く。◎談義の座。佛教の講釋をする席。◎うづたかく。堆の字を書く。高くもりあがつてゐる有様をいふ。うづは盈積の義。◎文。經文。◎いやしけり。癒した。病氣をなほした。◎人にくはすることなし。人にたせさせる事がない。自己本位で他人を眼中に置かぬ有様をいふ。◎死にさま。死に際。「さま」は「方向」をいふ。死ね折などの意。◎三百貫。この時代は永錢の勘定で、一貫を百疋といふ。三百貫は三萬疋のこと。徳川時代は一貫は拾錢百疋は二十五錢である。錢を疋といふ事は昔錢十文を一疋とし、十文毎に、駒引錢一つ宛入れたからだといふ。◎乏しからず。不自由でなく。豊富の

した。この僧都が或法師を見て、其者にシロウカリといふ名をつけた、シロウカリとは、どんなものかと入が尋ねたれば、彼は「左様なものは自分も知らない、もしも世にあるものならば、それは此僧の顔に似て居らう。」と答へた。盛親は容貌が美しく、力が強く、大食で、その上能書で、學問が出来、辯説が人にすぐれてゐた。實に宗内の棟梁であつたから、寺のうちでも重んぜられたけれど、世間、事柄を輕視したスネ者で、凡ての事をば自己の思ひ通りにして、大體人に願ふといふ

意。◎めしける。食はれた。「めす」とは貴い人が、物を我身に受け入るれにいふ敬語。衣服を着、物を食ひ、飲物を飲み、事を爲す事などに廣く用ゐる。◎三百貫の物を……人申ける。兼好の批評である。◎ありがたき。珍しい。しろうるり。白瓜の事。「るり」は「り」の延言。色白く面長の顔をいふ。一説に、「シロウカリ」の誤で、顔色白く、ウツカリとした僧の事だといふ。練名などは多く容貌、又は習癖のある言語などから附けるものであるから、此處のシロウカリといふも顔の形から突差の場合につけたので、深い意味はない。今、顔の長いのをウリザネ顔などいふと同じであらう。◎とは何物ぞ。「しろうるり」とは如何なるものぞ。」と人が盛親に問うたのだ。◎さるもの。しろうるりといふもの。◎あらましかば。あらうならば。◎似てん。似てゐよう。◎みめよく。容貌が美しく。みめは人の顔リホカタチの目に見える場所をいふ。◎宗の法燈。宗内の學問のある人。元來、法燈とは、正法が迷執を破ること、恰も燈火が暗中を照すが如くであるといふ所から、正法のことをいうたのである。◎曲者。スネ者、ネザケ者。世の尋常ならぬもの。此語は諷する方にも、讚める方にも用ゐる。◎饜膳。ふるまひの膳。◎とき非時。「とき」とは僧家で、日出で、漸く盛なる時に食ふ所の食事。「ひじ」とは午後の食で、時ならぬ時に食ふもの、

事がない。例へば佛事に人の家へ出掛けて、ふるまひの膳につく時も、一座の人の前へ膳を並べて終ふのを待たないで、自分の前に据ゑさへすれば、すぐ獨り食つて、歸りたいと思ふと獨りつくと立つて歸つた。時でも非時でも、人と同様に定めては喰はない。自分の欲する時は、夜中でも、曉でもかまはず喰つて、眠い時は盡し床の中に籠つて、どんな大事があつても、人の忠言依頼に耳を借さない、目が醒めると幾晩でも寝ず、餘念なく澄して散歩をしたりなどし、普通とは變つた様

意。佛家の法では一日一食で日中を過ぎては物を食はない事になつてゐる。然るに或一人の沙彌が一度の齋飯だけでは食ひ兼ねたので、佛が評して曉に食はせた、是を非時といふ。◎ついたちて。つと立つて。◎心をすまして、うそぶきありき。餘念なく、すまして歩く。「うそぶく」は口をスポメて聲を出す意。◎人にいとほれず。人に疑はれず。◎徳の至れりけるにや。學徳の至極して居つたからであらうか。

六十一段

御産の時、飯おとすことは、定れることにはあらず。御胞表滯るときのまじなひなり。とゞこほらせ給はねばこのことなし。下ざまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の飯をめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、こしきおとしたるを書きたり。

子であるが、彼は少しも人に嫌はれない、萬の事をば度外に置かれた。これは畢竟學徳の至極してなつたからであらうか。

【大意】

御産の時におとす飯こしきの話。

【通釋】

皇子御誕生の時、屋根から飯を落す習慣は、必ずすると一定したものではない。御胞衣の滯つた時の呪である。もしも滯らずに安産であれば、此事はしない。一體これは下賤の者から始つた事で、確かな根拠はない。行ふ時は大原の里の飯を用ゐるのた。古い寶藏に納め

◎御産の時。皇后、又は女御、更衣の御産の時。◎飯。飯を蒸す器。飯を子敷即ち胞衣に通はせ難産の呪マジナヒに落すのだ。平家物語「后、御産の時御殿の棟より飯を轉ずる事あり、皇子御誕生には南へ落し、皇女誕生には北に落すを、是は北へ落したりければ、いそぎとり上げ落し直したりけれども、猶惡しき御事にぞ人申しける。」◎御胞衣。赤兒の臍緒についたもので、赤兒が母の胎内にある間被つてゐるもの。俗に曰ふノチザシ。神代卷、「及至産時、先以淡路島爲胞。」胞衣は「えな」とよむ。◎下ざまより事おこりて。下のものから此事が始つて。「下ざま」は「下のかた」の意。下賤の者をいふ。◎させる本説なし。シカト指シテ言フ程の根拠がない。◎大原の里。大原は大腹と通じる、産後、大腹になつて胞衣の滯らぬ様にとの意。◎ふるき寶藏の繪。ふるい寶藏に納めてある所の繪。圖繪・記録・歌書に限らず、種々の寶物を納める所を寶藏といふ。宇治の寶藏、東大寺の寶藏などの類。◎賤しき人の子産みたる所に。前に「下ざまより事おこりて」というた句の例證に書いたのだ。皇子皇女御誕生の時に限るのではない、下賤の者もかゝることをするといふ意味である。

六十二段

てある繪に、賤しい人の子を産んだ處に甕を落した繪を書いたのがある。

【大意】

延政門院が戀しく思ふといふ意味を歌に詠んで、後醍醐院へ参る人に言傳へた歌物語。

【通釋】

延政門院が幼稚であらせられた時、後醍醐院へ参る人に、言傳てなすといふて、おつしやつた御歌に「ふたつもじ、牛の角もじ、すぐなもじ、ゆがみもじとぞ君は覺ゆる。」といふがある。歌の意は戀しく思ひまゐらせませすといふのだ。

【大意】

延政門院いとけなくおはしましける時、院へまゐる人に、御ことづてとて、申させ給ひける御歌、「ふたつもじ牛の角もじすぐともじゆがみもじとぞ君はおぼゆる。」こいしく思ひまゐらせ給ふとなり。

◎延政門院。後醍醐院の皇女。御母は大納言公經卿の女、門院の御名は悦子。
◎ふたつもじ。この字。◎牛の角もじ。いの字。牛の角に似てゐるからだ。◎すぐなもじ。しの字。眞直な形だからかくいふ。◎ゆがみもじ。くの字、形が曲つてゐるのでかくいふ。◎君はおぼゆる。君を思ふ。君は後醍醐院。◎こいしく。一本には「こひしく」としてある。又「い」を「ひ」の音便と見るがよいといふ説もあるが、幼少の姫宮の御事であるから、假名遣の誤謬は論ずる必要もなからう。

六十三段

後七日の阿闍梨、武者を集むること、いつとかや盗人にあひに

眞言院の御修法に武者を集める事は、古式でなく、中途より始つた事だ。年の始に武士を用ゐる事は不穩な事である。

【通釋】

後七日の御修法をつとめる阿闍梨が、警固の武士を集める事は、昔盜賊にあつた事があるので、はじめは宿直人といふ名義でしたのが、現今ではかく仰山になつて終つたのである。一年間の吉凶の相は、この御修法の有様によつて現れるものであるから、武士のやうな荒々しいものを、用ゐる事は穩便でない。

けるより、とのゐるとて、かくことごとしくなりにけり。一とせの相は、この修中のありさまにこそ見ゆなれば、兵を用ゐること、おだやかならぬことなり。

◎後七日。正月八日から、十四日迄、七日間朝廷にある眞言院の御修法をいふ。天長六年に弘法大師、眞言院を宮中に立てられ、承和元年から大師この法を行はせられる。東寺一の長者、我が本坊で元日から行ひ、八日から更に眞言院で修せられるので、後七日といふ。元來は仁明帝の時、大内中務省で弘法大師の秘法を修め、永代の規式を定める爲に、新に眞言修法院を建てられたのが、その始である。◎阿闍梨。此御修法をつとめる法師。本來、阿闍梨は梵語で、軌範、正行などと譯す、普通は、軌範となつて弟子の行爲を矯正する徳僧の敬稱である。吾國では仁明帝の承和三年に、比叡・比良・伊吹・愛宕・神峰・金峯・葛木の七高山に阿闍梨を置いたのが始となつて、僧職に用ゐた。そしてこの職には台密本密の高僧をしたのである。◎武者を集むること。御修法の時、武官の侍、甲冑をつけて、四門を警固することをいふ。◎いつとかや盗人に。盜難にあつた事は兼好の時代にも何時の頃かわからなかつたらしい。然し安元年間以

後大内裏衰へて眞言院の邊までも雜人共入り込み、その比、阿闍梨の法衣・法具を盗み取つたので、武士に警固させる事となつた。◎とのゐ人。宿直の人。◎一とせの相。一年間の吉凶の相。◎この修中のありさまにこそ見ゆなれば。御修法の有様に依つてあらはれるからして。「見ゆなれば」の「なれば」は詠歌の「なり」である。年の始の前崎などに兵を用ゐて騒しいことをするは、不穩の兆が見えて面白くないといふのだ。或眞言書には、この御修法は天長地久五穀成就の爲に行はれるのだとも書いてある位で、かゝる殺伐な警固の武士などは忌むべき事とするのだ。◎兵。武士。

六十四段

車の五緒いっせなは、かならず人によらず。ほどにつけて、きはむる官位くわいに至りぬれば、乗るものなりとぞ、ある人、仰せられし。

◎車の五緒。五緒のある車。車の天井の五處に緒のついてゐるもの。◎かならず人によらず。必ずしも人がもとゝなるのではない、即ち何人が乗るとは定つ

【大意】
五緒車の故實を明かにする。

【通釋】
車の五緒あるのは、必ずしも何人が乗るものだと定つてはゐない。身分によつて、其身分相應の極

位極官に昇る人が、乗るものだと、或人が仰せられた。

【大意】
冠についての故實。

【通釋】
この頃の冠は、昔のよりも、ズット高くなつたと或人が言はれた。古代の冠を入れる桶を持つてゐる人は、その縁をフチ織オリぎ足タして、現今は用ゐるのである。

てゐない。◎ほどにつけて。身の程に應じて。程は身分。攝政、清華などいふ身分をいふ。◎きはむる官位に至りぬれば。極位極官に達してゐると。菊亭右大臣書禮、「攝家者以關白爲先途。清華者以一上爲先途。」◎ある人仰せられし。土御門大納言の抄に、「大八葉五緒長物見は、極位の人之れに乗す。然るに近代多乗用す不可然事なり。」

六十五段

このごろの冠かぶりは、昔よりは遙かに高くなりたるなりとぞ、ある人、仰せられし。古代の冠桶かぶりかを持ちたる人は、端はたをつぎて、今もちゐるなり。

◎冠。吾國で冠の制を定められたのは、推古帝の御宇に、聖德太子が十二階の冠を制せられたのが、最初である。即ち唐の衣冠に倣つて定めたのだ。以後、孝徳天皇、天智天皇、天武天皇の御時に、各、冠の制がある。◎とぞある人仰せられし。この十一文字の無い書がある。◎冠桶。冠を入れる桶。曲ユカもので葉

を入れて漆塗にし梨地蒔繪などで飾り、桶の内を錦で張つてある。異本に「古代の冠箱カクリコを持ちたる。」としてある。◎端をつぎて。冠桶のフチをつき足しての意。

六十六段

【大意】
鷹飼の武勝が、岡本關白殿の仰せによつて、花のない梅の枝は鳥一羽つけて進上した時、武勝が説明した鳥柴の故實を、其まゝ書きしるして。その説明の中に言うてある「鳥は柴の枝、梅の枝の散りたると、つぼみたるにつける。」といふ事に就いて、兪好自身伊勢物語中の「梅のつくり枝に雉なつけ。」とある句を引い

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙をそへて、この枝につけて參すべきよし、御鷹飼おんはかり下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず。一枝に二つ付くることも存じ候はず。」と申しければ、膳部かしはでに尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また、武勝に、「さらばおのれが思はんやうにつけて參せよ。」と、仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて參せけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、蓄みたると、

て、不審を述べてゐる。

【通釋】
岡本關白殿が、花盛りの紅梅の枝に雉を二羽添へ、さて、雉をば此梅の枝につけて差し出せとの趣を御鷹飼の下毛野武勝に命ぜられた。武勝は「花に鳥をつける方法を存じません、又一枝に二羽をつける事も心得て居りません。」と言はれた。鷹はそこでその作法を膳部のものに尋ね、或は人々に御問ひになつたが、誰も心得て居らぬ。再び武勝に「然らば其方が考へてゐる通りにつけて差し出せ。」とおつしやつた。武勝は花もない梅の枝に一

散りたるとにつく。五葉ごえなどにもつく。枝の長さ七尺、あるひは六尺。返し刀五分に切る。枝の半に鳥をつく。つくる枝、ふまする枝あり。しぐら藤のわらぬにて、二所ふたところつくべし。藤のさきは、火打羽ひうちばのたけに比べて切りて、牛の角のやうにたわむべし。初雪あしたの朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひてまゐる。大砌おほみきりの石を傳ひて、雪に跡をつけず。雨覆あまおほひの毛を、少しかなぐりちらして、二棟の御所の勾欄こうらんによせかく。祿をいださるれば、肩にかけて、拜して退く。初雪といへども、沓くつのはなの隠れぬほどの雪にはまゐらず。雨覆の毛をちらすことは、鷹はよわごしをとることなれば、御鷹のとりたるよしなるべし。」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけん。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、「君がためにとをる花は時しもわかぬ。」とい

羽をつけて差し上げた。その武勝が鳥柴の故實について、述べるには、鳥は雑木の枝、或は梅の枝の蕾のあるのと、散つたのとの雙方につける。五葉松などにも付ける。其枝の長さは七尺か六尺、返し刀の目の幅を五分にきる。枝の半分どころに鳥をつける。結び付ける枝と、足で踏ませる枝とがある。結びつけるにはついでに藤の丸いまゝの、で、一ヶ處付けるがよい。其藤の長さは鳥の火打ち羽の長さに比べて切る。そして其先きを牛の角のやうに曲げるがよい。其鳥は初雪の降つた朝、

へること、伊勢物語に見えたり。つくり花はくるしからぬにや。

◎岡本關白殿。藤原家平公の事。家基公(關白左大臣)の子。元亨四年三月二十九日出家、同五月十四日薨去、年三十三。◎さかりなる紅梅の枝。先盛の紅梅の枝。◎鳥。雉の事。人に贈る時に單に鳥といへば、雉の事。又普通に鳥といへば鶉をさす。鳥の音。鳥合せなど皆鶉の事だ。新勅選集、「まどろまでもの思ふ宿の長き夜は、鳥の音ばかりうれしきはなし。」◎二雙。二羽の事。一番。◎この枝につけて。梅の枝につけて。鳥を枝につける作法は色々ある。年の内は立枝を隔て、雉を左にあげて付け、年明けては雌を左にあげて付ける、是は春は雌を賞翫するからだ。又柴を用ゐるにも、春は梅、秋は紅葉に付けるのが例である、之は大臣大饗の時に用ゐる。初雪の朝雉を人につかはす時にもこの作法である。鷹野から人の許へ遣すには三四尺の柴の枝を刀めをつけす木を相はしらかして付ける。一雙をつける法を知る人がない。又一説には、柴の長さ六七尺雌雄一雙を付ける、之は大臣大饗、元服移徙の時に用ゐる。産所へ遣すには根びきの小松に付ける。又一説には、鷹野から人の許へ遣すには、柴でなくとも、萩薄など何にでも付ける。又一説には、松に山鳩を付ける、之は義家以後は付けない。鶉を萩薄の枝に、小鳥を紅葉の枝に、雀を竹に付ける。十月

枝を肩に懸けて、中門から禮容を整へて參上する。御庭のふみ方は、軒下の踏石を傳つて、雪に足踏をつけない。あまおほひの毛を少し掻き拂ひ散して、二棟の御所の高い處にある欄干に寄せかける。其處でうちから祝儀を下さると、それを肩にかけて、拜して退出する。初雪というても、香の先のかくれぬ程の浅い雪には參らない。あまおほひの毛を散らすのは、鷹は雉の弱腰を捕るのであるから、御鷹が捕つた様子に見せる爲であらう。」と言はれた。武勝が花の枝に鳥

は、ふし柴に付ける。か様にいろくの説があるものである。◎參すべきよし。奉るがよいとの趣。◎御鷹飼。鷹狩に用ゐる鷹を飼ふ人。こゝは朝廷で飼はれる鷹の番人をいふ。◎花に鳥つくるすべ知り候はず。武勝の詞。花のある枝に鳥を付ける方法を知りません。◎膳部。朝夕の食物のことをつかさどる人。又は單に「おももの」。膳部は魚鳥などを使ふので、魚鳥の上の事は知つてゐるかと思つて尋ねられたのだ。◎おのれが思はんやうに。其方が考へてゐるやうに。關白殿が武勝に仰せられる詞。◎武勝が申し侍りしは。武勝が鳥柴の故實について申しました事は。以下武勝の詞。◎柴の枝。雑木の枝。柴は槩木の意。雑木又は雑木の枝をいふ。小さい木である。拾遺、「淋しさに煙をたにもたゝじとて、柴をりくぶる冬の山里。」◎五葉。五葉の松。◎返し刀。木にてる竹にても、はす切りに切つて、その裏を切りそぐをいふ。五分にきるとは、返し刀の目の幅を五分に切るのだ。◎ふまする枝。鳥の足で踏ませる枝。◎しら藤。つらら藤。◎二所つくべし。鳥一つを二所ゆはひつけるのがよい。◎火うち羽。鳥の翼の末に火打の形をした羽がある、それをいふ。火うちは火を打ち出すもの。◎たわむべし。曲げるがよい。一本に「わ」の字がない。◎ふるまひて。様子作つて。禮容を整へて。◎大砌の石。軒下の踏石。みぎりは水限の義、簷滴の下

を付けないと、言はれたのは、どういふ理由があるのであらうか。或男が陰曆九月頃に、梅の造り花を咲かせてある枝に雉をつけて、殿に奉るといふて、「我がたのむ君が爲にと折る花は、時しもわかぬ物にぞありける。」と讀まれた物語が、伊勢物語に見えてゐる。さうして見ると、此場合造花は差岡ないのであらうか。

であるからさう云ふのだ。軒下。又は軒下の踏石のある處をいふ。「大」は美稱。◎雪にあとをつけず。正面より参らずに、側面から踏石を傳うてゆく様である。一本には「つけて」とある。◎雨覆の毛。雉の尾の所の短い毛。俗にいふ糞毛のこと。◎かなぐりちらし。掻き拂ひ散らし。「かなぐり」は掻きはらふ意。「か」は「かき」にて接頭語。◎二棟の御所。棟が二つあるやうに作つた御所。◎勾欄。欄干。◎よせかく。鳥柴の枝をよせかける。◎祿。祝儀。大體は御衣を下さるが、然し祿は御衣とのみ限らない。褒美として下さる當座の賜物をいふ。◎初雪。初雪に雉を奉るは、雪には雉が捕れるものだからである。◎よわごしなと。雉の弱腰を捕る。◎花に鳥つけずとは。兼好自身が、武勝の詞に就いての不審を述べるのだ。◎長月、陰曆九月の異名。◎君がためにと。伊勢物語に「昔おほきおほいまうちぎみと聞ゆるおはしけり、つかうまつる男、長月ばかりに、梅の作り枝に雉をつけて奉るとて、「我がたのむ君が爲にと折る花は、時しもわかぬ物にぞありける。」とよみて奉りければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に祿給へりけり。」とあるのをいふ。◎つくり枝。造り花を咲かせてある枝。◎時しもわかぬ。時節を區別せぬ。◎つくり花はくるしからぬにや。眞の花でなく、造花は差岡がないのであらうか。

【大意】

「賀茂の岩本の社は業平で、橋本の方は實方である。實方の橋本の社は御手洗に近く、吉水和尚の「月をめで花を眺めし古の、やさしき人はこゝにありはら。」と詠まれたのは、岩本の社だ。」と説き、餘談に「今出河院近衛といふ人は、常に百首の歌を、本橋本の二社に手向けられた。」といふ話をしつゝある。

【通釋】

賀茂の岩本橋本の二社には、業平と實方とを祀つてある。世人が常に雙方を混じて、言ひ間違つてゐるから、或年自分が参

六十七段

加茂の岩本橋本は、業平實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一年、参りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼びとめて、尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本や、なほ水の近ければとおぼえはべる。吉水和尚、「月をめで花をながめしいにしへの、やさしき人はこゝにあり原。」とよみたまひけるは、岩本の社とこそうけたまはりおき侍れど、おのれらよりは、なか／＼御存知などもこそ、さぶらはめ。」と、いとうやうやくしいひたりしこそ、いみじくおぼえしか。今出河院近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、わかかりける時、常に百首の歌をよみて、かの二つの社の御前の水にて、書きて

詣して、老宮司が自分の前を通り過ぎたのを呼びとめて、其別を尋ねたに、その宮司は「實方の方は御手洗川に社の影が寫つてゐる處であるといふ事です。して見ると、橋本の社の方が一層川に近いから、是が實方の社であらうかと存じます。吉水和尚が「月をめで花をながめしにいしへの、やさしき人はこゝにありはら。」と詠ませられたのは、岩本の社のことであると聞いて置きましたけれども、あなたの方が、私よりも、反つて御存知の事なども御座います。」と「うや／＼しく答へられ

手向けられけり。誠に、やんごとなき譽ありて、人の口にある歌多し。作文詩序など、いみじくかく人なり。

◎岩本、橋本。二社共に賀茂の末社である。神社啓蒙に「岩本橋本神社、在ニ山城國愛宕郡賀茂別雷皇神之末社也、岩本、在ニ片岡社與ニ澤田社之間也、蓋岩上在ニ神籬ニ故有ニ此名ニ橋本、在ニ二鳥居北土屋西ニ神前在ニ流水ニ架ニ石橋ニ也。」◎業平。在原業平。平城天皇の孫阿保親王の五男、官は右近衛中將である、よつて在ニ中將ともいふ。和歌をよくし、六歌仙の一人に數へられてゐる。◎實方。藤原實方。右近衛中將であつたが、一條院の御時、行成卿と争ひ、冠を打落した罪で、奥州へ流された。かくて奥州へ行つて、名取の笠島道祖神の前を過ぎた時、馬俄に蹙れ、實方も共に死んだ。その靈が雀となつて玉城に歸り宮中の臺盤に入つて鳴いたといふ。西行が奥州へ下向の時「朽ちもせぬその名ばかりな」といふ置きて、枯野のすゝき形見とぞ見る。」と詠んだのは、實方を追懐したのである。◎人の當にいひまがへ侍れば。世間の人が常に言ひ誤つて居るからして。岩本橋本の兩社を何れが業平で何れが實方であるかを言ひ違へてゐる意。◎一年。或年。兼好も其真相を知る爲に、或年參詣して見たのだ。◎宮司。神

たのが、殊勝に感じた。今出河院近衛というて、歌集などに歌が澤山のせられてゐる人は、幼少の時、常に百首の歌を讀んで、かの二社の御前の水で書いて、神に捧げられた。其人は誠に貴い名譽があつて、人口に膾炙してゐる歌が多い。文章や詩の小序なども結構に書く人である。

官。◎實方は御手洗に影のうつりける所。實方の方は御手洗川に社の影が寫つてゐる處。是は宮司の答詞。「御手洗は神社の傍にある川又は池の稱、參詣人などが手を洗ふ所からいふのだ。こゝは、山城國愛宕郡賀茂の神山から流れ出て、片岡森などを過ぎる、所謂御手洗川の事。一説に、實方が奥州で死に、後に御手洗川に實方の影が寫つたから、社を立て、祝つたといはれてゐる。◎橋本やなほ。橋本の社が一層。岩本の社も御手洗川の向ひ岸で水邊であるが、橋本の方が一層、岩本よりも水に近いから、是が實方の社であらうといふのだ。◎吉水和尚。慈鎮和尚東山の吉水(今の丸山)に居つたので吉水和尚といふた。天台座主大僧正慈圓の事で、慈鎮は謚號である。鎌倉時代の有名な歌人であつた。◎月をめで。月を賞翫する。業平の歌に、「大方は月をもめでじこれや、この、つもれば人の老いとなるもの。」とあるのをさすのだらう。◎花をながめし。花をつく／＼と見守つて嘆息した。業平の歌に「花にあかぬ嘆はいつもせしかども、今日の今宵に似る時ぞなき。」◎やさしき人。優雅な人。◎月をめで花をながめし。一首の意は「秋の月を賞翫し、春の花をながめて吟嘆した昔の優雅な人は、こゝの岩本の社に鎮ります」と原業平、その人である。」◎なかく。反つて。◎いとうやし／＼。甚だ敬んで。◎いみじくおぼえしか。いみじく

殊勝に感じた。官司が古人の歌・縁起などを知つて居て、よく兩社の區別を説明し、しかも謙讓して「おのれらよりは、なか／＼御存知などもこそさぶらはめ。」などと、恭々しく言つた、その態度に感心したのである。◎今出河院近衛。今出河院に宮仕した近衛の局。今出河院とは龜山院の後、常盤井相國實氏公の孫、中宮禧子のこと。近衛局は大炊御門の庶流大納言伊平の女である。九才の時、厚水といふ歌をよみ、續古今集より五代の撰集にあひ、歌數も數多入り、詩なども作つたといふ。新拾遺、今出河院近衛の歌「恨みてもなほ慕ふかな戀しさの、つらさにまくる習ひなければ。」◎築ども。歌の撰集ども。◎あまた入りたる人。自作の歌が澤山入つて居る人。◎手向けられけり。捧げられた。手に捧げて供へる意。◎やんごとなき譽。貴い名譽。◎人の口にある歌。名歌として後世の人の口に膾炙してゐる歌。◎詩序。詩の小序。

六十八段

【大意】
「土大根を、萬にいみじき薬だといつて常に食つて居た人の處へ、或時敵が襲來して來た。その折、

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなるものゝありけるが、土大根をよろづにいみじき薬とて、朝ごとに、二つづ、焼きて

大根が武士の形に現形して、その敵を撃退して終つた。」といふ信仰の奇蹟を述べてゐる。

【通釋】

筑紫に何々の押領使など言ふ類の人が有つたが、その人は大根を勝れた薬だといつて、毎朝二つづ宛焼いて食つた。そしてその事が幾年かになつた。或時、館の内に、自分以外には、誰も居らなかつた隙を見計らつて、敵が襲つて來て、圍み攻めた時に、館の内に兵が二人出て來て死力を盡して戦ひ、敵を皆追ひ返して終つた。押領使は甚だ不思議に思つて「かかれてか

食ひける事、年久しくなりぬ。ある時、館のうちに、人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて圍み攻めけるに、館のうちに兵二人出できて、命を惜まず戦ひて、皆追ひ返してけり。いと不思議におぼえて、「日ごろ、こゝにものし給ふとも見えぬ人々の戦し給ふは、いかなる人ぞ。」と問ひければ、「年ごろ頼みて、あさなあさな食しつる土大根等にさぶらふ。」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる徳もありけりにこそ。

◎筑紫。現今の九州全體をいふ。◎なにがしの押領使。何々の押領使。押領使とは、朝廷から命令された國司・郡司ではなくて、二郡一郡位を代々治めてゐる後世の地侍の如きもの。◎などいふやうなるもの。など、言ふ類のものが。◎土おほれ。土大根の事。和名抄、「菴(音福、和名於保福)俗用土大根二字根正白而可食之。」大根を焼いて食ふと薬になるなどと昔から言つて居る。◎人もなかりける。押領使以外には人も居らなかつた。◎隙をはかりて。隙をうか

ら此處に居られるとも思はぬ人々が、この様に戦ひをなさるのは、全體どういふ人であるか。」と尋ねた。其二人の者共は、「年來頼みにして毎朝御口にせられた大根共で御座います。」と答へて、消えて終つた。深く信仰をしたから、この様な功德もあつたのであらう。

【大意】

「書寫の上人が法華讀誦の功あらはれて、無心の音にも深い意味を開き取る事が出来た。」といふ

がつて。◎敵襲ひ來りて。敵が不意に攻めて來て。左傳、杜預註、「輕行掩其不備。」◎館。官吏などの假寓。又は旅の客舎。和名抄、「館、和名多知、一云、無知豆美、客舎也。」◎いと不思議におぼえて。押領使が甚だ不思議に感じて。◎日頃。かれてより。押領使が二人の兵に問ふ詞。◎ものし給ふとも見えぬ人々の。御出でになるとも思はれない人々が。「ものす」とは「その事と確かに言うては、あまり明かすぎて、却つて如何はしく聞える所を朦朧化していふ詞。俗言の何シテ、何ガなど、いうて、その事と悟らせる類の詞だ。故にその意味も前後の文に依つて異なる。◎あさな。朝々といふに同じ。毎朝毎朝に。◎年ごろ頼みて。數年以來自分をたよりにして。◎深く信をいたしぬれば。深く信仰をしてゐると。◎かゝる徳もありけるにこそ。このやうな功德もあつたのであらう。

六十九段

書寫の上人は、法華讀誦の功つもありて、六根淨にかなへる人なりけり。旅のかりやに立ち入られけるに、豆のかたをたきて、

話。

【通釋】

書寫の上人は法華經を讀誦する功德が積つて、六根が明かになつた人であつた。或時、旅で旅館へ入られたに、丁度豆がらを焼いて豆を煮て居た。その豆のツブくと鳴る音を、上人は、何と言つてゐるのかと思つて、耳を澄して聞かれた。ところが、豆の音は、「疎くもない豆が共が、恨しくも、自分をば煮て、つらい目に逢せることであるわい。」と言つた。又一方焼かれる豆がらの、ハラハラとなる音は、「これも自分の本心で煮るのでは

豆を煮ける音の、つぶくと鳴るを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、うらめしくわれをば煮て、辛きめを見するものかな。」といひけり。たかるゝ豆がらはらくと鳴る音は、「わが心よりすることかは。焼かるゝはいかばかり堪へがたけれど。力なきことなり。かくな恨み給ひそ。」とぞ聞えける。

◎書寫上人。性空上人をいふ。平安城の人、從四位橋善根の子。三十六歳の時出家して、日向國霧島山に居る。後「播磨國書寫山は鷲嶺の一峯也、居此者菩提心を發て六根淨を得。」といふ人の告げて、上人は此處に庵を結んで圓教寺を創立した。年八十で寂滅。◎法華讀誦の功つもありて。法華經を讀誦する功德が積つて。即ち法華經を讀誦する人は、法華經法師功德品に見えてゐる經意に叶うて、六根が明かになるのである。◎六根淨にかなへる人。六根が明かになつた人。◎聞き給ひければ。上人が豆の煮える音を何んと言つてゐるのかと思つて聞いたれば。一本に、「問給ひければ」とある。「問ふ」とは上人が豆にツブくとなる理由を尋ねたのだ。◎疎からぬ。煮られる豆の詞。豆と豆がらとは

ない、焼かれるのはどれ程堪へ難いかわからぬけれど、致し方のない事だ。皆人のする事だから、かく自分を恨んでくれるな。」といふやうに開えた。

もと同根に生えたものだから、疎くないといふのだ。◎おのれらしも。「おのれ」とは豆がらをさす。「ら」は複数を示す接尾語。「し」は例の意味を強める助詞。「も」は感動詞。◎辛きめを見する。辛い目に逢はせる。◎といひたり。上人の耳にさう聞えたのだ。◎わが心よりすることかは。自分の本心でする事が、する事ではない。豆がらの詞。「かは」の「か」は反語の助詞。「は」は感動詞。◎いかばかり堪へがたけれども。どれくらゐだかわからぬ程堪へがたいけれども。非常に堪へ難いとの意。◎かくな恨み給ひそ。このやうに恨みなさるな。な……そ「は」禁止の助詞。◎聞えける。上人の耳にさう聞えた。この一篇の話はこの世に住む人は皆正覺解脱の域に達する事が出来ず、塵界に醒醒して、皆自己以外の欲望の爲に驅使せられ、自己本然の意志で生活してゐる者の無いのを諷諭してゐる様にも見える。

七十段

元應の清暑堂の御遊に、玄上はうせにしころ、菊亭のおとと、牧馬を弾じたまひけるに、座について、まづ、柱をさぐられた

【大意】
菊亭の大臣が牧馬を弾かれる時、その柱が脱落して居たのを、折柄用意し

て居た續飯でつけて、仔細なく其場を濟された話。

【通釋】
元應年間の清暑堂の御神樂の後にする御遊に、丁度玄上の琵琶は失つて終つた頃で、菊亭の大臣が牧馬を弾かれたが、大臣が座に着いて第一に柱を調べられると、一本脱け落ちた。大臣は懷中に持つて居られたそくひでそれを着けたので、神供の献上になる間に、よく乾いて、別段仔細もなかつた。そのいたづらは、一體どういふ恨みがあつて居たのだらうか、見物して居つたきぬかづ

りければ、ひとつ落ちにけり。御ふところにそくひをもち給ひたるにて、つけられにければ、神供の參るほどに、よくひて、ことゆゑなかりけり。いかなる意趣かありけん、物見けるきぬかづきのよりて、はなちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

◎元應。後醍醐帝の年號。兼好在世の時である。◎清暑堂。天子御一代に一度大嘗會を行はせ給ふ時、清暑堂の御神樂がある、その後には御遊があるのだ。一條禪閣御説、「清暑堂の御神樂あり。清暑堂は大極殿八省院の十二堂の其一也。大極殿にて被行の名也。官廳にて行はる、時は渡廊を以て其所とす。然共猶清暑堂の御神樂と名付け侍るなり。」拾芥抄中未曰、「大嘗會五節於此所行。」◎御遊に。清暑堂の御神樂がすんでからの御遊のときに。御遊には催馬樂をするのだ。又催馬樂に笙・築篳などを合せ、琵琶なども弾く。是を御遊のつけものといふ。遊といへば管絃などして、心を樂ましめる事で、普通遊ぶ事のなかに管絃は主要なものであるからだ。◎玄上。琵琶の名。玄象とも書く。禁祕御抄に、「玄上累代寶物也、置中殿御厨子、根源様人不知之。掃部頭貞敏渡唐

きの女房が、寄り集つて、柱を取り放して、もとのやうにしておいたのであつたといふ事だ。

之時（仁明帝承和年中貞敏遣唐使として唐土に到り、彼處に滞在の間琵琶の名人、劉二郎に就いて秘曲をうけ歸朝の時、紫檀紫藤の琵琶二面を受けた由が三代實錄に見えてゐる。）所_レ渡琵琶二面、其一賦。又、澁面文消、所々有_二赤色_一、不_レ知其繪、代々有_二沙汰_一未_レ決。或曰、玄象吞_二青鉢水_一所謂號_二玄象_一。又玄上宰相_{ハルノ}獻_二延喜帝_一仍號_二玄上_一兩說也。著聞集に、「玄象の撥面の繪様は、馬上にて秘を打つもの、腰に秘をさして舞ひたる姿である。」としてある。○菊亭のおと。後西園寺太政大臣公兼公の子、右大臣兼季公の事。○牧馬。ぼくば。琵琶の名。拾芥抄に、「與_二玄上_一一雙名物也。」と書いてある。○柱。こち。又は單に「ち」といふ。琴箏の張つてある絃の下に立て、絃を受ける柱。琵琶では「ちう」とよむ。琵琶の柱は四本、盲法師の琵琶の柱は五本である。○さぐられたりければ。調べられたれば。○ひとつ落ちにけり。柱が一本脱落して終つた。琴は柱をつけないが、琵琶は絃が高いので下を付けるのである。○そくひ。讀飯の事。飯をおしつぶして糊としたもの。○神供の參るほどに。神供の獻上になる間に。神供は神へ奉る供御。○ことゆゑなかりけり。別段の仔細がなかつた。○意趣かありけん。遺恨があつたのだらうか。○物見ける。見物して居つた。○きぬかづき。官女をいふ。「かづき」を被つた女の事。「かづき」は女の顔を隠す爲に

頭の上から掩ひ被る衣である。衣被_{キヌカヅキ}と書く。「かづき」今では「かつぎ」といふ。○よりて、はなちて。近寄つて、琵琶の柱を放ちとつて。

七十一段

名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見るときは、又、かねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこほどにてぞありけんど覚え、人も、今見る人の中におもひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。又いかなる折ぞ、たゞ今人のいふ事も、目に見ゆるものも、我心のうちも、かゝることのいつぞやありしがとおぼえて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心ちするは、我ばかりかく思ふにや。

【大意】人は、他人の名、昔物語などを聞くと、すぐ想像を逞しうするものだが、其想像が決して實際と合致しない。又現在は明確に意識はしてゐない事でも、いつか昔斯様な事があつた様な氣持のする事があるものだ。

【通釋】名前を聞くと、即時にその人の様子が想像出来る心持がする。然るに實際に見る時は、又前から思

つてなつた通りの顔をしてゐる人はない。昔の物語を聞いても、その物語にある家の様子が、この頃の人家のアソコ邊であつたらうと思はれ、その物語中の人物も現在見てゐる人の中の誰かに、自然比較して考へられるのは、誰でもこのやうな氣持がするものであらうか。又心の状態のどういふ場合であるのか、現在人がいふ事も、現在自分が眼に見る物も、又現在の我心のうちも、かういふ事がいつぞや以前に有つたかと思はれて、然も何時であつたかは瞭然と思ひ出されないが、確かにあ

◎名を聞くより、やがて。人の名前を聞く事によつて、スケサマ。やがては、直ちに、即時に。◎面影はおしはからるゝ心地するを。その人の様子は推測する事が出来る心持がするものである、然るを。「を」は甲乙の語句を連絡し且事の裏返る意を示す助詞。◎見るときは。實際に其人を見る時は。◎かれて思ひつるまゝの。前もつて考へた居た通りの。◎この頃の人の家の。昨今の人の家の。◎そこほどにてぞありけん。アソコ邊であつたらう。◎人も。昔物語に出て来る所の人物も。◎今見る人の中に思ひよそへらるゝは。現在見る人の中の或一人に自然比較して考へられるのは。「よそへらるゝ」の「らるゝ」は「よそふ」といふ動作が自然に起つて止み難い意を示す助動詞。◎誰もかく覺ゆるにや。誰でもこのやうに感じるのであらうか。「にや」の次に「あらん」といふ語を略してある。◎いかなる折ぞ。どういふ場合であるか。即ち、次の様な心的現象は常にあるのではない。どうかいふ場合にあるのだ。その心的現象のある折を倅然と疑つていうたのだ。◎たゞ今。人のいふこと、目に見える物、我心のうち三つにかゝつて居る。◎いつとは思ひいでれども。何時あつたと、明かには思ひ浮ばないけれど。◎まさしく。確かに。正しく。◎我ばかりかと思ふにや。兼好自身のみこのやうに思ふのであらうか。「ばかり」は一つあつて、二つ

とはない意を示す助詞。

七十二段

賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き、前栽に、石草木の多き、家のうちに子孫の多き、人にあひて詞の多き、願文に作善おほく書きのせたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。

◎賤しげなるもの。いやしい様子に見えるもの。「げ」は形書詞の語根に添うて名詞とする接尾語。事物の形状状態をいふ。◎居たるあたり。自分の身のまはり。◎調度の多き。諸道具の多い事。「おほき」と連體形で句を切つてある時は、その次に「事」といふ名詞を省いてあるのだ。◎持佛堂。朝夕信仰する佛を据え置く處。持佛とは常に護持して一心に頼み奉る佛尊をいふ。◎前栽。庭の植ふこみ。庭園。◎家のうちに子孫の多き。兼好が前に、「子といふものな

つたといふ心持のするのは、自分だけが斯様な事を思ふのであらうか、それとも人もさう思ふ事があるのか、どうであらうか。

【大意】
度を過ぎてゐる爲に、いやしげに見えるものを列挙し、最後に、多くても見苦しくないものを書き添へてゐる。

【通釋】
賤しい様子に見える物は、自分の身の周圍に調度の多い事、硯箱に筆の多い事、持佛堂に佛の多い事、前栽に石や草木の多い事、家のうちに子孫

のおほい事、人に逢うて詞多く語る事、神佛などに捧げる願文に自分の作善を多く書きのせてある事などである。之に反して、多くても見苦しくないものは、文庫の文、塵塚の塵である。

【大意】

「世間に語り傳へる事柄は虚言が多い。」とて、偽が事實の如くに決定されて終ふ趣を述べ、無智の人が思はず虚言を吐く事がある。とて虚言の品々を書き列れて注意を與へ、佛神の奇特・権者の

くてありなん。」というた心で書いたもの。莊子に「多男子則多懼。」とある意味からであらうか。◎人にあひて詞の多き。人は寡言沈黙がよいので。兼好が前に、「誠に言葉多からぬこそ、あかす向はまほしけれ。」と言うた其心持であらう。◎願文。ねがひぶみのこと。佛・菩薩・神などに立願の趣意を書いた文章。◎作善。佛像を供養し、經典を書寫するなど、自己のなした善事。◎おほくて見苦しからぬ。澤山あつてミットモナクナイものは。◎文庫。失火などの時書載せて引く所の庫。書棚のやうなもので、下の方に庫があつて、引き動かす事の出来るもの。◎塵塚の塵。塵を捨てる場所の塵。

七十三段

世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くはみな虚言そらごとなり。あるにも過ぎて、人は物を言ひなすに、まして年月すぎ、さかひも隔りぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。道々の爲の上手のいみじき事な

傳記だけは信すべき事を説き、「世上の虚言を偏に信するも烏滸がましいが、又疑ひ嘲るもよくない。」と結んでゐる。

【通釋】

世上に、語り傳へる事柄は、眞の話は面白くないのであらうか、大概は皆虚言である。全體、人には、事實以上に物を語り作る習慣があるのに、まして、事のあつてから長い年月を経過し、場所も遠く離れてゐると、愈々自分勝手にその話を語りこしらへ、潤節を加へ、又筆にも書き止めると、それがそのまま、事實に決定して終ふ。

ど、かたくななる人の、その道知らぬは、そらりに神の如くにいへども、道知れる人はさらに信も起さず。音にきくと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるゝも顧みず、口に任せていひちらすは、やがてうきたる事ときこゆ。又我もまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどなごめきていふは、その人の虚言そらごとにはあらず。げに／＼しく、所々うちおぼめき、能く知らぬ由して、さりながら、つま／＼合せてかたる虚言は恐しきことなり。わがため面目あるやうにいはいはれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興するそらごとは、ひとりさもなかりしものをと、いはんも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとど定りぬべし。とにもかくにも、そらごとおほき世なり。たゞ常にあるめづらしからぬ事の

又、諸藝に優れてゐる人の立派である事などを語るに、その道の事柄を了解して居らぬ頑愚の人は、濫りに神様の如く尊いものに喩するけれど、その道に明かな人は少しも信じない。凡て評判に聞く時と、實際に見る時とは、何事でも變つてゐるものである。

語る端から正體が暴露するのをかまはず、口に任せて出放題に言ひ散らすことは、直ちに根なし事だと知られる。又、語る人自身も内心眞實でないとは思ひながら、しかも他人のいうたのに随つて、唯鼻の邊を動かして、

まゝに心得たらん、よろづたがふべからず。下さまの人の物語は、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信せざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を、ねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらしなどいふもせんなければ、大かたは、まことしくあしらひて、ひとへに信せず、又疑ひあざけるべからず。

◎世に。世上に。◎まこととはあいなきにや。眞實の事柄は面白くないのであらうか。「あいなき」は「無愛」の意。◎多くは。世上に語り傳へてゐる事柄の大部分は。◎あるにも過ぎて。事實ある事より以上に。◎人は物を言ひなすに。人は語りつくるのに。◎さかひも隔りぬれば。場所も遠く離れてゐると。遠國他郷の出来事であつて見ると。◎筆にも書きとめぬれば。筆によつて文に書きとめて終ふと。韓退之の語、「不唯舉之口、而筆之於書。」◎やがて定りぬ。文に書いた事そのまゝが事實と決定してしまふ。「やがて」はソノマ、の意と間モ無クの意とある。◎道々の。諸藝道の。筆道・歌道・茶道の如きないふ。◎物の

眞實らしい様子を作つて語る事は、其人の作つた虚言ではない。次に、いかにも尤もらしいやうに聞かせる爲、所々、分明でない風を装ひ、よくは知らぬ振りをし、然も、話の辻褄を合せて語る虚言、其人の心から出た計略で、さういふ話には自然欺かれ易いから、恐しい事だ。又、自分の名譽になるやうに話された虚言に對しては、聞く人が、甚しくは反對しない。又、或は、一座のものが皆興に入る虚言は、自分一人がさうでもなかつたのになどと言はうのも仕方がないから、自然欺つ

上手の。事に優れてゐる人の。◎いみじき事など。いみじく結構である事などを語るに。「事など」の次に「語る場合に」などいふ語を置いて考へるがよい。◎かたくななる人のその道知らぬは。その道の事柄を了解して居らぬ頑愚な人は。「かたくな」は「ひとむきに心のかたよれる」をいふ。◎そゝるに。「すゝるに」といふに同じ。濫りに。◎神の如くに。神様のやうに尊くえらいものに。◎音にきくと見る時とは。評判に聞く時と、實際に眼に見る時とは。◎かつあらはる。語る傍から虚言だといふ事が暴露する。「かつ」は「且語り且つあらはるる」の意で、副詞だ、即ちかたへに語りかへたに露れる意。◎やがてうきたる事ときこゆ。直に根なし事であると知られる。◎我も。次の鼻のほどおごめきていふ人を指すのだ。即ち語る人自身もの意。◎まことしからずは思ひながら。眞實らしくはないといふ事は思ひながら。◎人のいひしまゝに。他の人が語つたのに任せて。◎鼻のほどおごめきて。鼻の邊が動く様になつて。「おごめく」は「うごめく」に同じ。◎その人の虚言にはあらず。語る人自身が作つた虚言ではない。◎げにしく。眞實らしく。◎うちおぼめき。分別でない風にして、「うち」は接頭語。◎さりながら。さうであるけれど。◎つまなく合せて。辻褄を合せて。話の筋を繋へて。◎恐しきことなり。その人の心から出た計略で、

て聞いてゐる中に、反つて其話の證人にまでされて、一層その虚言が事實に決定して終ふであらう。このやうな有様で、兎に角虚言の多い世の中だ。だから、虚言といふものは、尋常ありふれた珍しくもない事として心得ておかうには何でも間違がなからう。凡て、下品な人の物語は、聞いて驚くやうな事許りある。上品な人は、奇怪な事を語らない。

自然誰でも欺かれ易いから恐しい事であるとの意。◎わがため面目あるやうにはいれぬ。自分自身にとつて名譽のあるやうに話された。◎人いたくあらがはず。聞いてゐる人が甚しく反対しない。「あらがふ」は争ふ意。◎さもなかりしものを。さうでもなかつたものを。◎いはんも詮なくて。言はう事も甲斐がなくて。◎證人にさへなされて。證人にまでもなされて。「さへ」は事の添ひ加はる意を示す助詞。虚言を別に反対もせずに黙して聞いて居たその上に、その虚言が眞實の話であるといふ事の證人にまでされての意。◎いとゞ定りぬべし。一層眞實と決定して終ふであらう。「いとゞ」は、「いとゞ」の約れるもの。◎めづらしからぬ事のまゝに。珍しくない平凡な事として。「まゝに」は儘に、の意。「任むて」又は「何々の通りに」などの意。◎心得たらん。心得て居らうには。「たらん」の次に「には」などの語を置いて考へるがよい。◎耳驚く。耳に聞いて驚く。◎あやしき事を語らず。奇怪な事を語らない。論語に「子不语怪力亂神。」◎かくはいへど。このやうに偽多い世であるからして、何事もありふれた平凡な事として心得て置くがよいとは言ふけれど。◎佛神の奇特。佛經に多く出てゐる佛菩薩の神變奇特な事、又は神明の不思議な事、奇特は行の尋常に勝れて不可思議であるといふ。◎権者の傳記。神佛などが權りにその身

し、佛や神の神變不可思議な事柄、権者の傳記などは、さう一徹に信ぜずのみおかれるものでない。さればこゝにいふのは、世俗の虚説をそのまま眞心から信じたのも馬鹿らしく、又、こんな事はよもやあるまいなどと、反抗するのも甲斐がないから、大體は眞實らしく取り扱つて、偏に信ぜず、又、疑ひ嘲つてはならない。

を化して、人間となつて出現したものの傳記。◎さのみ信ぜざるべきにもあらず。さう許り信じないで居られる筈のものでもない。◎これは世俗の虚言を云々。こゝにいふのは、世上の虚言を云々。◎をこがまし。馬鹿らしい。「をこ」は「笑ふべき事」「馬鹿らしい事」をいふ。此語はもと支那の後漢南蠻傳に「烏潯といふ國があつてその風俗に理非を顛倒して笑ふ可き事が多いといふ事」が書いてある。それから、笑ふべき事を其國の名をかりて烏潯いというたのだ。又一説には「をこ」といふは烏潯の國の名を借りたのでなくて、我國古來の語である。なんとなれば應神天皇の御歌に「我心しいや哀許にして今を悔しき。」とある。之は漢籍の影響を受けた言葉ではなく、正しい皇國語であるといつてゐる。「がまし」は他語を形容詞とする接尾語。「に似る」の嫌ありなどの意。◎よもあらず。ヨモヤあるまい。世俗の虚言をヨモヤ左様な事はあるまいと否定する意。「よも」は副詞、その次には否定の語の來るのが常だ。◎まことしくあしらひて。眞實の様に取扱うて。◎ひとへに信ぜず又疑ひあざけるべからず。偏に信じるやうな事はせず、又それを疑ひ嘲つてはならない。

七十四段

【大意】「社會の人は皆、生を食り利を求め、事に奔り廻つてゐるが、其等の人も皆、結局は老と死とをまつのだ。それなのに、迷つてゐる者は死を畏れず、愚人はこれを悲しむ。」と述べて、暗々裏に死に對する用意のないことを笑ひ、變化無常の理を悟らぬ愚を諷めてゐる。

【通釋】人が此世に住んでゐる有様を観ると、蟻の如くに集つては、東西に急ぎ南北に奔り廻る。その中には身分の高いものもあり、賤しい者もあり、年の老いた者も若い者もあ

蟻の如くに集りて、東西に急ぎ、南北に走る。高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。營むところ何事ぞや。生を貧り、利を求めてやむ時なし。身を養ひて、何事をか待つ。期するところ、ただ、老と死とにあり。そのきたる事速かにして、念々の間に止らず。これを待つ間、何の樂かあらん。まどへるものは、これを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚かなる人は、又これをかなしぶ。常住ならん事を思ひて、變化の理を知らねばなり。

◎蟻の如くに集りて。人間が此世で生活を營んでゐる有様を蟻に譬へたのだ。文選には「蟻」とある。◎高きあり、賤しきあり、老いたるあり若きあり。此世に東奔西走してゐる人の中には、身分の高い人があり、下賤な人があり、

る。そして皆行く場所もあれば、歸つて休む家もある。夕には寢て朝は床を出る。かやうにして、營んでゐる所のものは一體何であるか。それは長生をしようと欲をかき、或は利益を求めて止む時がない。さりながら、かく自己の身を養うて、その終局には何事を期待してゐるのか。按ふに、それは只老と死とである。その死の襲ひ来る事は迅速で、一寸の間にも止らず、すん／＼と寄せかけて来る。この老と死とを待つ間に何の樂しみがあらうか、ない。然るに迷

年の老いた人があり、わかい人がある。「高き、賤しき、老いたる、若き」皆連體形で其語を切つてゐるのは、次に「人」といふ名詞を省いてゐるのだ。◎營むところ何事ぞや。營みなすところは何かであるか。◎生を食り利を求めてやむ時なし。それは、長生をしようと欲をかき、利財を求めて際限がないといふ事である。◎身を養ひて何事をか待つ。長生を欲し利財を求めて自己の身を養うて何事を期待してゐるのか。即ち「長生利欲を求めるとは、一體何を目的でかくするのか」といふのだ。◎期するところ。期待する事柄。豫め心に待ちつける事。◎そのきたる事。老と死との我身に迫つて來ること。◎念々の間に止らず。刹那々々の間に留らないで、ズン／＼來る。念々は刹那々々といふ程の意。刹那は極めて短い時間といふ。大藏法數に、「梵語刹那華言一念」仁王護國經に、「一念中有九十刹那」一刹那中有九百生滅」とある。◎これを待つ間。老と死とを待つ間。◎何の樂かあらん。老と死とを離れぬ假の世に暮してゐて何の樂みがあるか、何の樂みもないとの意。◎まどへるものは、これを恐れず。然るに、名利に迷つて居る人は、無常の來る事が迅速である事を恐れな

い。◎名利に溺れて。名聞利欲に深くハマリ込んで。◎先途のちかき事をかへりみればなり。行く先の近い事を考へぬからである。先途は進み行くさき、成

つて居る人は、此老と死
とを恐れない。それは名
譽利欲に惑溺して、自己
の行く先の近いといふ事
を顧みないからだ。事理
に愚昧な人は、又老と死
との迫つて来るのを悲し
む。それは永久に生存す
ることを思つて、事々物
々々が時々刻々に變化する
道理を知らぬからだ。

【大意】

人は一人で居るのが下
い。世俗に随ふと心が常
に外界の事々物々に奪は
れて、惑迷の境を離れず
に、無常の來るものも知ら
ない。生死を出離する眞
の道は知らずとも、心を
閑かにするのが生を樂む

り、ゆゑに至極の處。つまり死をさすのだ。◎愚かなる人。事理い味い人。◎これ
を悲しむ。無常の來るのを悲しむ。「悲しむ」は「悲しむ」と同じ、ぶとむは唇音
の相通。◎常住ならん事を思ひて。自己がこの世に常住であらう事を思つて。
即ち生に執着し長命を貪るをいふ。◎變化の理を知らねばなり。事々物々が時
々刻々變化してゆく道理を知らないからである。天地間の森羅萬象の移り變る
理を變化の理といふ。青年の老人となるやうに形を改めずにかはるを變。莊周
の夢に胡蝶となる如く形を離れてかはるを化といふ。

七十五段

徒然わぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝかたなく、唯一
人あるのみこそよけれ。世に隨へば、心、外の塵に奪はれて惑
ひ易く、人に交れば、詞よその聞きに隨ひて、さながら心にあ
らず。人にたはぶれ、物に争ひ、一度は恨み、一度はよろこぶ。

所以だ。それ故、「生活・
人事・技能・學問等の諸事
を止めよ」と、摩訶止觀
にもいふてある。

【通釋】

徒然を不平に思ふ人は、
どういふ心であらうか。
その理由がわからん。人
は己の心が外物の爲に紛
れる點がなく、只一人、
靜かに居るのがよい事
だ。世間の風習に隨ふと、
心が外界の事々物々に奪
はれて惑ひ易く、世俗の
人に交ると、自然自分の
言葉が他人の耳に順應す
るやうにして、口に發す
る言葉そのまゝが自己の
本心でなく、偽がある。そ

その事定れる事なし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし。ま
どひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りていそがはしく、
惚れて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだまことの道を
知らずとも、縁を離れて身をしづかにし、事にあづからずして心
を安くせんこそ、暫くたのしむともいひつべけれ。生活、人事、
技能、學問等の諸縁を止めよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

◎徒然わぶる人。つれづれを物足らず思ふ人。閑散を不平に思ふ人。「わぶ」は
元來志を得ずして呻吟する時に、口と嘆聲を發するを、やがて波行に活用した
ので、不満に思ふ心持をいふ。「わびし」は「わぶ」に「し」を添へて形容詞に活か
されたもの。◎まぎるゝかたなく唯一人あるのみこそよけれ。自分の心が外物の
爲に紛れる處がなく、ただひとり生存して居るのがよいの意。「のみ」は意味を強
めていふ爲に用いたゝで、ある。西行、「さびしさに哀しいとまきりけり、
ひとりぞ月は見るべかりける。」◎世に隨へば。世間の習慣に隨ふと俗界に立

して人に對して道化^{ドウケ}たり、物に就いて人と争うたり、其末は或は恨んだり或は喜んだりする。かく喧嘩平和嘉悦憤怒少しも心が落着いて一定しない。思慮分別雜然と湧き亂れ、時としては利得を受け、時としては損失を招く。其事の止む時がない。本心が迷うてゐる上に酔つてゐる。酔つてゐる中で果敢ない夢を見て居る。醒けて廻つて忙しく、恍惚として人生の一大事を忘れてゐる事は、萬人皆同様である。斯様な生活から目が醒めて、たとひまだ誠の^{マコト}を知らなくとも、外界の關係を絶つ

ち交ると。◎心外の塵に奪はれて。自分の本心が外界の事々物々の爲に奪はれて。塵とは、世間の萬事萬物が人の本心を汚すこと、恰も塵の如きものだとしてさういうのだ。「心の外の塵」と書いた書もあるが「心、外の塵」とした方がよい。◎人に交れば。世間の人に交ると。◎詞よその聞きに隨ひて。自分の言葉が他人の耳にかなふやうにして。「き」は耳にきく事である。即ち他人の耳によく聞えるやうに機嫌をとる意である。◎さながら心にあらず。自分の口に發する言葉その儘が自己の本心でない。他人に追従する爲に心にもない虚言諂辭を弄するをいふ。兼好集「世の中に隨ふ人のことの葉は、思へど言はず思はれど言ふ。」◎人にたはぶれ。人に對して可笑事をなす。「たはぶれ」は「たはむれ」と同じ、道化^{ドウケ}る。◎物に争ひ。物に就いて人と争ひ。◎一度は恨み、一度はよろこぶ。或は恨み、或は喜ぶ。◎その事定れる事なし。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ、このやうに心の定らぬのをいふ。◎分別みだりに起りて。おほくが濫りに湧き出て。思慮分別の雜然と入り亂れる意。◎得失やむ時なし。或時は利得を受け、或時は損失を招いて、その止む折がない。◎まだひの上^{ウヘ}に酔へり。酔の中に夢をなす。利欲名聞に迷うてゐる上に、酒を飲めるが如く心亂れ、心亂れて浮か浮かしてゐる中に果敢ない夢を見てゐる。

て身を閑かにし、世間の人事に手を出さないで心を安穩にする、之が暫時わが世を楽しむともいふてよからう。だから「人は生活人事技能學問等の諸の事柄と手を斷つて終へ。」と摩訶止觀にも教へてある。

【大意】
聖、法師などが俗人の家に入出入するのは、よろしくない。なるべく俗人は疎遠で居てありたい。

る。即ち心の攀着かない意。◎起りていそがしく、惚れて忘れたること。走り廻つて忙しく、恍惚として人生の大事を忘れてゐること。◎まことの道を知らずとも。佛の正覺の智識^{サトリ}を知らなくても。◎縁を離れて。外界の關係より脱離して。「を」は自動詞の標準を示す助詞、「ヨリ」の意。◎事にあづからず。世間の人事に關係せず。◎暫くたのしむともいひつべけれ。死の到るまでの暫くの間、わが世を楽しむのだとマア言うてよからう。「も」は感動詞。「べけれ」は、よろしいといふ意。◎生活・人事・技能・學問。止觀第四、曰、「縁務有^レ四、一生活、二人事、三技能、四學問。」生活は身命を救ふ産業、人事は人間の事に交り與る事、技能は藝能、學問は内外の書を読み習ふ事、是等は皆心の障となるものだから止めよといふのが、止觀の趣だ。◎諸縁。諸々の事柄。◎摩訶止觀。天台大師(智者大師)が觀心の事を述べた書。摩訶は梵語で、大の意。

七十六段

世のおぼえはなやかなるあたりに、なげきもよろこびもありて、人おほく行きとぶらふなかに、ひじり法師のまじりて、いひ入

【通釋】
 權門勢家の邊に、或は喪葬或は冠婚といふやうな事があつて、世人が多勢吉凶を見舞うてゐるその中に、某の上人とか、某の法師とかいふものが交つて案内を申、んでゐるのは、傍から一寸見ても、俗界を脱してゐる筈のもの、左様な事はしないでもよからうと、心に考へられる。たとひ訪問すへき理由があつても、法師は成るべく俗人に對しては疎遠であつて欲しい。

れたとすみたるこそ、さらすともと見ゆれ。さるべきゆるありとも、法師は人にうとくてありなん。

◎世のおぼえ、はなやかなるあたり。世間の人の思はくが立派である邊。即ち世人からの思はれる事が華麗である邊の意。權門勢家などをさす。「おぼえ」は「おもほゆ」の約言。「思ハレル」意。◎なげきもよるこびもありて。或は喪葬の如き愁嘆の事もあり、或は冠婚の如き歡喜の事もあつて。◎人おほく行きとぶらふなかに。世の人が多勢其處に行つて吉凶を見舞ふ其中に。◎ひじり法師。僧。何の聖何の法師といふ程の意。◎いひ入れたやすみたる。案内を申込んで佇んでゐるのは。「たやすむ」は、「立ち休む」の約。暫し立ち止つてゐること。◎さらすともと見ゆれ。その様でなくとも宜からうと思はれる。◎さるべきゆるありとも。訪問せればならぬ然るべき理由があつても。◎法師は人にうとくてありなん。法師は俗人に對して疎遠でありたいものだ。「ありなん」の「なん」は現在完了の「な」と未來の「む」と重つたもの。直譯では「疎遠で居らう」といふべきだが、今その意味を明かにする爲に「ありたい」と譯す。法師などは出世間的の者であるから、世俗的交際を避けるのがよいといふのだ。

【大意】
 世俗の人の話し合つてゐる事柄などを、法師が深く立ち入つて知つて居るのは、合點の出來ぬ事だ。斯様な事は殊に田舎法師に多い。

【通釋】
 世間に、當時人がもつてはやす材料にして、噂し合つてゐる事柄を、其事に關係すべきでない人が、よく其内情を知つて居つて、或は人に語り聞かせたり、或は不審の點を人に尋ねたりする事は、トント合點が出來ない。中でも殊に片田舎に住む法師などが、世人の身の上の事をば、恰も自分の身

七十七段

世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに言ひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、能くあない知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたること、うけられぬ。殊にかたほとりなるひじり法師などぞ、世の人のうへはわが如くたづね聞き、いかでかばかりは知りけん、と、覺ゆるまでぞいひちらすめる。

◎そのころ。當時。◎もてあつかひぐさ。もてはやす材料。「もて」は接頭語。「あつかひ」はとり用ゐる意。「ぐさ」は種の意。◎言ひあへること。噂し合つてゐる事。◎いろふべきにはあらぬ人。關係す筈ではない人。「いろふ」は「取扱ふ」「係り合ふ」などの意で「入る」の延語。◎能くあない知りて。よく話の内情を知つて。「あない」は案内の略。◎うけられぬ。承知出來ぬ。兼好自身の評語。◎かたほとりなる。片田舎にある。◎わが如くたづね聞き。自分の身の

の上の事のやうに熱心に尋ね聞き、まだどうしてこの様に詳しく知つてゐるだらうと思はれる程に、人に語り散らす様だ。

【大意】

世間の新しい事などは、あまり知らぬがよい。又、新しい客の前で、自分等特有の詞を用ゐて、その人に不審を抱かせるのは、世間馴れぬ下品の人とする事だ。

【通釋】

當世風の珍しい事共を吹聴し、取り扱ふ事は、又贊成が出来ない。凡て社會的事件の世に陳腐になるまでも、それを知らずに居る人は奥床しい。又、

の事の如く熱心に尋ね聞き。◎いかでかばかりは。どうして、これ程詳しくは。◎いひちらすめる。人に語りちらす様だ。

七十八段

今やうの事どものめづらしきを、言ひひろめもてなすこそ、又うけられぬ。世に事ふりたるまで知らぬ人は心にくし。今さらの人のある時、こゝもとに言ひつけたることぐさ、人の名など心得たるどち、かたはし言ひかはし、目見合はせ笑ひなどして、心知らぬ人に、心えず思はする事、世なれすよからぬ人の、必ずあることなり。

◎今やうの事どものめづらしきを。當世風の珍しい事どもを。◎言ひひろめもてなす。言ひ廣め取りあつかふ。◎又うけられぬ。前段に「うけられぬ」というたので、爰では「又」と附加したのだ。◎世に事ふりたるまで。世間に陳腐

になつてゐるまで。◎今さらの人。もの參らしい人。◎こゝもとに。こゝの場所。◎言ひつけたる。言ひ習はしてゐる。◎ことぐさ。首種の意。常に言ひ出す言葉。◎心得たるどち。知つて居る同志。即ち「御互に知り合つてゐる者ども」の意。◎かたはし言ひかはし。一部分を言ひ合ひ。◎心知らぬ人。その首種。物の名などの意味を知らない人。◎心えず思はする事。合點が行かないと思はせること。◎世なれす。社會的交際に馴れないとの意。◎よからぬ人。下品な人。

七十九段

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、世に恥かしきかたもあれど、自らもいみじと思へる氣色かたくななり。よくわきまへたる道には、必ず口おもく、問はぬかぎりは、言は

今はじめて仲間入りをした新しい人などの居る時、此場所だけで言ひ習はしてゐる言葉や、物の名など、其意味を知つて居る仲間同志が、その一部分を言ひ合つて、目を見合せ、笑ひなどし、不案内の人に不審を抱かせるのは、交際に慣れない下品な人の屹度する事だ。

【大意】

何事にも、よく立ち入つて居らぬ様子を、てゐるのがよい。又、自分の精通してゐる道の事は、多言せぬのがよい。

【通釋】

何事にでも深入りをして居ない淡泊な態度がよ

い。上品な人は、よし自分
分が知つて居る事だから
というて、さう許り知り
顔をしては語らない。片
田舎から都へ出て来た人
に限つて、萬の道に通じ
てゐる風の應對はする。
さうだからその應對の中
には、都の人も顔色ない
程のすぐれた點もある
が、然し自分から自分を
えらいと思つてゐる様子
が頑冥である。凡て精通
して居る道の事柄につい
てはケツト口を噤んで、
尋ねられない事は、決し
て口に出さぬのが、結構
である。

ぬこそいみじけれ。

◎何事も入りたゝぬさしたるぞ。何事にも深く立入つて居らない様子をして
ゐるのが。「さましたる」と連體形で句を止めてゐるのは。その次に置くべき名
詞を略したのである。「何事」とは諸藝道をいふ。◎よき人。上品な人。◎知り
たる事とて。知つてゐる事だというて。◎さのみ知り顔にやはいふ。さう許り
知つてゐる振りでいふか、いはしまい。「や」は反語。「は」は感動詞。◎片田
舎よりさし出でたる人。僻地の地から都へ出て来た人。「あなか」とは都以外の
地の稱。「かた」は片寄りたる偏僻の意。「さし出で」の「さし」は接頭語。◎萬の
道に心持たるよしのさしいらへ。萬の藝道に就いて知つてゐる風のウケコタへ。
「よし」は、趣、様子。「さしいらへ」は答へる意。「さし」は接頭語。◎されば世
に恥かしきかたもあれど。さうであるから、あまた其人に對して都の人の恥し
いと思ふ點もあるけれど。即ち「片田舎から出て来て諸道の事柄に口を出す程
の人はよく萬事心得て居て、都の人などよりも知識の深い點が澤山あつて、心
にくいけれど」の意。「よ」は元は「世に」から出て、「いかに」も「まこと」に
など」の意。◎自らいみじと思へる氣色。自分自身からエライと思つて居る

【大意】

「人は自身に縁遠い事を
好むものだ。例へば、法
師が兵の道を主とし、田
舎武士が佛法、連歌、管
絃などを喜ぶ。」と説き、
傳じて、笏をとる人が武
道に心を入れて、人倫に
遠く禽獸に近き振舞をな
すのを試めてゐる。
【通釋】
誰も彼も、己が身分に縁
遠い事を好むやうだ。例
へば法師は武士を道を主
として學び、武士は弓矢
の道を知らないで、反つ
て佛法を知つてゐるやう

様子。◎よくわきまへたる道。精通してゐる道。◎口おもく。口数が少く。◎
間はわかぎり。人が對れない範圍の事柄は。

八十段

人ごとに、我身に疎き事をのみぞ好める。法師は、兵の道を立
て、夷は、月ひく術しらず、佛法知りたるきそくし、連歌し、管
絃を嗜みあへり。されどおろかなるおのれが道より、なほ、人
に思ひ侮られぬべし。法師のみにもあらず、上達部、殿上人、
上さままで、おしなべて、武を好む人おほかり。百たび戦ひて
百たび勝つとも、いまだ武勇の名をさだめがたし。その故は、
運に乗じてあたをくなくとき、勇者にあらずといふ人なし。兵
盡き矢きはまりて、つひに敵に降らず、死を易くして後、始め

な様子をし、又は連歌を作り、音楽を好み合ふ。然し、それら縁遠い事柄を好むことは、自己本来の道々に拙いといふ事以上、世人から輕侮されるであらう。然し、我が本分でない所の武道を好むのは、單に法師ばかりではない。笏を手にする上達部、殿上人のやうな上つ方まで、一般に、武を好む人が多い。其武について一言するならば、よしや戰場で百戦百勝しても、其人に、容易に武勇の名を定める事が出来ない。其理由は、もしも勝つのが勇者であるならば、幸運に乗じて仇敵を

て名をあらはすべき道なり。生けらんほどは、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

◎我身に疎き事。自分に縁の遠い藝能。◎兵の道を立て。武人のなすべき事を主として習ひ。◎夷は。武士は。元來「えびす」は蝦夷をいひ、又都から遠い土地の民をいうたのだが、武器を手にする人は、公卿達よりは野蠻であるので、武士の事を夷というたのだ。◎きそくし。氣色をなす事。様子をする事。◎連歌。三十一字の和歌を二人で作るもので、上の五七五の三句を發句といひ、下の七七の二句を脇句といふ。後世は種々の變體が出来て五十・百といふ多くの句を連れるやうになつた。◎管絃。音樂。◎おろかなるおのれが道より。拙い自分の本来の藝能より。◎なほ人に思ひ侮られぬべし。一層人から輕侮されるであらう。「思ひ侮る」は「心に侮る」意で、一つの熟語の動詞だ。即ち自分の本来の藝能の拙いといふを笑はれるよりは、自分と縁の遠い道を習ふ事の方が、矢張人から輕侮されるであらうとの意。◎法師のみにあらず。前に「法師は兵の道をたて」とあるのを受けて、再びその家の道でない兵の道を學ぶ人について

破る場合でも其人を勇者でないとは言へない。然しそれは實際は一時の僥倖である。だから勝敗といふ事だけでは、眞の勇者かどうか、定める事は出来ない。手勢がなくなり、矢も盡きて、然もつひに敵に降らず、命を鴻毛の輕きに比し、死に安じてこそ、始めて武勇の名を顯はす事の出来る道である。だから生きて居らう間に、武に衿つてはならない。又他面から考へると、武道は人倫に遠く、禽獸に類した振舞であるから、武士の家柄の者でない以上は、それを好んでも益のない事だ。

て述べるのだ。◎上達部。公卿をいふ、位は三位以上、官は參議以上。公とは攝政關白、及三公(太政大臣、左右大臣)。卿とは三位以上及大中納言、參議。◎殿上人。清凉殿に昇るを許された人。即ち四位五位の昇殿を許されたもの及び六位の藏人。◎上達部殿上人、上さま、で。上達部殿上人などいふ上つ方まで。◎おしなべて。おしならして、一般に。◎百たび戦ひて百度勝つとも云々。たとひ武道は百度戦つて百度勝つても、それではまだ、武勇であるといふ評判を定めがたい。孫子、「百戦百勝非善之善者也、不戰而屈人之兵善之善者也。」運に乗じてあなをくだくとき云々。よい仕合せを得て敵を破る事がある、それでも其人を皆勇者だと呼ぶのである、さういふ僥倖があるから勝つ許り勝つても、唯それだけでは眞の勇者か如何かわからぬ。◎兵盡き矢きはまりて。自分の手勢はなくなり、矢は射盡して缺乏し。◎つひに敵に降らず。とうとう敵の爲に降参せず。◎死を易くして。死といふ事を輕んじ易く思つて。◎名をあらはすべき道なり。自分の名をあらはす事の出来る道である。道とは兵の道ないふ。◎生けらんほどは。生きてをらう間は。◎人倫に遠く禽獸に近きふるまひ。武道は人を殺し傷害を加へる技で、人のふむべき道に遠く、鶏狗の互に争ふと同じく、禽獸に等しい仕業であるから。孟子「争地以戰、殺人盈野、争城

以戰、殺入盈城、此所謂率土地而食人肉、罪不容於死。莊子曰此庶人之劍無異於雞闘。◎その家にあらずば好みて益なきことなり。武士の家の者でなくては、武を好んでも益のない事だ。論語「曾子曰君子思不出其位。」

八十一段

【大意】「屏風障子又は調度などによつて、主人の趣味心ばへなどが床しくも見え、下劣にも見えるものだ。」というて、調度の品を評してゐる。
【通釋】屏風や、唐紙障子などの、繪も、文字も、拙い筆法で書いてある、それが見憎いといふよりも、それを持つてゐる家の主人の心持が、下劣に思はれる。

屏風、障子などの繪も、文字も、かたくななる筆やうして書きたるが、見にくきよりも、宿のあるじの、拙くおぼゆるなり。大かた持てる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよきものを持つべしともあらず。損せざらんためとて、品なく、見にくきままにしなし、めづらしからんとて、用なき事どもし添へ、わづらはしく好みなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくことくしからず、つひえもなく、物

大體は、人が持つてゐる諸道具に因つても、今まで其人に對して自分の床しいと思つて居つた心持の、減じる事があるのでらう。さればというて、其調度はさうよい物を持つてと言ふのではない。破損しない爲だというて、趣味も品格もない恰好に拵へたり、珍しいやうにというて、無用の裝飾を加へたりして、煩しく好み作つてあるのを、わるいといふのだ。凡て器物は上品で甚しく仰々しいところがなく、その上、費用もかゝらないで品質のよいのがよい。

がらのよきがよきなり。

◎障子。古くサウツといひ、後世はシヤウツと云ふ。室の隔てに立てるもので、換障子・衝立障子・明障子などの類がある。昔は單に換のことをいひ、今は明障子の事をいふ。◎かたくななる筆やうして書きたるが。拙い筆つきで書いてあるのが。「かたくな」は心の一方向き之意。◎宿のあるじの拙くおぼゆるなり。その家の主人の心が拙く下劣に思はれるのである。◎大かた。大體。◎持つてゐる調度にても心おとりせらるゝ事はありぬべし。持つてゐる諸道具に因つても、自分の其人を床しく思つて居た心が減殺される事はあるであらう。◎さのみよきものを云々。調度に因つて其人が見劣りされるかというて、さう許りよい物を持つてといふのでもない。◎損せざらんためとて。是から次の「わづらはしく、好みなせるをいふなり。」までは、下品と思はれる調度を述べたのだ。損じ毀れずにあらう爲だというて。◎品なく見にくきままにしなし。品格がなく見憎く趣味のない様に作りこしらへ。◎めづらしからんとて。珍しくあらう爲だというて。◎用なき事どもし添へ。無用の裝飾を作り加へ。◎わづらはしく好みなせるをいふなり。煩はしく好み作つてあるのを、主人の心が見劣りのされる所の調度だといふのである。◎ふるめかしきやうにて。古く見えるやうで。即ち

上品の意。◎いたくことぐしからず。甚しく仰山でない。◎つひえもなく。費用もかゝらないで。◎物がらのよきがよきなり。物の品質のよいのがよいのである。

八十二段

「うすものゝ表紙は、とく損するがわびしき。」と人のいひしに、頓阿が「うすものは上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそ、いみじけれ。」と申し侍りしこそ、心まさりておぼえしか。一部とある草紙などの、同じやうにもあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、「ものを、必ず、一具にとゝのへんとするは、拙きものとする事なり。不具なるこそよけれ。」といひしも、いみじく覚えしなり。すべて何もみな、事とゝのほりたるはあしき事

【大意】
「書物の表紙など破損して、古いのがよい。」と冒頭し、弘融僧都が「物は凡て一様でないのがよい。」と言つた言葉を讃嘆し、次に「萬事十分に調うたのは悪い、缺陷のある所が面白い。」と述べてゐる。

【通釋】
「薄い絹で作つた表紙は早く破損するのが物足らぬ。」と、或人がいうたに、歌讀みの頓阿が「うすも

なり。しのこしたるを、さて打ちおきたるは面白く、いきのぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ずつくりはてぬ所を残すことなりと、ある人申し侍りしなり。先賢のつくれる内外の文にも、章段の缺けたることのみぞ侍る。

◎うすものゝ表紙。薄い絹で製つた表紙。「うすもの」とは薄く織つた絹、紗、羅の類の總稱。◎とく損するがわびしき。速にいたむのが心面白くない。こゝは巻物の表紙の事をいうてゐるのだらう。◎頓阿。南北朝時代に和歌の四天王の一人に數へられた人で、二條爲世卿の門弟である。その家集を草庵集といふ。◎上はづれ。上下の所の糸がぬけはなれる。はづるはほつると同音。織つてある糸が片端から抜けはなれるをいふ。◎螺鈿の軸。巻物の軸に青貝をすり入れたもの。◎心まさりておぼえしか。その人の心が勝れて奥床しく感ぜられた。◎一部とある草子。一部と纏つてゐるとち本。草子とは、物語文などのとち本にしたもの、小兒の文字を書き習ふとち本、又は、隨筆やうの何くれとなく書きつけたもの。◎弘融僧都。兼好と同時代の人。權少僧都弘融の事。伊

のは上下の糸が抜け離れ、青貝を磨り込んだ軸は、貝が脱落してから後が結構である。」と、言つた事が、すぐれて奥床しく感じられた。一部と纏つて居る草子などが破損したり、古びたりなどして、一様でないのが、見愉いと、世人はいうてゐるが、さりながら、弘融僧都が「物を屹度一揃ひに調へようとするのは、下等の人とする事だ、不揃ひであるのがよい。」と云つたのも、すぐれて面白いと思はれた。凡て何事でも皆完備してゐるのはわるい。作り残してある所をその儘棄て

置いてあるのは面白く、
氣がのびくとする事
だ。だから「御所の通管
にも、屹度、造り終へな
い箇處を、残し置く事
ある。」と或人が申され
た。昔の賢徳の人、學才
のある人が作つた經典
や、經書の文にも、章段
の脱落して、完備しない
もの許りがある。

賀國佛性寺通照院に居住してゐた。◎一具にとゝのへんとするは。一揃ひに調へようとするのは。◎拙きものの。心拙い下等の人が。◎不具。不揃ひ。◎いみじく覺えしなり。結構に思はれた事である。◎すべて何もみな。前述の事項を總括し、更に、廣く擴大して、「何事でも萬事」というたのだ。◎とゝのほりたるは。足らぬところなく具つてゐるのは。「とゝのほる」は「とゝのふ」の延言。◎しのこしたるをさて打ちおきたるは。作り残してある處をそのまゝ、棄て置いてあるのは。「打ち」は接頭語。◎いきのふるわざなり。命がのびくする様な事柄である。氣がゆつたりとのびくする意。◎内裏造らるゝにも。御殿を御造りなさるにつけても。「造らる」の「る」は敬語。◎つくりはてぬ所を残すことなり。造り終へない箇處を、残し置く事である。◎先賢。昔の賢徳學才ある人。◎内外の文。内典外典をいふ。佛經を内典、儒書百家の書を外典といふ。◎章段。文章中の章や段。◎缺けたることのみぞ侍る。脱落してゐる事許りある。支那の古典などが、その長い歲月の爲に脱落してゐる章がある、それを指していうたのだと思はれる。

八十三段

【大意】
凡て人の身の上でも、その官位が最上を極めるのはわるい。進むべき道の塞つてゐるのは、破滅を招く基だ。竹林院入道や洞院左大臣殿は最高の官位を敢て欲しなかつた。

【通釋】

竹林院入道左大臣殿が、太政大臣に昇進なさらうには何の故障もない、易々たる事だけれども、入道のお考へでは「太政大臣に昇るのは珍しくない、左大臣で止まらう。」というて、出家なされて終つた。洞院左大臣殿が、この竹林院入道の事柄を、深くよい事だと御思

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがり給はんに、何のとゞこほりかおはせんなれども、「めづらしげなし。一上にてやみなん。」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、この事を甘心し給ひて、相國の望、おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふことを侍るなり。月満ちては虧け、物盛にしてはおとろふ。萬の事さきのつまりたるは、破れに近き道なり。

◎竹林院入道左大臣殿。後西園寺相國實兼公の息、西園寺公衡公である。應長八年八月薨。◎太政大臣。職員令云「太政大臣一人、師範一人、儀形四海、經邦論道、變理陰陽、無其人則闕。」故に即闕の官ともいふ。◎あがり給はんに。昇進なさらうに。◎何のとゞこほりかおはせんなれども。何の故障が御座いませうか、御座いませんけれども。「とゞこほり」は中途でつかへて進まぬこと。「なれども」は「しかしながら」「しかれども」の意。◎めづらしげなし。一上にてやみなん。竹林院入道の考を述べたのだ。太政大臣になつても、めづらしい事がない、左大臣で止つて終はう。「なん」の「な」は現在完「む」は未來

ひなきつて、太政大臣に昇らうといふ希望をば持たれなかつた。易經に「亢龍の悔あり。」とかいふ事が書いてある。月は盈ちては虧け、物は盛になつては凋落する。それと同様に、凡ての事柄も、前途の塞つて、進む餘裕のないのは、破滅に近い道理である。

の助動詞。◎一上。左大臣。職原抄、「左大臣一人相當正從二位、官中事、一向左大臣統領之、故云一上。」◎洞院左大臣殿。西圓寺太政大臣公經公の息、洞院實雄公の事。從一位左大臣、山階と號した。◎甘心し給ひて。甘い事だと心に深くお思ひなされて。◎相國。太政大臣の唐名。◎相國の望おはせざりけり。太政大臣にならうとする望みがおありなさらなかつた。◎亢龍の悔。天上へのぼり極めた龍は、最早下るより外に道がない爲に、最上を極めたのを後悔するが如く、位人臣を極め盡した所の後悔。◎ありとかやいふこと侍るなり。あるとかマア言ふ事が書物に書いてあるのである。「かや」「か」「も」「や」ともに疑問の助詞。◎月満ちては虧け。月盈満しては即ち虧ける如く、人も高位高官となれば缺損破滅を來すものだ。釋名曰、「日缺也、滿則缺。」古歌に、「おもへた月滿ればやがて缺く月の、十六夜の雲や人の世の中。」◎物盛にしてはおとろふ。物が盛りになつては衰へる如く、人も繁榮となると凋衰の影がさして來る。前の「月満ちては虧け」の句と、此句とは、共に諷諭法として用ゐたものだ。范魯公詩「物盛則必衰。」◎さきのつまりたるは破れに近き道なり。高位高官に昇りつめて前途の塞つてゐるのは、破滅に近い道理である。

八十四段

【大意】「法顯三藏が天竺に居て、望郷の情に堪へなかつた。」といふ話を述べ、人に優しい情のあるのを讚嘆してゐる。

【通釋】「法顯三藏が、天竺に渡つて、故郷の扇を見ては旅の身を悲しみ、病の床に臥しては自國の食物を願はれた。」といふ話を聞いて、佛に歸依して天竺までも渡つた程の心強い人が、一概に氣の弱い様子を異國で見られた事だ。それが残念だ。」と人が評されたに、弘融僧都が、

法顯三藏の、天竺にわたりて、故郷の扇を見てはかなしび、病に臥しては、漢の食を願ひ給ひけることを聞きて、「さばかりの人の、むげにこそ心弱きけしきを、人の國にて見え給ひけれ。」と、人のいひしに、弘融僧都、「優に情ありける三藏かな。」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず心にくくおぼえしか。

◎法顯三藏。性は龔、平陽武陽の人。晋の安帝の隆安三年己亥の歲天竺に渡つた高僧。三藏は經律論の三つをなされた人の意。經とは佛説、論とは弟子の所作、律とは戒律。◎天竺。今の印度。◎故郷の扇を見てはかなしび。高僧法顯傳に「法顯到獅子國、一僧伽藍、名無畏山、有五千僧、起一佛殿、金銀刻鏤、悉以衆寶、中有二青玉像、高三丈許、通身七寶、消光威相、嚴顯非言所載、右掌中有二無價寶珠。法顯去漢地積年、所與交接、悉異域人、山川草木舉目無舊、又同行分披、或流或亡、願影唯已、心常懷悲、忽於此玉像邊見、

「優しくて情の濃かであつた三藏であるよ。」と言つたのが、普通の情もない法師と違つて、奥床しく思はれた。

商人以二白絹扇二供養、不覺凄然淚下滿目。」としてある。◎病に臥しては、病氣の爲に床に臥しては、◎漢の食を願ひ給ひけること。支那の食物を欲し願はれたこと。漢は漢朝の意ではなくて、廣く唐土の意。◎さばかりの人。佛道に歸依して天竺までも渡つたほどの心の悟つた人。◎むげにこそ心弱きけしきを人の國にて見え給ひけれ。一概に氣の弱い様子を異國で見られなされた。「見え」は見られる意。◎人のいひしに。或人が申したのに。「に」は甲乙の語句を聯れ、事の裏返る意、案外に出る意を示す助詞。「人がいうた然るに。」などと譯す。◎優に情ありける三藏かな。やさしく且情の深かつた三藏であるわい。「かな」は感動詞。◎法師のやうにもあらず。法師などいふものは物の哀も知らず情ないものであるのに、弘融は世の常の法師の如くでなく、やさしい情深い心であると、兼好が讚めたのだ。

八十五段

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されどおのづから、正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、

【大意】人の心は正直でないから偽がないでもない。然し、正直な人もあるが、正直な人が人の賢良なのを

見て、それを羨むのが普通だ。そして下愚の性者は、賢人を憎み誹る。人は愚を學んではいけない、偽つても賢を學ぶがよい。

【通釋】人の心は正直でないから、随つて偽がないでもない。されど、その中には、自然正直な人間もなんで無い事があらう。自分が正直でなくても、人の賢良なのを見て、それを羨望するのは普通の人情だ。然るに、至愚の者は、たま／＼賢良な人を見ては、之を憎む。そして賢者の事を「あれは大利を得んが爲に小利を棄

人の賢を見て羨むは世のつねなり。いたりて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見てこれにくむ。大きな利を得んがために、すこしきの利をうけず、偽りかざりて名を立てんとす。」とそしる。おのれが心に違へるによりて、このあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。偽りて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて、大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて、人を殺さば悪人なり。驥を學ぶば驥のたぐひ、舜を學ぶば舜の徒なり。偽りても賢を學ばんを賢といふべし。

◎すなほ。正直。◎いつはりなきにしもあらず。偽がないのではマアない。「し」も「し」は意味を強める助辭。「も」は感動詞。◎されどおのづから正直の人などかなからん。偽がないのではないが、然し其中にも自然正直な人間がどうしてない事があらう、正直な人もある。論語「十室之邑有忠信。」孟子「性善也。」

て、偽り飾つて名を顯はさうとする者だ。」と諷する。此愚人は、賢人の心と、自分の心が違つゝる爲に、かくの如き嘲をなすので、此一事でもつて、この人は至愚の性質で、指導しても賢にうつる事が出来ず、又、偽り飾つて小利をも辭する事が出来ない人間だと、いふ事がわかる。

◎人の賢を見て羨むは世のつねなり。人の賢良なのを見て、それを羨しく思ふのは世間普通の人情である。論語「見賢思齊焉、見不賢而内自省也。」◎たまたま賢なる人を見てこれをにくむ。稀に賢良な人を見て、その人を憎む。大學「人之有技、矧疾以惡之、人之彥聖而違之、俾不得通。」◎大きな利を得んが爲に云々。愚かな人が賢人を見てそしる詞。大利を得んが爲に小利を受けない。自己の本心を偽り飾つて世に賢い名を揚げようとするのだと、いうて諷る。◎おのれが心に違へるによりて。愚かな自分の心とは賢人の心は違つてゐるが爲に。◎このあざけりをなすにて知りぬ。大利を得んが爲に小利を受けず云々の嘲をなすのに因つて、次の事を知つた。◎この人は。賢者に對して嘲をなす人は。◎下愚の性うつるべからず。至極愚かな生れつきで、指導しても賢に移る事が出来ない。論語「上智與下愚不移。」◎偽りて小利をも辭すべからず。愚人の賢人を嘲る詞に、「偽りさかりて名を立てんとす」とあるに對して兼好の批評の詞。下愚の人は偽り飾つても小利を辭すことが出来ない。◎狂人のまれとて。禪語「狂人走、不狂人走、淮南子云、「狂者東走、逐者東走、東走則同、所以東走則異。」人は心は別種でも形式が狂人を學ぶ時は狂人になる。◎悪人のまれとて。楊子「人之性也善惡混、修其善則爲善人、修其惡則爲惡人。」◎

類、舜の聖德賢才を學ぶものは舜の仲間である。だからたとひ表面だけ、偽つても、賢者の行ひを學ぶ人を賢人だといふてよからう。

驢を學ぶば驢のたぐひ。尋常の馬でも、千里を馬を學んで、日に千里を走るものは、驢のともがらである。驢とは千里の馬。楊子「驢驘之馬、亦驢之乘也、驢類之人、亦類之徒也。」◎舜を學ぶは舜の徒なり。普通の人でも力めて善をなす人は、たとひ聖人でなくとも聖人のともがらである。孟子「鶴鳴而起、孳々爲善者舜之徒也。」又「堯舜之道孝弟而已矣、子服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣、子服桀之服、誦桀之言、行桀之行、是桀而已矣。」◎偽りても賢を學ばんを賢といふべし。たとひ自分の心が聖賢の如く立派でなくても、只表面上だけでも偽つて賢者を行を學んでする人を賢者と言はう。

八十六段

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、「御坊をば、寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりはほうしとこそ申さめ。」といはれ

【大意】
風月の才があつた惟繼中納言の秀句の話。

【通釋】
惟繼中納言は風流の才に富んだ人だ。一生涯専念に經を讀んで、三井寺の僧の圓伊僧正と同宿して

居つたに、文保年間に三井寺が焼かれた時、圓伊に逢うていふには、「貴僧をば今までは、寺法師というて居つたが、寺は焼けてないから、今後はほうし（火爰し）と申さう。」といはれた。之は勝れた秀句であるよ。

けり。いみじき秀句なりけり。

◎惟繼中納言。平氏、西洞院嫡流。元徳二年權中納言に任ぜられ、建武二年文章博士となる。曆應五年七十六歳にて出家。◎風月の才。清風明月に對して思を述べる才能。即ち、詩歌の才能といふ意。◎一生精進にて。一心を專一にして道にすゝみ。弘訣云、「無雜故精、無間故進。」◎寺法師。三井寺の僧。當時普通に、山といふ時は比叡山、寺といふ時は近江國三井寺。三井寺は別名圓城寺。天智天武持統の三皇の産湯の水に此處の水をなしたから三井寺といふた。山法師は山門の僧侶。これから惟繼の秀句の物語を述べるのだ。◎圓伊僧正。伊平大納言の孫。◎文保。花園院の年號。文保元年四月二十五日山門より三井寺が焼けた事がある。◎坊主。圓伊僧正をいふ。「坊主」は坊の主たる僧の意。それより僧の總稱にも用ゐる。◎御坊。僧に對する敬語。◎ほうし。法師の火爰しと言ひかけたのだ。◎いみじき秀句なりけり。いみじく勝れた、言ひ懸けのうまい句であるわい。「秀句」とは詩歌などの中の秀逸の句又は一語に二つの意味を含ませた言ひかけの巧な句、俗に洒落シヤレをいふ。「なりけり」の「けり」は過去の意はなくて、詠歎の意。

【大意】

「下部に酒を飲せる事は注意せねばならぬ事だ。」といふ事を、具覺坊が馬の口取りの男に酒をくれた爲に、其男が酒亂を起したのみか、自分までが尊き身體を不具にした話を引いて説いてゐる。

【通釋】

下部に酒を飲ませこのは、注意せねばならぬ事である。宇治に住んで居た男が、京にある具覺坊というて、優雅な遁世の僧を、小舅に持つて居つたから、常に交際して、睦しくして居つた。或時、迎へに馬を遣したから、

八十七段

下部しもべの酒のまする事は、心すべきことなり。宇治に住みける男おのこ、京に、具覺坊ぐかくぼうとて、なまめきたる遁世の僧を、小舅こじょうとなりければ、常に申しむつびけり。ある時、迎に馬を遣したりければ、「遙かなるほどなり。口つきの男おのこにまづ一度いちどせさせよ。」とて、酒を出したれば、さしうけさしうけ、よと飲みぬ。太刀うち佩きて、かひなくしげなれば、たのもしく覺えて、召し具して行く程に、木幡きはたのほどにて、奈良法師の、兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ち向ひて、日暮れにたる山中に、怪しきぞ、とまゝり候へ。」といひて、太刀をひき抜きければ、人も皆、太刀ぬき矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「現心うつしこころなく酔よひたるも

具覺坊は「宇治から此處までは遠い道程である。さぞ疲れた事であらう。勞をいたはる爲に、馬の手綱をとる男に、先づ一盃飲ませる。」と云うて、酒を出したれば、男は盃をさし受けさし受け、グヒ／＼飲んだ。其男のいでたちは、太刀を佩いて、勇しくあつたから、頼しい男だと心づよく思つて、さて召しつれて行くうちに、木幡の邊で奈良法師が澤山の兵士を従、て來合せた。此男が其等の者に立ち向つて「日が暮れて終つた山中に、怪しいぞ、とまりなせへ。」と云うて、腰の太刀を抜

のに候ふ、枉げて宥し給はらん。」といひければ、おの／＼嘲りて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事し給ひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らず。高名つかまつらんとするを、抜ける太刀むなしくなし給ひつること。」と怒りて、ひたぎりに斬り落しつ。さてやまだちありとの、しりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山賊よ。」といひて、走りかゝりつゝ、斬り廻りけるを、あまたして手おはせ、うち伏せてしばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入りたり。あさましくて、男ども數多はしらかしたれば、具覺坊はくちなし原はらによび臥したるを、求めいで、昇きもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損せられて、かたはになりけり。

◎下部。下男奴僕。雜事に召使はれる下劣な者の稱。◎酒のまする事。酒を飲

いたれば、兵士共も皆太刀を抜き、矢をつがへなどしたのを、具覺坊が手を揃り合せ拜んで「この男は正氣でなく、酔うた者で御座います。どうか道理を枉げて、宥して下さい。」と云うたから、皆嘲つて通り過ぎた。然るに、この男は具覺坊に向つて「御坊は残念な事をなさつたものだ。自分は酔うてゐる事はない。今手柄をしようとしたものを、折角抜いた太刀を空しくしたのは、如何にも残念だ。」と怒つて、坊を滅多切りにして馬から落した。其處で坊は「山賊がある。」と大聲でわめい

ませる事。するは使役の助動詞。◎心すべきことなり。注意せねばならぬ事である。◎宇治。山城國にある。◎なまめきたる遁世を僧を。優美な、浮世を脱れた僧侶を。「なまめき」は遁世の僧の心持を形容していうたのだ。◎申しむつびけり。話し通うて、親密にした。◎迎に馬を遣したりければ。宇治に住んでゐた男が具覺坊の處へ、迎に馬をつかはしたれば。「たりけれ」は過去完了の助動詞。◎遙かなるほどなり。具覺坊の詞。宇治から京までは、道程が遙かなる程合ひである。◎口つきの男。馬の手綱をとる男。馬の口に付きゆく男。◎まづ一度させよ。まづ一盃酒を飲ませる。「度」とは土器に三度入、五度入などいふがある、三度入とは一盃づゝ三度酌む程の大きさの土器をいふ。又一度は一土器といふ事だとの説もある。◎さしうけ／＼と飲みぬ。男が盃を引き受け引き受け酒を飲む有様。盃を飲み干しては受け、干しては受け、グイ／＼飲んだ。◎太刀うち佩きて。男の身なりの形容。太刀を腰につけて。◎かひ／＼しげなれば。勇ましげな様子であるから。◎たのもしく。カブよく。◎召し具して行く程に。引きつれてゆく間に。◎木幡のほどにて。宇治郡の木幡の邊で。◎奈良法師。奈良五大寺の僧。◎具して逢ひたるに。引き連れて來合せたのに。◎日暮れにたる云々。口つきの男の詞。日が暮れて終つてゐる山中に怪しい事だ、

たので、里人が起き出て見ると、男は「自分こそ山賊であるよ。」というて、走りかゝりながら切り廻つたのを、大勢で手疵を負はせ、打ちふせて縛つた。馬は血だらけになつて宇治大路の家に走り歸つた。家人は其様子を見て、大いに驚き、下男共を大勢走らせて見させたに、具覺坊はくちなし原に呻吟して、れてゐたのを見付け出して、昇いてつれ歸つた。坊はやうやうの命を助かつたけれど、腰を切り害はれて不具者になつて終つた。

止りなさい。◎人も皆。法師の方の兵士も皆。◎矢はげなどしけるを。矢を弦に引き番へなどしたのを。◎手をすりて。手を摺り拜んで。◎現心なく酔ひたるものに候ふ。此男は正氣がなく酔うてゐる者である。此句と次の句とは具覺坊の歎願の詞だ。「現心」は「本心」。◎在けて宥し給はらん。理を曲げてお宥し下さいますようといふ意。◎具覺坊にあひて。具覺坊に顔を合せての意。◎高名。手柄。◎むなしくなく給ひつることと、怒りて。抜いた刀を抜いた甲斐がないむだにした事だというて怒つて。◎ひたぎりに斬り落しつ。具覺坊をひたすら、切りに切つて馬より落した。「ひたぎりの」ひたは接頭語。ヒトムキに他のものを難へぬことをいふ。◎やまだちありと。具覺坊の人を呼ぶ詞。山賊がある。◎里人おこりて出であへば。近邊の里の人々が起り立つて野邊に出で合ふと。◎あまたして手おはせ。大勢の人で手疵を負はせ。◎宇治大路の家。宇治に住んでゐた男の家。◎あさましく。驚き呆れて。馬の血がついて獨りで家に歸つたのを見て主人が吃驚したのだ。◎はしらかしたれば。具覺坊を尋ねにつかはし走らせたれば。◎くちなし原。梶原で梶の多く生えてゐる原の意。別に名所ではない。木幡の邊に梶が多くあつたと見える。新古今、知家の歌、「木幡山あるはさながら口なしの、宿かるとも答へやはせぬ。」◎によび臥し

たるを。呻吟して臥してゐたのを。「によび」は呻く、呻吟する、苦しい息づかひするをいふ。◎昇きもて來つ。昇いて來た。「もて」は動作の進行をあらはす助詞。◎からき命。むづかしい命。ヤウ／＼の命。

八十八段

あるもの、小野道風の書ける和漢朗詠集とて、持ちたりけるを、ある人、御相傳、うける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風かゝんこと、時代やたがひ侍らん、おぼつかなくこそ。」といひければ、「さ候へばこそ、世にありがたきものには侍りけれ。」とて、いよく秘藏しけり。

◎小野道風。從四位上、木工頭。村上師の康保三年に卒す。佐理、行成と共に三蹟と呼ばれた能書家。◎和漢朗詠集。この集は紀淑望の作だとの説と、大納言公任卿の撰だとの説と、又詩文は公任卿で和歌は堀河院の御時師頼の加へた

【大意】小野道風が書いたといふ和漢朗詠集の所持者に、或者が、道風の朗詠集と、還者、條大納言との時代の相違を論じた。然るに所有者はその時代の相違があればこそ、珍物であるといつて、愈々それを秘藏した。

【通釋】ある者が小野道風が書いた和漢朗詠集だといつて持つて居つたのを、他の

人が「御先祖からの御傳へものだから、萬更、とりとめのない根無しことではありますまいが、四條大納言の撰ばれた朗詠集を、道風が書くことは時代が違つてをりませう。甚だ不安心である。」と、言つた所が、それだからしてこそ、まことに珍しいものである。」といつて、愈大切に藏つておいた。

ものだとの説と、三説あるが、公任卿だとの説が用ゐられてゐる。朗詠とは詩文和歌のよい詞に俗語の節を付けて歌ふもの。和漢とは其詞の中に、支那人の詩文と日本人の詩文とを含むが故か、或は詩文と和歌とを集めてあるが故か。◎として持ちたりけるを。といつて持つてゐたのを。◎御相傳うける事には侍らじなれども。御先祖からの相傳が、とりとめもない根無し事ではあるまいけれども。即ち相傳が虚構の相傳でなく事實ある事であらうけれどもの意。◎四條大納言。公任卿。◎時代やたがひ侍らん。時代が多分違つてゐませう。◎やは輕疑うたので「多分」とか「恐らく」といふ程の意。即ち公任卿は康保三年、道風の没せる年に生れ、萬壽三年に入道せられ、その後二三年で死なれた。◎おぼつかなくこそ。不安心である。「こそ」の下に「あれ」を略したのだ。おぼはオホ口のオホと同じく物の判明せぬ意、つかとは判然と、とり所の定れる意。刀の柄のつかと同じく手に握るに確かりせるものをいふ。「おぼつかなく」は其つかが判明せぬ意、思ひやりのハツキリせぬをいふ。又一説におぼは思で、思ふ柄のない義だともいふ。◎さ候へばこそ。左様に時代が相違して居ればこそ。朗詠集の所持者の答。◎世にありがたきもの。世の中にあるもの、中でとりわけ珍らしいもの。◎いよ／＼秘藏しけり。益々大切にとつておいた。

八十九段

【大意】連歌法師が開路を家へ歸る途中、自分の飼つて居る犬が、足許に寄り來てざれついたのを、昨今評判の猫またが人を喰ひに來たのだと思つて腰を抜かし、小川の中へ轉び込んで、助けよ猫またと叫んだ。そこで、近處の家々の人が寄つて川から、抱き起してくれたから、這々の態で家へ歸つた。【通釋】

「奥山に、猫またといふものありて、人をくらふなる。」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、猫またになりて、人とすることはあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべき事にこそと、思ひける頃しも、ある處にて、夜更くるまで連歌して、たゞひとりかへりけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたす足のもとへふと寄りきて、やがてかきつくまゝに、頸のほどをくはんとす。肝心も失せて、防がんとするに力もななく足もたゝす。小川へころび入りて、「助けよや、ねこまた、よ

んで、それが猫またといふものになつて、人を捕つて食ふ事はあるものだ。」といふものがあつたのを、某阿彌陀佛とかいうて連歌をする法師の、行願寺の邊に住んでやつたものが、聞いて、獨り心の中に「一人で歩く者は注意すべき事である。」と思つて居つた其頃、或場所て夜のふけるまで、連歌の座に列つて、唯一人で歸つて来る途中、小川のはたで、評判に聞いた猫またが、間違ひなく足許へ突然寄つて来て、すぐさまとりすがるにまかせて、法師の頸を邊を喰はうとする。其所で法

や／＼。」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに。」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物かけものとりて、扇小箱などふところけに持ちたりけるも水に入りぬ。希有けうにしてたすかりたるさまにて、はふ／＼家に入りけり。飼ひける犬のくらけれど、ぬしを知りて飛びつきたりけるとぞ。

◎猫また。猫の年を経たもの、化猫の類か。和訓栞→金色に光りて、毛は一條もなく、鬚は長く、尾は兩股に分れ、爪の鋭きこと劍を敷き、牙は狼に似、頭より尾まで九尺に及べり、死して兩眼を閉ぢず、光を事星の如し(中略)人を食ひしものなりとぞ。野植→金花猫は黄なる猫なり。化けて婦女を犯して煩をなす。その雄猫に犯されたるは雄を殺して是を治し、雌猫に犯されたるは雌を捕へて是を治す。◎人をくらふなる。人を喰ふ事であるの意。◎これら。此邊。「こゝら」といへば數量を示し、「これら」といへば場所を示す。此邊の里の意。◎へあがりて。歴上る意。年功を積んで卑しきより、尊くなるをいふ。な

師は氣も心も消え失せて、防がうとするに力もなく、足もたゞず、遂に、小川の中へ轉げ込んで、「助けてくれや。猫またが来た、助けてくれ、助けてくれ。」と叫ぶと、近邊の家々から松明などをつけて、走り寄つて見ると、此邊でよく見うける僧である。「これは何といふ事だ。」というて、川の中から抱き起した所が、連歌の褒美にとつて、扇小箱などを懐に持つて居たのも、皆共に水に浸つて居た。法師は珍しく助かつたといふさまで、道ふ這ふの體で家へ入つた。かの猫またと思つた

りあがつて。◎人たることはあなるものを。人を取り喰ふことがあるのであるものを。「あなる」は「あるなる」の略。◎何阿彌陀佛。「何」とはその名のたしかでないのをいふ。何々の阿彌陀佛といふ意。◎とかや。とか。「か」や「は」疑問の助詞。◎行願寺。京都一條の草堂の寺號。元享釋書→釋行圓、鎮西人、寛弘二年遊帝城、頭戴寶冠、身被革服、都下呼爲革上人、於賀茂神祠側、營行願寺、安千手像、以圓衣革、俗呼行願寺爲革堂。◎聞きて。猫またの話を聞いて、心に考へるには。◎心すべき事にこそ。注意せねばならぬことである。「こそ」の次に「あれ」を置いて考へる。◎思ひける頃しも。思つて居つたその頃丁度。「頃しも」の「し」は強める助詞、「も」は感動。口語には「その頃丁度」といふ位に譯す。◎音に聞きし。評引に聞いた。◎あやまたず。間違ひなく。◎ふと寄りきて。突然近寄り来て。◎やがてかきつくまゝに。すぐさまとりすがるにまかせて。「かきつく」の「かき」は按頭語。◎肝心もうせて。正氣もなくなつて。肝もつぶれてなどの意。◎助けよやね。また、よやく。助けよや、猫またが来た、助けよや、助けよや。「よやく」はよもやも共に呼びかける感動詞。◎叫べば。叫ぶと。◎家々より松どもともして。その邊の家から松明などつけて。◎わたり。あたり。「あ」と「わ」とは同韻の通音。◎こはいかに。これは何といふ事か

のは、自分の飼つて置いた犬で、それが聞いけれど、主人を見知つて飛び付いたのだとの事だ。

【大意】

鶴丸が主人の大納言法印に、遊びに行つた行先を問ひつめられた話。

【通釋】

大納言法印の召使つた乙鶴丸が、やすら殿と知り合ひになつて、平素往來して居たのに、或時、乙鶴丸が歸つて来たのを、法印が見付けて「何處へ行つて来たのか。」と尋ね

というて。◎連歌の賭物とりて。連歌の賞品をとつて。かけ物は賭事に賭ける品物。この頃は連歌に賭というて賞品を與へたのだ。◎扇小箱。賭物にした品物。◎希有にして。稀にして。めづらしく。◎はふく。道ふ様にして。◎飼ひける犬のくらけれど、ぬしを知りて。猶またたと思つたのは、猶またではなくして、法師の飼つてゐた犬が、聞いけれど自分の主人を見知つて。

九十段

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常にゆき通ひしに、ある時いで、かへりきたるを、法印、いづくへ行きつるぞ。」と問ひしかば、「やすら殿のがり罷りて候ふ。」といふ。そのやすら殿は、男か法師か。」と、また問はれて袖かきあはせて、「いかゞ候ふらん、頭をば見候はず。」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけん。

たれば、「やすら殿の許へ参りました。」と答へた。其處で「そのやすら殿は男であるか、法師であるか。」と、重ねて尋ねられて、窮した擧句、袖を合せて恥しいやうすで「どうでせうか、頭を見ませんでした。」と答へた。どうして、頭だけ見えなかつたであらうか。

【大意】
赤舌日にする事は末が過ぎないというてゐるが、愚かな事だ。無常變易の

◎大納言法印。大納言の官にあつた人の入道して法印となつた者。又一説には大納言の人の子の法印となつた者。自己の官名を僧の名に用ゐるさの説と、父の官名を僧名に用ゐるとの説とある。即ち自己が中將なれば入道した場合、中將法印といひ、殿下の息法印なれば殿法印といふ類。官名を僧の名につける事は寛平法皇の時から始る。◎乙鶴丸。小童の名。◎知りて。知り合ひになつて。◎常にゆき通ひしに。平素往來したのに。男色の間柄であらうか。◎法印、いづくへ行きつるぞ。法印が乙鶴丸に向つて、おまへは何處へ行つたのか、◎のがり。の許に。◎罷り。貴い方から賤しい處に行くをマカルといひ、賤しい處から貴い處へ行くをマ井ルといふ。◎袖かき合せて。袖をあはせて、恥ぢ入つた様子を。◎いかゞ候ふらん。どうでございませうか。◎などか頭ばかりの見えざりけん。兼好の批評の詞。どうして頭だけが見えなかつたのだらうか。

九十一段

赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人これを忌まず。このごろ、何ものゝいひ出でて忌みはじめけるにか。こ

世にあつて、吉日だからよい、凶日だから悪いなどいふは、有爲轉變の理を知らぬのだ。吉凶はその事をなす人によるので、日に依るのではない。

【通釋】

赤舌日といふ事は、陰陽道には、一言も言ひ及んでゐない事だ。随つて昔の人はこの日を忌まない。然るに、この頃何者が言ひ出して、この日を忌み始めたのか、この日にある事柄は末が逃げないというて、その日言つた事、爲した事は目的を達しない、又手に入れた物は失くして終ひ、計劃

の日ある事、末とほらすといひて、その日言ひたりし事、したりし事かなはず、得たりし物は失ひつ、企てたりし事成らずといふ、愚かなり。吉日を選びてなしたるわざの、末とほらぬを數へて見んも、又ひとしかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始ある事も終なし。志は遂げず、望は絶えず、人の心不定なり。物みな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に惡を爲すに必ず凶なり、惡日に善を行ふに必ず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。

◎赤舌日。赤口日の事。通書大全、「赤口日忌會客證事買賣。又云主口舌喧爭。」カナ曆にシヤク日としてある。口と舌とは同義である。赤口日の事は清明の窟裏にある。窟裏は陰陽道の秘事で、此頃世上に出さなかつたので、兼好は

した事柄は成就しないといふが、これは愚かな事だ。吉日を選んで爲したわざでも、其目的がとげられなかつた數を數へて見ように、此凶日になした事柄で失敗して居る數と同じ位であらう。その譯は「此世の中の事々物々は皆變易する。この所謂有爲轉變の境涯においては、最初在るど見るものでもそれが存在せず亡び、始あることも終がない。人も志はとげられないで、しかも望は絶えない。心も常に不定である。凡ての物は皆幻の如くに變化する。何事でも暫くも常住しない。」かう

知らなかつたのであらう。◎陰陽道。職原抄、「陰陽頭掌天文曆數風雲氣色奏聞事。」とある。即ち天文を見て氣運を考へ、曆數を知つて日を定める事を行ふ道。昔は一家で天文曆道の兩道を兼れたが、賀茂光榮安倍清明以來、前者は曆道、後者は天文道を掌つて兩道に分れた。◎沙汰なき事なり。一言いひ及んでない事だ。無關係の事だ。◎この日ある事末とほらす。この赤舌日にある事は末が逃げない。◎かなはず。望を得ない、成就しない。◎失ひつ。失つて終ふ。【つ】は現在完了の助動詞。◎數へて見んもひとしかるべし。數へて見ように、吉日になした事の末とほらぬ數と、凶日にある事の末の逃げない數と同じ程であらう。◎無常變易のさかひ。何物も常住でなく變易する流轉の境界。◎ありと見るものも存せず。存在すると思つて見るものも存在せずに忽ち滅する。◎志は遂げず。人の心に思ふ所のものには成就しない。◎望は絶えず。慾望は山の峰の上に又峯あるが如く、滅絶しないから人の望は常に絶えない。◎人の心不定なり。人の心も朝に思ひ夕に棄てるといふ風で定らない。◎物みな幻化なり。萬物は幻の如く變化するものだ。前のありと見るものも存せずといふよりこゝまでは、無常變易の境の説明。◎何事かしばらくも住する。如何なる物が暫時でもマア常住するか、變ぜずには居らぬ。「か」は反語。「も」は感動。◎この理

いふ道理を知らないからである。一體吉日にも悪を爲すと必ず凶である、悪日にも善をなすと必ず吉であるというてある。要するに、吉凶は人による事で、日その物にはよらないのである。

【大意】

弓射るに、二筋の矢を持つて的に向ふと、必らず最初の矢に等閑の心が起る。一矢で當てようと覺悟しなくてはならぬ。道を學ぶにも、朝に夕ある事を思ひ、夕に朝ある事を思ふと、懈怠の心が起る。人は其刹那々に油断をせず、道を修めなく

を知らざるなり。日の吉凶を忌む所の人はこの變易の理を知らないのである。◎吉日に悪を爲すに必ず凶なり。是から兼好が日の吉凶についての判談の詞だ。占者のいふ吉日でも、悪事をする時には必ず不吉だ。◎悪日に善を行ふに必ず吉なり。占者のいふ悪日でも、善事を行ふ時には必ず芽出度い。◎吉凶は人によりて日によらず。事の吉とか凶とかいふことは、その事を行ふ人の心の善惡如何によるので、事をなす日によつて別れるものではない。

九十二段

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く、「初心の人、二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢に、なほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心みづから知

てはならぬ。

【通釋】

或人が、弓を稽古する時、矢を二筋同時に持つて的に向ふ。それを師匠が注意して、「初めて弓を習ふ人は、二本の矢を持つてはならぬ。それは、後に射る矢を頼みにして、最初の矢には、おろそかにする心が起るからいけない。いつも一本は射當て、一本は失してもよいといふやうな事のないやうに専心に、必ず此一つの矢で射當てようと、心に考へる。」と教へられた。僅か二本の矢である、その一本を誰も師の前で疎かにしようとは思

らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學ぶ人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、重ねて懇に修せん事を期す。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らんや。なんぞ唯今の一念において、直にすることのはなはだかたき。

◎もろ矢。二筋の矢。「もろ」は「ニツノ、アマタノ」などの意をいふ接頭語。◎たばさみて。手に挟み持つて。弓を射る時には、一手とて矢二筋を同時に、手に挟み持つていふ。◎初心の人。道に初めてたばさる人。◎なほりの心あり。おろそかにする心がある。「なほざり」は「直ぞあり」の約言。「直」はタゞの意。物事に心を深く用ゐない事をいふ。◎毎度たゞ得失なく。毎度専心に損得利害なく。一矢は射はずしても、二矢を射當てさへすればよいといふやうな事なく、専心に。◎この一矢に定むべし。この一矢によつて射あてよう。◎おろそかにせんと思はんや。忽にしようと思ふであらうか、思ひはしまい。「や」は反語。◎懈怠の心みづから知らずといへども。懈怠心の生ずる事を、射る人自身は知

はない。随つて懈怠の心があらうなどは、射る人自身では知らないけれど、師匠はちやんと弟子の心の弛緩を洞察してゐるのである。この誠は單に弓術のみでなく、萬事に通じて應用する事が出来るであらう。例へば、道を學ぶ人が、夕には朝ある事を考へ、朝は夕のある事を思ひ、後刻、再び念を入れて修行しよう、常に未來に望をつないで、豫め心に定め、現在を怠つて終ふ。ましてかくの如き人は、刹那の間に於いて、わが心の中に懈怠心のあることに気がつかうか、つかない。

らぬけれども。「懈怠」とは、なまけ忘れれる義。菩薩本行經、「夫懈怠者、衆行之累、在家懈怠、則衣食不供、産業不舉。出家懈怠、則不能出離生死之苦。」古歌に、「心こそまどはす心なれ、心に心ゆるすな。」◎師これを知る。師は懈怠心ある事を知る。◎このいましめ萬事にわたるべし。此弓射る事についての訓戒は凡ての事に通じてであらう。◎夕には朝あらんことを思ひ。夕には明朝があらうといふ事を考へて、自然に懈怠心が起るとの意。朱文公勸學文、勿謂今日不學而有來日、勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。論語、「朝聞道夕死可矣。」◎重ねて懇に修せんことを期す。再び丁寧に修行しようといふことを心に豫め定める。朝には夕を、夕には明朝を思つて、今の刹那を忽にする懈怠心が起るをいふ。「れんころ」は「れんころ」の音便、「根ヲ凝」の義で情のまとはる意。「期す」を「期せり」とした本もある。◎懈怠の心ある事を知らんや。懈怠心のあるといふ事を當人が知らうか知りはしない。◎なんぞ。ナセ。以下兼好が即刻に道を修める事の出来ぬのを難詰した詞。◎唯今の一念において。現在の刹那に於いて。◎單にする事のはなはだかたき。時を經過せず即刻、道を修める事が甚だ難しいのか。

どうして、その爲さうと思ふその刹那に、直ちにその事を修行する事の難いのであらうか。

【大意】

「人は一日の長命が萬金よりも貴い。この貴重な生命を愛さず、存命の喜びを樂まぬは、無常を忘れ死の近いを知らぬからだ。然し、生をも樂しまず、死をも畏れぬ所謂生死を超越した人は、不生不滅の眞理を悟つた人で、それは格別だ。」といふ事を、牛を賣買する人の話につけて述べてゐる。

【通釋】

「牛を賣る者がある。買ふ

九十三段

「牛を賣るものあり。買ふ人、明日その價をやりて牛を取らんといふ。夜の中に牛死ぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり。」とかたる人あり。これを聞きてかたへなるもの、いはく、「牛のぬし、まことに損ありといへども、また大なる利あり。その故は、生あるもの死の近きを知らざること、牛、既にしかなり。人またおなじ。はからざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛のあたひ、鵝毛よりもかろし。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず。」といふに、皆人嘲りて、「その理は、牛の主に限るべからず。」といふ。又いはく、「されば、人死を惜まば生を愛すべし。存命の

人が明日その代償を拂つて、牛を引き取らうといふ。然るに、夜の間に牛が死んだ。すると買はうとする人の利益で賣らうとする人の損である。」と語る人がある。この話を聞いて居た傍の人の評に、「いかにも牛の持主に損失はある。しかし、一面からは、又、大いなる利益がある。其理由は、生ある者は死といふものが近く追つて居て、いつ死ぬかわからぬが、其事をば誰も知らずにある。既に牛がその一例である。人も之と同様だ。然るに、偶然牛は死んで持主は存命した。この存

よろこび日々たのしまざらんや。愚かなる人このたのしびを忘れて、いたづがはしく、外のたのしびを求め、この財を忘れて危く他の財を貪るには、志満つことなし。生ける間、生を樂まずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生を樂まざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。もし又、生死の相に與らずといはゞ、まことの理を得たり。」といふに、人、いよく嘲る。

◎牛を取らんといふ。牛を引き取らうといふ。◎買はんとする人……損あり。以上の假定した事柄に對する或人の考を述べたのだ。◎かたへなるもの。傍にある者が。兼好自身をかく婉曲に指したのだ。◎死の近きを知らざる事。慈鎮の歌「皆人の知り顔にして知らぬかな、必ず死ぬる習ひありとは。」◎牛既にしかなり。牛が既にその通りである。牛は夜の間に死んで終ふ事がわからずに賣買の契約を取り交されたのいふ。◎人またおなじ。人もまた牛同様自己の死

命の一日は、萬金よりも貴い。それから見ると牛の價などは鴨毛よりも軽い。些些たるものだ。この萬金の命を得て、僅か一錢を失つた人に、損失があるとは言へない。」といふので、一座の人が皆嘲つて、その理論は單に牛の持主に限らず、凡ての人に通用が出来るといふ。傍の人が再び語を續けて、「さうだから人が死を惜むならば、生きてゐる間の時間を大切に送るがよい。この存命の歡樂といふものは、日々味はずには居られないものだ。所が愚人はこの歡樂を忘却して、煩はしくそ

を知らぬ。◎はからざるに牛は死し……主は存せり。牛も人も共に生死の巷にありながら、なほ且、死の近いことを知らないでゐて、思ひ掛けないに牛は死に、思ひがけないに牛の飼主は命存してゐる。「はからざるに」は「心に思ひ圖らぬに」の意。不意に、偶然になどいふ意。◎一日の命萬金よりもおもし。一日の長命が、萬金の値よりも貴重だ。大智度論曰「設滿世界寶、無有直身命。」◎牛のあたひ鴨毛よりもかるし。生命の貴重なるに比べると、牛一頭の値段は鴨毛の軽いよりも軽い。司馬遷の語、「人固有二死、或重於大山、或輕於鴨毛。」◎萬金。牛の飼主の一日の長命をさす。◎一錢。牛の値をさす。◎皆人嘲りて。傍の人の言葉を一座の者が皆嘲り笑つて。◎その理は牛の主に限るべからず。「一日の命萬金より重く、牛の價鴨毛より輕し……損ありといふべからず」といふ道理は、飼主許りでなく他の人も皆生存してゐる事であるから、單に牛の飼主のみに限らないであらう。一般の人の上に通じた道理だとの意。◎又いはく。傍の人、即ち兼好が再び言ふことに。◎されば。接續詞。萬金を得て……損ありといふべからずといへるを受けて、サウデアアルカラシテというたのだ。◎人死を憎まば。人が死といふものを憎み嫌ふならば。孟子「生亦我所欲、死亦我所欲。」◎生を愛すべし。自己生存中の時々刻々を大切に有意義に送

が出来よう。」と申されたから、某は北面の職を解かれて終つた。「斯様な場合には馬に乗つてゐるまゝで、勅書を高く捧げて見せ申す筈のものだ。決して下馬してはならぬ。」といふ事だ。

【大意】
手箱、文箱の緒のつけ方を書いてある。

【通釋】
「箱の蓋のくりがたの穴に緒をつけるには、どちらの方へつけるのがよいでせうか。」と、或人が故實に明かな人に尋ねました時に、「軸につける説

始まる。上北面(諸大夫で殿上の北面二間を詰處とする)と、下北面(五位六位の侍で北の築地に沿うた五間屋を詰處とする)とある。◎かほごの着いかでか君に仕うまつり候べき。これ程の事理をわきまへぬ者が、どうして君にお仕へ申す事が出来ませうか、出来ない。「か」は反語。◎北面を放たれにけり。その武士が北面の職を解かれて終つた。◎馬の上ながら。馬の上に乗つたまゝで。「ながら」はそのまゝの意で他語を副詞とする助詞。◎下るべからずとぞ。馬から下りてはならないと言ふ事である。

九十五段

「箱のくりがたに、緒をつくる事、何方につけ侍るべきぞ。」と、ある有職の人にたづね申し侍りしかば、「軸につけ、表紙につくこと兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は、多くは右につく、手箱には軸につくるも、つねのことなり。」と仰せられき。

と、表紙につける説とあるから、どちらにつけてもわるくない。中でも文の箱は多くは右方につけ、手箱には左手につけるのが普通の事だ。」と仰せられた。

【通釋】
めなもみといふ草がある、娘に整された人は、この草をもんで付けると、すぐになほるといふ事だ。萬一の用意に、その草を見知っておくがよい。

◎くりがた。箱の蓋に栗の實の形に似た半圓形の穴をあけてある所をいふ。緒をとほす爲の穴。◎軸につけ、表紙につくこと、兩説なれば。左方に付ける事と、右方に付けることとの兩説であるから。軸とは左、表紙とは右、「左右」とは詩繪の本を我が手前にしての別けがたである。昔の書物は皆巻物である、そこから文をいれる箱の左右を軸がた、表紙がたといふのだ。◎いづれも難なし。どちらに付けてもよろしい。◎文の箱。消息文を入れて人に送る箱。「ふばこ」といふ。◎手箱。手許のものを入れる小さい箱。◎つねのことなり。普通の事である。

九十六段

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見知りておくべし。

◎めなもみ。稀簽草。莖は眞直で、枝は節毎に向ひ合せて出る、葉には三つの角と細い毛とがあり、秋、黄色の小さい花をつける。本草に「稀簽は莖葉頰向

蒼耳。」とある所から、蒼耳の事も俗にめなみと言うてゐる。「蒼耳治毒蛇并射工等傷、嫩葉一握研取汁、和温酒而灌之、痔、淫厚毒、傷處。」などである。◎くちばみ。蝮。

九十七段

そのものにつきて、そのものを費しそこなふもの數を知らずあり。身に虱あり。家に鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

◎その物につきて。その物に寄生して。◎數を知らずあり。數を知らぬ程深山ある。◎身に虱あり。是から例を擧げて説明するのだ。身體に寄生してその身を害するものに虱がある。◎小人に財あり。小人は財寶の爲にその身を過るをいふ。「小人璧を抱いて罪あり。」などいふも同じ。◎君子に仁義あり。仁義は君子の殉ふ道である。然し、君子はその仁義の爲に身を害する事があるといふのだ。比下が紂王を諫めて胸を裂かれ、伯夷叔齊が武王を憤つて首陽に餓死し

【大意】その物についてその物を害する物六種を擧ぐ。

【通釋】その物に寄生して、その物を害する物は、無數にある。人の身體には虱。家には鼠。國には賊。小人には財がある。又、君子には仁義がある、僧には佛法がある。

たのは、皆仁義の爲である。◎僧に法あり。僧は佛法の爲に反つて身を破る事があるをいふ。僧侶が法に囚はれて、それ以上に出づる事を知らぬをいうたのである。維摩經「法猶可捨而況非法。」止觀云、「觀法雖正着心同邪。」

九十八段

たふときひじりのいひおきけるを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども。

一、しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうはせぬはよきなり。
一、後世を思はんものは、糞瓶一つも持つまじきことなり。持經、本尊にいたるまで、よきものを持つ、よしなきことなり。

【大意】

一言芳談中、兼好會心の筒條五つを、摘出してゐる。

【通釋】

尊い高僧がいひおいた事柄を書きつけて、一言芳談とか名付けてある書物を見ましたに、氣に入つた筒條があつた。それは、一、爲さうか爲すまいかと思案するやうな事柄は、大方爲さない方がよい。

謂「支同。」◎徳人。有徳の人、富める人の意であるが、茲では富者をさす。◎能ある人は無能になるべきなり。能ある人はその才能をかくして恰も無能の如くであるのがよいのである。老子「爲而不恃、功成而不處。」又曰「君子盛徳、容貌如愚。」以上此節の下藹、愚者、貧人、無能は皆眞の下藹。愚者・貧人・無能の意ではなく、只上藹でも其高い位に居ないで下藹の如くし、智者も其の智を輝かさず愚人を装ひ、富者も貧人の如く見せかけ、才能ある人も無能の人の如く其才能を人に見せないのがよいのであるといふ意。◎佛道を願ふ。佛の道に歸依して成佛する意。◎暇ある身になりて。萬事をなげすて、靜かな身になつて。◎この外もありしことも覺えず。以上の外にも會心の事柄があつたけれど、兼好自身で今略記し居らぬといふのだ。

九十九段

堀河の相國は、美男のたのしき人にて、その事となく、過差をこのみ給ひけり。一子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけり。

【大意】堀河相國が廳屋の唐櫃を作り改めようとした所が、傳來の器物は改めずにはならぬといふので、

止めにして終つた。

【通釋】堀河太政大臣は、容貌の美しい、心持ちのよい人で、何事につけても、分に過ぎた派手な事を好まれた。その人が子の基俊卿を檢非違使の別當にして、廳の政務をとらせた折、太政大臣が廳の役所の唐櫃が見つともないからというて、立派に作り換へられるがよいと仰せられたに、この唐櫃は昔から傳つてゐて、その起源がわからぬ。兎に角數百年経つてゐる。かういふ世々相傳つて來た公の器物は、古くなつて破損してゐるのを手本とす

るに、廳屋の唐櫃見苦しとして、めでたく作り改めらるべきよし、仰せられるに、この唐櫃は上古より傳はりて、そのはじめを知らず、數百年を経たり。累代の公物、古弊をもつて規模とす。たやすく改められ難きよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

◎堀河相國。岩倉内府具實公の一男、久我太政大臣源基具公。◎美男のたのしき人。美しい男で心持ちのよい人。美男の「たのしき」は「たのしき美男の」といふのと同様だ。◎その事となく。その事と定つた事なく、何事につけても。◎過差。身分に過ぎた立派さ。◎一子。一本には御子とある。◎大理。檢非違使別當の唐名。職原抄、「檢非違使、此云使廳、淳和天皇御宇天長年中初置之、異朝尤重此職。」◎廳務。檢非違使廳の政務。廳は政を聞く場所。職原抄「朝家置此職以來、衛府追捕、彈正糾彈、刑部判斷、京職訴訟、併歸使廳。」◎廳屋。檢非違使の役所。◎唐櫃。訴訟文書など入れる櫃で、「からう」ともいふ。長持の形で、兩脇に一本づつ、前後に二本づつ、合せて六本の脚がある。

る。容易に改作する事が出来ぬ。」といふ趣を、故實に明かな諸官人が申上げたから、改造の金はやめになつた。

【通釋】
久我の相國が、殿上で水を御取寄せになつた時に、主殿司が土器に入れて差上げたれば、曲物に汲んで持つて来いとおつしやつて、曲物で御飲みになつた。

◎めでたく。立派に。◎仰せられけるに。堀河相國が仰せられたのに。◎累代。代々。◎公物。公の器物。◎古弊。古く破れてゐる。◎規模。模範。手本の意。◎たやすく改められ難きよし。容易に改作する事がむづかしい趣。◎故實の諸官。古の法令儀式作法等に明かな諸官人。韋昭曰、「故實故事之是者。」即ち手本とすべき古の法令儀式作法の事柄。◎その事やみにけり。唐權改作の事が止んで終つた。

百 段

久我の相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司、土器をたてまつりければ、まがりをまゐらせよとて、まがりしてぞめしける。

◎久我相國。六條大臣顯房公の御子、太政大臣雅實公。◎水をめしけるに。水を御取り寄せになつた時に。「めす」は本來看す(見るの敬語)の意であるのが、「見る」というて、我身に事を引き受ける意から食ふ・飲む・着るの意となり、更に轉じて、取り寄す・呼び寄す・招くの意となつたものだ。◎土器。「どき」と訓む、素焼のやきもの。かはらけ。◎まがり。俗にいふ曲物のこと。

ある人、任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへりとするべきにもあらず。思ひわづらはれけるに、六位の外記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

百 一 段

ある人、任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへりとするべきにもあらず。思ひわづらはれけるに、六位の外記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

◎任大臣の節會。大臣に任せられる時の儀式。節會とは節日の集會。その日は朝廷で饌を賜ふ儀がある、依つて今は饌を賜ふ事を以て節會といふ。元日の節會、七日白馬の節會、十六日踏歌の節會を三節會といふ。又、冬の節會に豊明の節會がある。此外、立后、立坊、任大臣、相撲の節會などがある。◎内辨。

【大意】
任大臣の節會の内辨を勤めた人が、宣命を持たずに堂上せられたのを、外記の康綱が自分の才覚で、女房をして其宣命を忍びやかに内辨の手許に届けさせた。

【通釋】
或人が任大臣の儀式の内辨といふ役を勤められた時、内記の持つてゐる宣命を受取らないで、紫宸殿へ上られた。これは非常な失策であるけれど、さりとして、立ち歸つて取

つて来る事の出来るものでもない。この事に気がついてから、心配されたに、六位ノ外記といふ役の康綱が、衣がづきの女房に談合して、忘れていつた彼の宣命を持たせて、ひそかに内辨の手許まで届けさせた。甚だ殊勝の事であつたわい。

節會の時の上卿。貞丈雜記「内辨外辨といふは禁中公事を行はるゝ日の奉行を内辨といふ。即ち上卿の事なり、外辨は内辨の次にて、内辨の手傳をす。役なり。」江次第、任大臣節會の條に「第一大臣、於承明門内、辨備諸事、故曰内辨。第二大臣、於門外、辨備諸事、故曰外辨。」◎内記。うちのしるすつかさといふ。中務省の官人で、大内記、少内記の二内記がある。詔勅宣命を事を司る。又五位以上の位記を奉し、禁中一切の事を記す役。職原抄「備門之中、堪文筆者任之、草詔勅宣命、故也。」◎宣命。詔勅を國語で書いたもの。立后、立太子又は大臣を任じる時などに用ゐられる。上卿が勅を承つて内記に仰せて作らせ、先づ内記その草稿を奏し、次に満書して再び奏覺を經、後に内記に返し給ふ。それを節會の時内辨が取つて、笏に持ち添へて堂上する。◎堂上。御殿へ上ること。◎きはまりなき失禮。至極の失禮。振舞に慎みのないことをいふ。◎たちかへりとするべきにもあらず。内記の座まで返つて取る筈のものでもない。◎思ひわづらはれけるに。心を悩したに。◎六位外記康綱。正六位上權大外記、中原康綱。外記とは太政官の主典、大外記、小外記に別れ、記録を司る。職原抄、「大外記二人、相當正六位下上、近代五位。小外記三人、相當正七位上。」◎かたらひて。談合して。◎しのびやかに奉らせけり。ひそかに内辨の手許まで届

けさせた。◎いみじかりけり。兼好の批評の詞。立派な才覺であつたわい。「けり」は過去の助動詞であるが、詠歎の意を含めて用ゐたのである。

百一段

尹大納言光忠入道、追儼の上卿をつとめられけるに、洞院左大臣殿に次第を申し請けられければ、「又五郎をのこを師とするより外の才覺候はじ。」とぞのたまひける。かの又五郎は、老いたる衛士の、よく公事に馴れたるものにてぞありける。近衛殿着陣したまひける時、膝突を忘れて外記を召されければ、火をたきて候ひけるが、「まづ膝突を召さるべくや候ふらん。」と、忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

◎尹大納言。彈正の尹で大納言を兼ねた人。彈正臺とは、京中及び五畿七道の非違を糾彈する所、後には洛中の巡檢許りを司る。この彈正臺の長官を尹とい

【大意】公事になれた老衛士が、才覺のあつた物語。

【通釋】尹ノ大納言光忠入道が、追儼の上卿をつとめられた時、洞院右大臣殿に、儀式の手續を傳授下さるやうに御願ひされた所が、右大臣殿は「又五郎といふ男を師とするより以上のよい算段はあるまい。」といはれた。その又五郎は古い衛士で、よく公事になれてゐる者であつた。かつて、近衛殿が

陣座にお着きになつた時に、膝突を忘れて、外記をお呼びになつたれば、その時又五郎が火を焚いて居つたが、その呼ぶのを聞いて「まづ膝突を御召しにならうとするので御座いませう。」と、小聲で言うたのが、甚だおもしろくあつたわい。

ふ。戦原抄「彈正尹、多任親王、或大納言以上兼之。」◎光忠入道。源光忠公。出家してから、法名を賢忠といふ。◎追儼の上卿。追儼の儀式を奉行する役人。◎洞院右大臣殿。右大臣藤原實泰公。又號後山本。◎次第を申し請けられければ。儀式の順序を、尋ねられたれば。◎又五郎のこ。實泰公の指圖の詞。「このこは、賤しい男子の名の下につけて呼ぶ語。平家「舍人男が誓を切り。」◎師とするより外の才覚候はじ。師とするより外にはよい工夫算段はあるまい。◎かの又五郎は……有ける。兼好の詞。◎衛士。左右衛士府（後には衛門府といふ）の官人で、宮門の守をする者、諸國の軍團から一年づゝ交るゝ都に參るを衛士、三年づつ交代に筑紫の守に行くを防人といふ。◎近衛殿。誰なるか不明。◎著陣したまひける時。節會の時の陣座にお着きなされた時。陣座とは節會の時、禁中で官人の着席するところ。◎膝突。膝の下に敷くすべり。三尺四方許りのもの。◎外記を召されければ。近衛殿が外記を御呼びなされたからして。膝突を取り寄せさせようとしてあらう。◎火をたきて候ひけるが。又五郎が火を焚いてをられたが。◎まづ膝突を召さるべくや候ふらん。又五郎が云うた詞。早く膝突を御召しなさらうとするので御座いませうか。◎忍びやかにつぶやきける。又五郎がひそかに小聲で獨りごとをいうたのが。◎

【大意】

大覺寺殿の御所で、忠守が公明卿の謎に立腹して退出した物語。

【通釋】

大覺寺殿で、近習の人たちが、謎々を作つて謎合をしてゐられた所へ、醫者の忠守が入つて來た。所が、侍従大納言公明卿が「我朝のものとも見えぬ忠守かな。」と、謎々にせられたのを、人がそれを唐瓶子と解いて、笑ひ合つたから、忠守は腹立つて退出して終つた。

いとをかしかりけり。兼好が賞美の詞。甚だめでたくあつたわい。

百三段

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞくをつくりてとかれけるところへ、くすし忠守參りたりけるに、侍従大納言公明卿、「我朝の者とも見えぬ忠守かな。」と、なぞくにせられけるを、唐瓶子と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかり出にけり。

◎大覺寺殿。後宇多法皇を申し奉る。法皇は嵯峨の大覺寺に御隱遁なされてゐたので大覺寺殿といふ。こはた後宇多院の御所をいふ。◎近習の人ども。君の御傍近く仕へまつる人々。◎なぞく。かくし言葉。「なぞくを」とは隱言を言ひ出して何ぞくといひかけ、それを言ひあてる事をいふ。◎くすし忠守。丹家康頼十一世孫忠守、典藥頭内院昇殿歌人、正四位下。丹家は歸化人である。◎侍従。おもとびといふ。中務省の官人、常に主上に近侍する。拾遺補闕の官で、二十人許、三人は少納言が兼任し、稀に大納言參議などが兼任

する。◎公明卿。正親町三條の庶流。◎我朝の者とも見えぬ忠守かな。唐瓶子といふ爲の謎である。「我朝の者とも見えぬ」は唐である。忠守は清盛の親の忠盛の意に解し忠盛は平氏だから唐瓶子と解くのだ。忠守と忠盛は調が同じく平氏と瓶子は音が相通してゐるところから、斯く言うたのだ。◎腹立ちてまかり出にけり。忠守が立腹して御殿を退出して終つた。

百四段

【大意】
荒れた宿に徒然と籠れる女の許に、或男が尋ねて行つてまめやかなる物語に一夜を明した折の事を、周囲の光景を巧みに調和させて描き出してゐる。
【通釋】
女が遠慮する事のある頃で、人目淋しい荒れた宿に、怠屈さうに籠つて居

荒れたる宿の人めなきに、女の、はゞかることある頃にて、つれづれとこもりゐたるを、ある人、とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなき程に、しのびて、たづねおはしたるに、犬のことくしく咎むれば、げす女の出でて、「何處よりぞ。」といふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心細げなる有様、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に暫時立ち給へるを、もてしづめたるけはひのわかやかなるして、こなたへといふ人

たのを、或人がおり舞なさらうとして、夕月夜の道が薄暗い時分に、ひそかに尋ねて行かれたに、犬が仰山に吠え立、たから、下女が出て来て、「何處からお出でございませうか。」といふのに、そのまゝ案内をさせてお入りになつた。その住居は物淋しさうな有様で、どうしてこんな所に其日を送られるのだらうかと思ひやられて、甚だ氣の毒な感じがした。暫時、粗末な板敷に立つて待つて居られるのを、氣を落ち着けた様子の若々しい聲で、「こちらへ入つしやい。」と、いふ人があるから、

あれば、たてあけ所狭げなるやり戸よりぞ、入り給ひぬる。内のさまはいたくすさまじからず。心にくゝ火はあなたにほのかなれど、ものゝきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる。御車は門の下に、御供の人はそこく。」といへば、「今宵ぞ安きいはぬべかめる。」と、うちさゝめくも忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。さてこの程の事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鶏も鳴きぬ。こしかた行末かけて、まめやかなる御物語に、この度は、鶏もはなやかなる聲にうちしきれば、明け離るゝにやと聞き給へど、夜ぶかく急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、隙しろくなれば、忘れ難きことなどいひて立ち出で給ふに、梢も庭も珍しく青みわたりたる、卯月ばかり

開閉の扉アタテ加さうな遺戸から、はいりなされた。家の内はひどくは荒れてゐない。奥床しく、灯はあちらの方に、幽かについてゐるけれども、物の綺麗などもよく見えて、俄に焚いたのではない薫物の香ひなど、なつかしくして、住みついてゐる。門をよく閉ぢてお置きよ。雨が降るかも知れない。御車は門の下に、御供の人は何アツく休んで預け。などと下郎に命じると、彼方では「今晚は氣樂に眠むらしよう。」などと私語する、皆コソツリ言ふのであるが、室が遠く離れてゐないから、かすか

のあけぼの、艶スベにかしかりしをおぼし出でて、桂カツラの木の大きなるが隠るゝまで、今も見送り給ふとぞ。

◎荒れたる宿の人めなきに。人の見る目もない、淋しく荒れた家に。この句は「つれづれ」との句に續くのだ。◎女のはゝかることある頃にて。女が慎み遠慮する事のある頃で。物忌などの折であらう。◎とぶらひ給はんとて。見舞をなさうとして。◎夕月夜。夕方月のある頃。月の上旬で月が夕方だけかすかに照る、その頃の夕。◎おぼつかなき程に。道が薄暗く心もとない時分に。◎犬のことくしく咎むれば。犬が仰山ギョウサンに怪しみ吠えたからして。◎げす女。賤しい女。下女。◎やがて案内せさせて入り給ひぬ。そのまゝ、その女に先導をさせて入りなされた。◎心細げなる有様、いかで過すらんといと心ぐるし。尋ねて行つた女の住居が、頼み少く物淋しさうな有様で、どうしてこんな處で目を過すのであらうかと思はれて、甚だ氣の毒に思ふ「心ぐるし」とは人の迷惑する所を見ると、自分も同情して心が苦しく感じるといふ意で、氣の毒の義に用ゐる。◎あやしき板敷に。粗末な板敷の所に。◎立ち給へるを。男がすぐに内へ入らずに立つて待つて居たのを。◎もてしづめたるけはひの、わかやかなるして。氣を落着けた様子の若々しい聲で。「もてしづめたるけはひの、わかやかなるふ人あれば。こちらへ入つしやいと言ふ人があるから。女房達の詞であらう。

に聞える。さて女主人に此頃の様々の事柄などを詳しくお話し申す中に、まだ夜ふかい一番鶏も鳴いた。それにもかまはず、過去から將來に渡つての眞實な御物語をする中に、此度は鶏もはれやかな聲で頼りに啼くから、明けはなれるのであらうかと思ふけれど、早朝に急いで歸らねばならぬ所の様子でもないから、少し躊躇して居られたに、戸の隙間などが明るくなるから、忘れがたい事など言うて、外へお立ち出でなされるに、袖も庭も珍らしく青味を持つてゐる卯月頃の、曉の景色

◎たてあけ所狭げなる。戸の開閉の窮屈さうな。「所狭げ」は「所狭し」といふ形容詞の語根に、接頭語の「げ」の添うたもの。◎内のさまはいたくすさまじからず。家の内の有様はひどく荒れてゐない。「いたく」というたのは、外の景色の荒れてゐるのに對して、内の有様は、外面程は荒れてゐないのを表す。◎ものゝききらなどは見えて。燈火で物の美しさなどが見えて。「きら」は「あや」の意。「ものゝき」は調度などのあやなものであらう。◎俄にしもあらぬにほひ。急にたのほしく常に焼いてゐる薫物のほひ。「し」は意味を強める助詞、「も」は感動詞。次に「な」が薫つてゐて「いふ語を置いて考へる。◎門よくさしてよ。門をよく鎖トズして置けよ。女房達が下部などに命ずるのであらう。◎雨もぞふる。雨が降るかも知れぬ。「雨が降つては困る」との意を響かせてゐる語。◎御車は門の下に、御供の人はそこアツく。御車は門の下に入れ、御供の人は何處々々で休んで貰へといふ意。◎今宵ぞ安きいはぬべかめる。今晩は安かに寝られるであらう。「い」は寝ることの名詞、「ぬ」は寝るといふ動詞。下衆女達が荒れた宿の淋しいので、夜も安眠が出来なかつたのに、今宵は來客があるので、安眠が出来たらうといふ意。◎うちさゝめく。私語する意。「うち」は接頭語。◎忍びたれど。ひそかに言うてゐるけれど。◎ほどなければ。下衆女の

が、優雅に面白くあつた。それを思ひ出して、その邊を通る時は、其處の桂の木の大いのが物かけにかくれて見えなくなるまで、今でも振り返つて見なさるといふ事だ。

居る場所と客間との間が遠くないからして。◎さて。接續詞。之から訪問の客と女主人との間の有様を述べるのだ。◎この程の事ども、こまやかに聞え給ふに。この間の色々の事柄などを細かにお話なされる間に。男の方で話すのだ。◎夜ぶかき鶏も鳴きぬ。夜明けまでは時間のある一番鶏もないた。◎こしかた行く末かけて。過去から將來を兼ねて。女主人の物語するをいふ。◎まめやかなる御物語に。眞實な御物語をなさるにつけて。◎はなやかなる聲に。花々しい聲で。夜が明けて鶏の聲も花々しく聞えるのだ。◎うちしきれば。「うち」は接頭語。「しきる」は度重る意。度重れて鳴くからして。◎明け離るゝにや。明け離れるのであらうか。女の心もち。◎夜ぶかく。夜の明け離れぬ暗い間をいふ。「夜ふけ」といふと夜が段々深くなる意。夜ぶかく」とは朝の暗く早い頃をいふ。◎急ぐべき所のさまにもあられば。急いで歸らねばならぬ所の様でもないからして。人目の淋しい所だから夜が明けても別に人に見られる心配がないのだ。◎たゆみ給へるに。心を油断して躊躇していらつしやる間に。◎ひましろくなれば。隙間が明るくなるからして。◎梢も庭も……わたりたる。梢も庭も珍しく青味を帯んでゐる。新緑の萌え出る頃の朝景色である。◎卯月。陰曆四月の稱。卯の花の咲く月の意。◎あけぼの。夜のほんのりと明るくなつた頃。◎艶にをか

しかりしをおぼし出でて。優雅で面白くあつた其光景を、其以後になつても思ひ出して。◎桂の木の大いなるが云々。今其處を通る時は、その庭にある大い桂の木が物にかくれるまで。拾遺「君が住む宿の梢をゆくも、かくる、までにかへりみしはや。」◎見送り給ふとぞ。見送りなさるといふ事である。即ち人の身の上の話であるから「とぞ」というたのだ。

百五段

北の屋かげに消え残りたる雪の、いたうこほりたるに、さしよせたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれたる御堂の廊に、なみくにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらん、つきすまじけれ。かぶしかたちなどいとよしと見えて、えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそ、

【大意】有明の月さやかに照る廊に、尋常ならぬ男女の物語れる様を、兼好が見たまに書きつけたのだ。【通釋】家の北の蔭に、消え残つて居る雪が、ひどく凍つてゐるに、引き寄せてある車の轆も霜がひどくキラキラして、空には、有

明の月が冴えてゐるけれど、木影などに遮られて薄暗くないではないのに、人氣ヒトゲばなれてゐる御堂の廊で、尋常ではないと見える男が、女と長押に腰を掛けて、物語をして居る様子が、何事か話すのかわからぬが綿々と盡きないやうだ。女のうなだれてゐる恰好など甚だよいと見え、そして、一通りでない薫物の香が、サツトかをつてゐるのが、おもしろく感じられる。話の様子なども、切れ切れに聞えたのもなつかしい。

をかしかしけれ。けはひなど、はつれく聞えたるもゆかし。

◎北の屋かげ。家の北方の蔭。◎消え残りたる雪の。消え残つてゐる雪が。春の初梅の花に冴える月の光に冬の名残がまだ立ち去らぬ頃の事であらう。朗詠にある窓梅北面雪封、寒といふ趣が見えてゐる。◎いたうこほりたるに。甚しく凍つて寒さうに見えてゐる其場所に。「いたう」は「いたく」の音便。◎さしよせたる。引き寄せてある。「さし」は接頭語。◎車のながえ。車の梶カサボウ棒。◎きらめきて。キラ／＼輝き光つて。轅の上に置く霜が、月の光にキラ／＼と輝く様である。◎有明の月。月の十六日以後の夜明け。又は「有明」とは月がまだ空にありながら夜の明けを意で一月の十六日以後の夜明け。◎影がないではないのやかなれども、隈なくはあらぬに。明かではあるけれど、影がないのではない。木影などにさはつて暗い處もあるものであらう。◎人ばなれたる御堂の廊。人の来ない御堂の廊下。◎なみくにはあらす。尋常ではない。◎なげし。「ながおし」の約。長押、承塵などと書く。鴨居又は敷居の外側に長く横にわたしてある木。◎つきすまじけれ。盡きない様である。◎かぶしかたち。うなだれてゐる姿。古事記などに「うなかぶし」などある「かぶし」の名詞形で、傾いてゐる姿の意。◎いとよしと見えて。甚だよいと見えて。◎さとかをりたるこ

そ。着物などに薫物してある香などであらう、それがサツトよい匂がしてゐるのが。◎をかしかしけれ。おもしろい。◎けはひ。話の様子をいふ。◎はつれく。一部分／＼の意。きれくなどいふと同じ。

百六段

【大意】
證空上人が京へ上る途中、馬に乗つた女に向つて、思ふまゝの放言をした語。
【通釋】
高野の證空上人が京へのぼつた途中、細道で馬に乗つた女が來合はせたが、馬の口取りの男が馬を下手に引いて、上人の乗つてゐる馬を堀の中へ落して終つた。上人は非常に腹がたなく咎めて、

高野の證空上人、京都へのぼりけるに、細道にて馬に乗りたる女の行きあひたりけるが、口ひきける男あしく引きて、聖ひじりの馬を堀へおとしてけり。ひじり、いと腹あしく咎めて、「こは、希有きうの狼籍かな。四部の弟子はよな、比丘びくよりは比丘尼びくには劣り、比丘尼びくにより優婆塞うはさくは劣り、優婆塞うはさくより優婆夷うはひは劣れり、かく優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の悪行なり。」といはれければ、口引きの男、「いかに仰せらるゝやらん、えこ

「これは、めつたにない亂暴な事であるわい。四部の弟子といふも、はなア、比丘よりは比丘尼の方が劣り、比丘尼よりは又優婆塞の方が劣り、優婆塞よりも優婆夷の方が更に劣つてゐる。斯様に最下等の優婆夷の分際で、比丘である自分を堀へ蹴入れさせる事は、未曾有の悪行である。」と言はれたれば、口取りの男が「何とおつしやるやら、私には意味がわからぬ。」と答へるにつけ、上人は一層怒つて「何をいふのか、この非修非學の男め。」と荒々しく言うて、「この上ない悪口を言う

そ聞き知らね。」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ、非修非學の男。」と、あらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひけるけしきにて、馬ひき返して逃げられにけり。たふとかりけるいさかひなるべし。

◎高野の證空上人。紀州高野山の證空上人。證空の傳不詳。法然上人の弟子にも證空といふがあり、三井寺にも弘法の弟子の證空がある事は、實物集中卷に見えてゐる。◎女の行きあひたりけるが。女が向ふから來て、出であひました。◎女にゆきあひ」とあると自分の方から行つて女にいであふ意。◎口ひきける男。馬の口を引いてなつた男。女に乗つてる馬の口とりの男をいふ。◎あしく引きて。下手に引いて。◎聖の馬。證空上人の乗つてる馬。◎堀へおとしてけり。堀へ落して終つた。てけりは過去完了の助動詞。◎腹あしく。腹ぎたなく。頑固に咎めたのをさして、いふのだらう。◎こは希有の狼籍かな。これは、めつたにない亂暴な事であるわい。狼籍とは、狼が草を薙いて寝た跡で、其草が散亂してゐる事から出た語で、濫りがはしい。亂暴・散亂などの意。◎四部の弟

た。」と思つた様子で、馬を引き返して、逃げられた。これは實に、貴かつた口論であらう。

子はよな。四部の弟子といふものはナア。「よ」も「な」も共に感動詞。四部とは、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。即ち釋迦の弟子をかく四部に部類したのだ。之を四衆ともいふ。◎比丘、比丘尼。比丘を乞士といふ、出家した男の稱。女の出家を比丘尼といふ。◎優婆塞、優婆夷。在俗のまゝ佛門に入り佛の五戒を守る男女の稱。翻譯名義集、比丘名乞士、清淨活命故。又翻云除饑。比丘尼、通稱女爲尼、尼得無量律儀故應次比丘。又稱阿姨。優婆塞名信士男、優婆夷名信士女、又云清淨士清淨女。雖在居家、持五戒、男女不同宿故云善宿男女。◎優婆夷などの身。馬に乗れる女を指す。◎比丘を堀へ蹴入れさせる。比丘の自分を堀の中へ蹴入れさせる事は。◎未曾有。未だかつてない。稀有といふ程の意。◎え、こ聞き知らね。意味が了解出來ぬ。「しらね」の「ね」は打消の「ず」の第三終止形で上の「こそ」に照應してゐる「聞き知るを得ず」の意。◎いきまきて。怒つて息ざしが荒くなるをいふ。◎何といふぞ非修非學の男。なんといふのか。コノ非修非學の男奴の意。非修非學は佛道を修めず學問をせぬ意。◎きはまりなき放言しつ。この上ない悪口をした。非修非學と放言したのを極りない悪口と思つたのだ。◎たふとかりけるいさかひなるべし。貴かつた口論であらう。兼好の評語。女に對つて、遠慮會釋もなく悪口して、そして言ひ過ぎたと

氣がついて逃げ去つた其愛着なく又無邪氣なのを感心したものと見える。

百七段

【大意】
「女に話し掛けられた時、男がそれに程よい返事をする。ことは、六ヶ敷事だ。」というて、龜山院の御時、女房達が、男の返事振を試験した事を述べ、「凡て男は女に笑はれぬやうに育てるがよい。」とて、淨土寺前關白殿・山階左大臣殿の例を挙げ、「女のなほ世ならば、衣紋も冠もつくるふ人はあるまい。」といひ、轉じて、「男の耻しく思ふ女といふものは、實につまらぬものだ。」とて、仔細に説

女のもの言ひかけたる返事、とりあへずよき程にする男は、ありがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男たちの参らるゝごとに、「時鳥や聞き給へる。」と問ひて、試みられけるに、某の大納言とかや、「數ならぬ身は、えきゝ候はず。」と答へられけり。堀河内大臣殿は、「岩倉にて聞いて候ひしやらん。」と仰せられたりけるを、「これは難なし。數ならぬ身むづかし。」など、定めあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬやうにおふしたつべしとぞ。「淨土寺前關白殿は、をさなくて、安喜門院のよく教へ參せさせ給ひける故に、御詞などのよきぞ。」

明し、「そのとるにも足らぬ女を優しく面白いものだと思ふのは、男の迷つた心からである。」と斷じてゐる。

【通釋】

「女が何か物を言ひ掛けた時の返事を、すぐさま適當にする男は、メツメニないものだ。」と云うて、龜山院の御時に、院に仕へてゐる、一と風變つた女房共が、年若い男たちの参内せられる毎に、其者に向つて、「時鳥をお聞きになりましたか。」と尋ねて試してみられたに、某の大納言とかは、「數ならぬ卑しい私は、聞きえません。」と答へられ

と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「あやしの下女の見奉るも、いと耻しく、心づかひせらるゝ。」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠も、いかにあれ、ひきつくるふ人も侍らじ。かく人に恥ぢらるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚しく、物の理を知らず、唯まよひの方に、心もはやくうつり、詞もたぐみに、苦しからぬ事をも、問ふ時はいはず、用意あるかと思れば、又あさましき事まで、問はずがたりにいひ出す。深くたばかりかざれる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、その事、あとよりあらはるゝをも知らず。すなほならずして、つたなきものは女なり。その心に隨ひて、よく思はんことは、心うかるべし。されば、何かは、女のはづかしからん。もし、賢女あらば、それも、

だ。堀河内大臣殿は「岩倉で聞きましたやら。」とおつしやつた。そこで「堀河殿の答は難がない。大納言の「敷ならぬ身。」といはれたのは難がある。」など、評定しあはれた。すべて、男をば女に笑はれないやうに養成しなくてはならぬといふ事だ。淨土寺前關白殿は、幼少の時から安喜門院がよくお教へ申されたから、女などと言ひ交される御詞などが拙くない。」と、人は評されたとかいふ事だ。又山階左大臣殿は「賤しい下女が殿を見申すのさへも、甚だしく耻ぢて、氣遣ひせられる。」と仰つ

ものうとくすさまじかりなん。たゞまよひをあるじとして、かれに随ふ時、やさしくも、おもしろくも覺ゆべきことなり。

◎女のもの言ひかけたる返事。女が話し掛けた時の返事。◎とりあへずよき程にする男云々。若い男は女の前では、兎角、心が臆して持つてる才氣も顯れぬものだ、だから女の間に對して、直ぐさま適當な返事をする男は、メツタニない。「よき程」の「よき」はカナリの意。程に叶うてゐる意。「とりあへず」は物を取る暇もなくスグサマの意。◎しれたる女房ども。一風人と變つた女房共。しれたる」とは愚かなる意であるが、此處は痴愚といふよりも「世にたがへるしれものにて過し侍るぞや。」とあるやうに、普通の人は變つてゐるといふ意。女房は龜山院に仕へる女房。◎参らるゝ。龜山院へ参内するをいふ。◎大納言とかや。「か」も「や」も共に疑問の助動詞。◎敷ならぬ身。物の敷に入らぬやうなつまらぬ我身。◎堀河内大臣殿。堀河内大臣基具公の息、具守公。岩倉内大臣と號す。◎聞いて候ひしやらん。聞きましたやら。「やらん」は疑問をあらはす。略して單にヤラともいふ。疑問の「や」と「あらん」と合したものの。◎これは難なし。堀河内大臣の答は非難する點がない。◎敷ならぬ身むづかし。

た。若しも女のない社會であらうなら、着物の着なし、冠のかぶり方など、どうでもよい、整へ飾る人もあるまい。然るに、それ程に男に耻ぢられる女は、どれ程エライものであるかと思ふに、女の性質は皆ヒネクレてゐる。他人と自分との差別を立てる事が深く、食欲が甚しく、その上、物の道理がわからない。たゞ迷の方面に心が早くうつり、詞づかひも巧に、別に差問のない事でも、人が聞く時は答へない。さうかといふて、深い思慮があるかと思ふと、又呆れ果てるやうな事をまで、誰も

敷ならぬ身と、女に對して、大納言ともあらう人が、自分を卑下したのは難がある。◎定めあはれけり。女房共が評定しあはれた。◎おふしたつべしとぞ。育てあげればならぬと、いふ事だ。◎淨土寺前關白殿。九條殿師教公、號三巴心院。又號淨土寺。◎なまなくて。幼少の時よりの意。◎安喜門院。後堀河院の女御、淨土寺太政入道公房公の女、藤原有子のこと。門院は女院と同じく、皇后又は國母などの佛門に入りて門院號を贈られ給うたもの、稱。◎教へ參せさせ給ひける。お教へ申された。「まゐらせ、させ、給ひ」と敬語を三重に使つてゐる。◎御詞などのよきぞ。女などに對して言はれる御言葉などが拙くないぞ。◎山階左大臣殿。洞院左大臣、實雄公。◎あやしの下女。賤しい下女。◎いと恥しく心づかひせらるゝ。甚だ恥しく思つて氣遣ひせられる。◎女のなき世なりせば。モシモ女が無い社會であらうならば。「せば」の「せ」は過去の「き」といふ助動詞の未然形で、「ば」とついでて未定の條件をあらはす。◎衣紋。衣服。着物の着こなし。◎いかにもあれ。どうでもよい。◎ひきつくるふ。體裁よく整へ飾る意。「ひき」は接頭語。◎かく人に。以上述べた通り男に。◎いかばかりいみじきものぞ。ドレ程エライものか。◎ひがめり。ヒネクレテ居る。◎人我の相深く。他人と自己との差別を立てることが深い。◎食欲。飢くまで慾の

問はぬのに自分から語り出す。人を偽り欺く事は男の智慧以上かと思ふと、その偽りがあとから露見するのに気がつかない。不正直で、且、心のきたないものは女だ。その女の氣に入るやうにして、よく思はれようなどといふ事は、心外な事だ。以上言ふ通りであるから、何で男が女に對して耻しい事があらう。もし世間に賢女といふものがあるとすれば、その者も何となく疎ましく興味の無いものであらう。只迷つた心に導かれて、色に溺れる時のみ、女といふものはやさしくも、面

深いこと。◎まよひの方に、心もはやくうつり。迷ふ方面に心も早く移つて行く。正しい事柄には心が進まないが、食欲名利などの迷ひの方面には早く心が進んでゆく。◎苦しからぬこと。答へても別に差^{サシツカ}問のない事。◎問ふ時はいはず。此方から尋ねる時は答へない。◎用意あるかと思れば。用意して深い思慮があるかと思つて見ると。◎あさましき事。肝の潰れ、呆れるやうな事。◎問はずがたり。不問語の意。人が問ひもしないに、自分から語り出すをいふ。◎たばかり。人を欺き。◎その心に隨ひて。以上の如く女の心は、深いかと思へば淺く、正直でなくて、愚かなものだから、そんな女の心に隨つて。◎心うかるべし。心ういイヤナ事であらう。◎何かは。何ミテマア。「か」は反語。「は」は感動詞。◎ものうとく云々。何んとなう、うとましく、面白くないものであらう。「もの」は何となくの意。「うとく」は親しみのないをいふ。女の賢く才氣のあるのは温味^{アタカ}がなく、反つて凄味^{スゴ}が見えて懐しくないをいふ。◎まよひをあるじとして。迷つた心を主として。迷つた心に導かれての意。◎かれに隨ふ時。女に隨ふ時。女色に溺れる時。◎覺ゆべきことなり。感ぜられることである。

白くも、感ぜられるのである。

【大意】人は寸陰の空しく過ぎるを惜まなくてはならぬ。常に死の近い事を心に思つて、油断なく後世を營むがよい。一日の中でも、佛道をつとめる暇は僅かなものだけに、これを怠るのには最も愚かである。かく寸陰を惜む理由は、觀念修行して後世を思ふが爲である。

【通釋】僅かの光陰を惜む人がない。これはよくその惜むべき道理を知つてゐて惜まないのか。それとも愚かで惜むべき道理を知ら

百八段

寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人のために言はゞ、一錢輕しといへども、これをかさぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の、一錢を惜む心切なり。刹那おぼえずといへども、これをはこびてやまざれば、命を終ふる期、忽にいたる。されば道人は、遠く日月を惜むべからず、只今の一念、空しくすぐることを惜むべし。もし人きたりて、我命明日は必ず失はるべしと、告げ知らせたらんに、今日の暮るゝ間、何事をかたのみ、何事をか營まん。我等が生けるけふの日、何ぞその時節にことならん。一日の中に、飲食、便利、言語、行歩、止むことを得ずして、多くの時を失ふ。その

ないで惜まないのか。愚かであつて怠つてゐる人の爲に一言いふならば、例へば一錢の金は些細な者だが、之を積み重ねると、貧乏人を富者とす。故に商人は一錢を惜む心がねんごろである。之と同様で、短時間の経過するのには、さまでに感じないけれど、この短時間を経過するのが度重つて止まなければ、死ぬ時期が直に來る。それだから、道に志す人は、永い歲月といふ纏つた時間を惜んではならぬ、たゞ現在の短時間が、むだに過ぎて行くのを惜まればならぬ。もし人が來て、自分の

あまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時をうつすのみならず、日を消し月をわたりて、一生を送る。尤も愚かなり。謝靈運は、法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀せしかば、惠遠白蓮のまじはりをゆるさざりき。しばらくもこれなき時は、死人におなじ。光陰何のためにか惜むとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。

◎寸陰惜む人なし。僅かな光陰の過ぎて行くのを惜む人がない。淮南子「聖人不貴三尺壁而重寸陰、時難得而易失也。」◎これよく知れるか。愚かなるか。寸陰を惜まないのは、よくその道理を知つてゐてこれを惜まないのか、それとも、愚かであつて知らずに惜まないのか。◎言はし。光陰の重んずべき理由を一言するならば。◎切なり。懇である。痛切である。◎刹那おぼえずといへども。僅かな時間の経過するのには感じないけれども。◎これをはこびてやまされ

命が明日は必ず失はれるであらうと告げ知せたとすると、今日の暮れるまでの間、何事を頼み何事を營むであらうか、何事も頼まず營まぬであらう。自分等の生きてゐる現在も、矢張其死を告げられた時と異なる事が無からう。

ば。刹那を運び去つて止まなければ。◎道人。佛道に心がける人。智度論「得道者名爲道人。」◎遠く日月を惜むべからず云々。歲月といふ纏つた長い時間を惜んではならぬ。長い時間の間には、必ず寸陰の含まれてゐるものであるから、只現在の刹那の無駄に経過するのを惜まればならぬ。◎何事をかたのみ、何事かを營まん。何事をか頼みに思ひ、何事を營みなすであらうか、何事も頼まず又營まぬであらう。◎何ぞその時節にことならん。どうしてその死の迫れる事を告げ知らせられた時と異なることがあらう、異ならない。だから常に無益の事をせず、後生を願はねばならぬ。◎便利。大小便をすること。◎行歩。歩くこと。◎止むことを得ずして。據なく。◎あまりの暇。やむ事を得ないで失ふ時間以外の時間。自分の思ふままになる時間。◎思惟。考へ思ふ。◎月をわたりて。月にわたりての意。「を」は自動詞の標準を示す助詞。「に」と同じ。即ち月を歴る意。◎謝靈運。宋の元嘉中、永嘉ノ守であつた人で、文章をよくし類延之と共に並稱せられた。◎法華の筆受なりしかども。法華經の譯に筆執つた程の佛教に熱心な人であつたけれどもの意。されど、法華經は管の羅什の譯にて、その弟子僧叡が筆受であつたのである。筆受とは梵語を翻譯するのを漢字に書き寫すといふ。◎風雲の思を觀せしかば。天下の大事變といふ

る。之は最も愚かな事なり。謝靈運といふは法華經の筆受をした程、佛教に熱心な人であつたけれど、常に天下の大事變に乗り出さうといふ浮世心を抱いて居つたので、惠遠は、彼を、必ず俗なもの、落着かないものだとして、自分の主催してゐた佛道を修する目的の白蓮社へ出入する事を、許さなかつた。といふ話がある。

暫時でも、寸陰を惜む心のない時は、死人と同様である。さらば何故に光陰を惜むのかと、ふと、心内に名聞利欲の考なく、観念工夫せんとする人は、觀念工夫し、俗事に關係する事なくて、佛道に關

思を抱いて居つたからして。風雲に乗じて東管の社禪を回復しようといふ心がけてゐたことはいふ。風雲は英雄豪傑が名を現はすべき機會となる如き天下の大事變をいふ。「觀する」は、心に思ひ浮べる意。◎惠遠白蓮のまじはりをゆるさず、りき。惠遠が靈運に白蓮社、社中の人となることを許さなかつた。惠遠は管代の人、廬山虎溪の東林寺に住し、その院に白蓮を多く植ゑ、賢士を招いて會をなした。白蓮社はその院に會合する社中の名。◎これなき時は、寸陰を惜む心のない時は。◎何の爲にか惜むとならば。何のために惜むのかと言ふならば。◎内に思慮なく。心の内には利欲名聞の考がなく。◎外に世事なくして。外面には浮世の事柄に關係する事がなくて。◎止まん人は止み。悟らん人は悟り。止むは止觀の意。◎修せん人は修せよ。手足を働かして修行しようといふ人は修行せよ。修は修行の意。

百九段

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木にのぼせて、梢を切らせしに、いとあやふく見えしほどは、いふこともなく

修行しようと思ふ人は修行せよといふのだ。

【大意】

木のぼりの話に托して、「凡て危険なところでは誰も心をひきしめて失敗は無いものだが、やすい所に油断が出来、過失もあるものだ。」といふことを述べてゐる。

【通釋】

木のぼりの名人だと言つてゐる男が、人を指圖して高い木にのぼらせ、梢を切らせたと、甚だ危く見えた間は何とも言ふ事もなく、反つてそれが下りて来て軒程の高さの處になつてから、過をするな、氣をつけておろる。

て、下るゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな、心しておりよ。」と、ことばをかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るともおりなん。いかにかくはいふぞ。」と、申し侍りしかば、「そのことに候ふ。目くるめき、枝あやふきほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず仕ることに候ふ。」といふ。あやしき下藨なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も、難き所を蹴出して後、やすくおもへば、必ず落つると侍るやらん。

◎高名の木のぼりと。名高い木のぼりだと。◎人をおきてて。人を指圖して。おきては捉をする意。◎軒だけばかりになりて。軒の高き程の處になつて。◎あやまちすな、心しておりよ。高名の木のぼりの詞。過失をすな。注意しておろる。◎かばかりになりては。これ程の低い處になつては。兼好が高名の木のぼりに尋れた詞。◎そのことに候ふ。高名の木のぼりの答。其事でございま

と注意した。それを見てゐた兼好が「これ程になつては、飛び下りても下りられるであらう。どうしてその様、注意をするのか。」といふと「さればでござります。日がまわるやうな枝のあぶない高い處にある間は、自分から危険だと思つて、恐れ恒みずから、別段注意を與へません。過失は樂な處になつてから、必ずするものでござります。」と答へた。賤しい下腐の言葉だけれど、聖人の訓誡に叶つてゐる。蹴鞠でも困難な處を蹴出してからのち、安心すると、屹座落ちるとかいふ事であ

す。さればでござります。◎日くるめき。眼まひがする。くるめくはくるくゝ回る意。◎おのれが恐れ侍れば申さず。自身が危いと思つて慎んでゐますから別に注意を與へない。◎あやしき下腐なれども。兼好が高名の木のぼりの詞を評する語。賤しい下品な者の言うた言葉であるけれども、その言ふ事の事柄はの意。◎聖人のいましめになへり。聖人の訓戒の趣旨にあつてゐる。易繫辭曰。「君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂、是以身安而國家可保也。」◎鞠も難き所を蹴出して云々。前の意味を補ふ爲に蹴鞠の事について再説するのだ。難き所は、困難な蹴にくい處。蹴鞠も蹴にくい困難なところを蹴出して後、樂だと思ふと屹座落ちるものだと言つてありますやう。

百十段

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たんとつべからず、負けじとつべきなり。いづれの手か、とくまけぬべきと案じて、その手をつかはすして、一目なりとも、

る。

【大意】

雙六の事につけて、修身治國の消極的方を説く。

【通釋】

雙六の名人だといふた人に、その勝つ手段を尋ねました所が「勝たうと思つて打つな。負けまいと考へて打つがよい。何れの手が早く負けるかと、思案して、その早く負ける手を用ゐないで、一目でも遅く負ける手を使ふがよい。」と教へてくれた。これは道を辨へてゐる人の教で、身を修め、國を保つ道も、又この通りである。

おそく負くべき手につくべし。」といふ。道を知れる教、身を脩め、國を保たんと道もまたしかなり。

◎雙六の上手といひし人に。雙六の名人だといふ人に向つて。◎そのてだてを問ひ侍りしかば。雙六に勝つ手段を尋ねたれば。◎勝たんとつべからず。勝たうと思つて打つてはならぬ。勝たうと思ふ時は必ず敵を侮る心があるから油断が出来ぬのを戒めたのだ。◎負けじとつべきなり。負けまいと思つて打たればならない。負けまいと思ふ時は心が緊張して隙がないからである。◎案じて。考へて。◎道を知れる教。以上は物事の仕方(カク)を辨へてゐる人の教で。◎身を脩め國を保たんと道も。自己の身の行を修め、又は一國を治め保持する方法も。大學「身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。」◎又しかなり。又その通りである。

百十一段

圍碁、雙六好みて、あかしくらす人は、四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふ。」と、あるひじりの申し、こと、耳にとゞまりて、

【通釋】「團茶雙六を好んで、夜を明かし日を暮す人は、四重五逆の罪を犯したよりまさつてある悪事であると思ふ。」と、或る上人の言はれたことが、今に耳にとまつて、感心な事に思はれる。

【大意】差し追つた大事に臨んだ人は、たとひ社会的交際をしなくても、世人は決してそれを非難しない。だから老人病者、又は遁世者は、早く俗世間と離れて終ふがよい。世俗の儀式にかゝらうてゐて

いみじく覺え侍る。

◎團茶。博物志。「堯造團茶、以數子丹朱、或曰舜以子商均愚、故、作團茶、以數之、其法非智不能也。」◎あかしくらす人。夜を明かし日を暮す人。◎四重。四重禁戒の略。殺生・偷盜・邪淫・妄語の四つをいふ。この禁戒を犯したものは再び僧となられない。故に之を犯すのは極重の罪とする。◎五逆。殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血をいふ。◎いみじく覺え侍る。感心に思はれます。

百十二段

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかになすべからんわざをば、人言ひかけてんや。俄の大事をも營み、切に歎く事もある人は、他の事を聞き入れず、人のうれへよろこびをも問はず。問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば、年もやうく

は、菩提に赴く暇がなくて一生を終はる。殊に老人病者は、日暮れて道遠い感がある。偏に後世を營まればならない。

【通釋】明日遠國へ旅立つといふ人に向つて、心開かになさればならぬやうな悠長な事柄を、誰も言ひかけようか、いひかけはすまい。葬式などのやうな俄の大事を營み、頻りに愁嘆する事のある人は、他人の言ふ事などを、耳にも入れなければ、人の愁や喜などの見舞をも言はない。又、見舞を言はぬからというて誰も「なぜ言はぬのか。」と、咎める

たけ、病にもまつはれ、況や、世をも遁れたらん人、又これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗のもだしがたきに隨ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雜事のざまじ小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ途遠し、吾生既に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ、この心をも得ざらん人は、ものぐるひともいへ、現なし、情なしとも思へ。譏るとも苦まじ、譽むとも聞きいれじ。

◎赴くべしと。旅立たうと。◎聞かん人に。聞かう人に向つて。言はう人に向つてといふと同じ意であるが、こなたを主としていうので、かくいうたのである。◎心しづかになすべからんわざ。心ゆるやかになさればならぬ事業。◎言ひかけてんや。言ひかけるであらうか。「てん」は未來完了の助動詞。◎俄の大事。急の尋常ならぬ事件。人の病死葬送などをいふ。◎他の事を聞き入れず。

者もない。年若い、病に絡みつかれ、まして、世を逃れてならう人も、亦これらの人と同様で、人の愁や喜を見舞はねばならぬと、いふ筈がなからう。人間のこの世で爲す事柄は、何れの事でも棄て難いものだ。それであるに、世間の風習に隨はずに黙しては居られないというて、其等の事を必然的に爲さうと思ふなら、隨つて願望も多く身も苦しく心の暇もなく、一生涯は雑多な小節に妨げられて、空しく過ぎて終はう。自分の修めねばならぬ道の事を考へると、日暮れて途の遠い感

他人の事などを耳にとめない。◎問はずとて、などやと。他人の喜憂を尋ねないというて、なぜ尋ねないかと。◎年もやう／＼たけ。年も次第に多くなり。◎まつはれ。「まとはれ」に同じ。絡み附かれるをいふ。此句と、前の「年もやう／＼たけ」といふ句は共に中正形で、次の「世をも遁れたらん人」といふ「たらん」につゞくべきである。即ち、年若いであらう人、病に絡み付かれてあらう人の意。◎又これに同じかるべし。又、遠國へ旅立つ人俄の大事を替む人と、同様であらう。◎人間の儀式。人が俗世界に在つてなす處の事柄。儀式とは、普通、公事祭事祝儀などの手續の作法をいふのだが、こゝでは單に俗世間の事柄をいふ。◎いづれの事が云々。何れの事が退け捨て難くないか、皆捨て難い。◎世俗のもだがたきに。世間の風習といふものが、黙して手を出さずに、置きがたいのに。「もたす」は黙して止むこと。◎これをかならずとせば。儀式を必然爲さうとするなら。◎一生は雑事のムダ小節にさへられて。一生涯は、種々雑多の小さい義理の爲に妨げられて。◎空しく暮れなん。空に暮れて終はう「なん」は未來完了の助動詞。◎日暮れ途遠し。己が修むべき道は澤山ある、それを成し遂げるには前途が遠い事であるのに、自分が此世に居る時間は甚だ少い、恰も旅人が日は暮れて終つたのに、歩かねばならぬ道のまだ遠いが如くである

がある。そして自分の生涯は已に蹉跎として、死期に近い。今は世俗の諸關係を棄てればならぬ時だ。信義をも守るまい、信義をも考へまい。この心を了解しない者は、狂人だとも言へ、正氣のなやつだ、不人情なやつだとも思へ。たとひ毀られても苦むまい。また、められた所で、それを聞き入れしすまい。

【大意】
似合はないで見苦しいもの、聞き悪く見苦しい事を、並べてある。

【通釋】
四十歳以上の人が、その好色めいた性情を、自然、

の意。白樂天の詩、「日暮而途遠、吾生已蹉跎。」◎吾生既に蹉跎たり。吾が身は最早年若い足がヒヨロツイテゐる。蹉跎はツマツイテ進むことの出来ぬこととて、人が志を得ないのに喩へていふ。楚辭「馳垂二兩耳兮、中阪蹉跎。」張九齡「夙昔青雲志、蹉跎白髮年。」◎諸縁を放下すべき時なり。自分の身邊にある諸の事情を投げ棄てればならぬ時である。◎信をも守らじ、禮儀をも思はじ。俗世間の信義をも守るまい、また禮儀をも思ふまい、只ひとへに佛道に親まうとの意。◎この心をも得ざらん人。佛道に親しむ所の此考を了解しないだらう人。◎ものぐるひ。狂人。◎譏るとも苦まじ、譽むとも聞き入れじ。たとひ人がわれを誹つても苦くも思ふまい、譽めてもそれを聞き入れまい。世間の毀譽褒貶を超越する意。

百十三段

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらんは、いかゞはせん。ことにうち出でて、男女のこと、人の上をも、いひたはるゝこそ、にげなく見苦しけれ。大かた、

外見に露れないやうに注意してをらう場合は、何としよう、仕方がない。無遠慮に、言葉に出して、男女の事、或は、人の上を言ひ戯れるのは、年に釣合はないで見苦しい。大體、聞きにくく、見苦しいのは、老人が若い人に仲間入りして、興があらう爲に何か言うたり、數にならぬ卑しい身分であつて、當時、世に時めいてゐる人を親しくあるかのやうに人に語つたり、又は食乏な家で酒宴を好んで客人に御馳走しようとなつて振舞つたりする、それらの事である。

聞きにくく、見ぐるしきこと、老人の、若き人にまじはりて、興あらんと、物いひゐたる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を、隔なきさまにいひたる、貧しき所に、酒宴好み、客人に饗應せんときらめきたる。

◎色めきたるかた。色好みに見えてゐる點。◎おのづから忍びてあらんは。自然外に露れないやうにしてをらう人は。◎いかゞはせん。なんとしよう、仕方がない。◎ことにうち出でて。言葉に出して。◎いひたはるゝこそ。言ひ戯れるのは。たはるはたはむるの意。◎にげなく見苦しけれ。年に釣合はず見苦し。◎興あらんと物いひゐたる。興味があらうとして何か言うてゐたのが聞きにくく見苦しい。◎世のおぼえある人。世の人によく思はれてゐる人。「覚え」は思はれて、人に思はれることの意。◎隔なきさまにいひたる。自分と隔てなく仲のよいやうに人に語つてゐるのが、聞きにくく見苦しい。◎貧しき所に。貧乏な家で。◎客人に饗應せんときらめきたる。客人に馳走をしようと思つて華美にしたのが見苦しい。きらめくは光り輝く意。

百十四段

【大意】
菊亭兼季公が嵯峨へ行かれた折、馭者のさい王丸が、高名をした詰。爲則が知らぬ道の事を、さも知り顔に評して叱られた失敗談。太秦殿の女房が珍しい名であつた事。

【通釋】
今出川の大臣殿が嵯峨へ行かれた時、有栖川の邊の水の流れてゐる處で、馭者のさい王丸が、御牛を驅けさせたから、牛の足掻の水が、車の前板までサ、とか、つたのを、家來の爲則が車の後の方

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸御牛をおひたりければ、あがきの水、前板まで、さゝとかゝりけるを、爲則、御車のしりに候ひけるが「希有の童かな。かゝる所にて、御牛をば追ふものか。」といひたりければ、おほい殿、御氣色あしくなりて、「おのれ、車やらんこと、さい王丸にまさりてえ知らじ。希有の男なり。」とて、御車に頭をうちあてられにけり。この高名のさい王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はことづち、一人ははうばら、一人はおとうしと、つけられけり。

に乗つて居つたが「珍しくあきれはてた童であるよ。こんな處で御牛を驅けさせる事があるか。」と言つたから、大臣殿の御顔の色がわるくなつて、「其方は車を進ませる事は、さい王丸以上には知り得まい。けしからん男だ。」というて、爲則の頭を車へぶつつけて叱られた。この手柄をしたさい王丸は、太秦殿の下男で、御召料の牛飼であるよ。この太秦殿に近侍して居た女房の名前など、一人はひざさち、一人はことづち、他の一人ははうばら、一人はおとうし、といふやうな、一風變つた

◎今出川のおほい殿。菊亭兼季公。◎おはしけるに。いらつしやつた時に。◎有栖川。一説に齋宮の野宮の傍にある小川をいふ。歌枕に「千早振る齋の宮のありす川、松と共にぞ影はすむべき。」君まさぬ御空は荒れてありす川、いむ姿をもうつしつるかな。」などと歌うてゐる。又一説に、太秦から法輪に行く道にある小川ともいふ。◎さい王丸。牛の馭者の名。◎御牛をおひたりければ。御牛を急がしたからして。◎あがきの水。足掻きの水。足で掻き散らす水。◎前板。車の前にある板。◎ささ。水のかゝる音。◎御車のしりに候ひけるが。車の後の方に乗つて居つたが。即ち車のしりに乗つて御供をしてゐたのだ。◎希有の童。爲則がさい王丸を叱る詞。牛飼は年老いても丸額で髪を長くし童のやうに結ぶので童と呼ぶのだ。名の下には丸の字をつけることになつてゐる。◎御氣色あしくなりて。御機嫌が悪くなつて。◎おのれ。その方。爲則をさす。◎車やらん事。車を進ませる事。◎さい王丸にまさりてえ知らじ。さい王丸よりも、勝つてそれ以上に知る事は出来まい。◎頭をうちあてられにけり。爲則の頭を車へ打ちあてられた。「にけり」は過去完了の助動詞。◎この名のみさい王丸は。この手柄をしたさい王丸は。即ちさい王丸が牛を追ふことを知つてゐたのをさしていうのだ。◎太秦殿。内大臣信清公。◎男。下男。召し使はれ

ものであつた。

【大意】

宿河原で、しらす梵字といふ虚無僧が、いろおし坊に對して、師匠の復讐をして、共に死んだ物語。

【通釋】

宿河原といふ處で虚無僧が多勢集つて、彌陀の念佛を唱へて居た。其處へ外から入つて來た虚無僧が「もし、あなたがた。皆さんの中に、いろおし坊といふ虚無僧が居られますか。」と尋ねた。その仲間の一人が「いろおしは此處に居る。この

る男。◎料の御牛飼。太秦殿の召料の牛飼。◎ひざさち。膝幸。◎ことづち。幹槌。◎はうばら。胞腹。◎おとうし。乙牛。

百十五段

宿河原といふ所にて、ぼろぼろ、おほく集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入り來るぼろぼろの、「もし、この中に、いろおし坊と申すぼろやおはします。」と尋ねければ、その中より、「いろおし、こゝに候ふ。かくのたまふは誰ぞ。」と答ふれば、「しらす梵字と申すものなり。おのれが師なにがしと申し、人、東國にて、いろおしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、恨み申さばやと思ひて、尋ね申すなり。」といふ。いろおし、「ゆゝしく尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝに

やうにお尋ねなされるのは誰であるか。」と答へた。「しら梵字といふ者であらうた者が、東國でいるおしといふ虚無僧に殺されたと聞いて居るから、其當人に逢うて復讐をしようと考えて、お尋ねするのだ。」といふ。いろいろおしは「よくマア尋ねて來られた。たしかにあなたのお仰つしやるやうな事があつた。然し、此處でお相手申すならば、道場を汚しますでせう。前の河原でお立合ひ申さう。側に居るお方がた、決してどちらへも助太刀しなされるな。大勢の人の難儀に

て對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ参りあはん。あなかしこ、わきざしたち、いづ方をも見つぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし。」といひ定めて、二人河原に出であひ、心ゆくばかりに、貫きあひて、共に死にけり。ぼろぼろといふもの、昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひけるもの、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て、我執ふかく、佛道をねがふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慙の有様なれども、死を軽くして、少しもなづまざる方の、いさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

◎宿河原。攝津國にある。◎ぼろぼろ。暮露、又、梵論などと書く。虚無僧のこと。◎九品の念佛。九品淨土の念佛即ち彌陀念佛をいふ。念佛修行の勝劣に

なるならば、佛事の妨になりませう。」と言ひ定め、二人が河原へ出で合つて、思ふ存分、互に貫き合うて死んで終つた。一體、ぼろぼろといふ者は、昔は無かつたのであらうか。近頃になつてから、梵論字、梵字、漢字などというた者が、その始であるとかいふ。このぼろぼろは、外面、世を捨て、あるやうで、その實自我の念が強く、又佛道を願ふやうな風であつて、鬪諍を専らとしてゐる。か様に放逸無慙の有様であるが、死ぬ事を軽く思つて、少しも滯滞しない點は、深く思はれて、今、

よつて淨土の往生に九等の別があるので九品の淨土といひ、これを願ふ爲の念佛を九品の念佛といふ。念佛は阿彌陀佛の名號を唱へること。◎恨み申さばや。恨を申したい。「ばや」は希望をあらはす助詞。◎ゆゝしくも尋ねおはしたり。よくマア尋ねて御出でになつた。◎さること侍りき。さやうな事があつた。◎道場。もとは、僧侶が靜心修道の處、即ち精舎・寺院の意。後には武道を練る場所をいふ。◎河原へ参りあはん。河原へ行つて、向ひ合はう。◎わきざしたち。側に居る人たちの意。「たち」は複數の意を添へる接尾語。◎見つぎ給ふな。助太刀しなされるな。見つぐは助ける意。◎わづらひにならば。難儀になるならば。◎さまたげに侍るべし。さまたげで御座いませう。◎心ゆくばかりに。思ふ存分に。◎世をすてたるに似て。外面は俗世を脱離してゐるやうで。虚無僧を兼好が評する詞。◎我執ふかく。自我の念が強い。自分に執着する事が深い。◎鬪諍を事とす。争ひを專一とする。◎放逸。ほしいままで遊樂にふけること。◎無慙。自分の放逸の行を恥づる心のないこと。◎なづまざる。拘泥しない意。生に拘泥して滯り滞つて居らないこと。◎いさぎよく。卑怯でなく、きれいである意。

人が語つたまゝに書付けたのだ。

【大意】物に名をつけるには、ありのまゝに平易なのがよい。珍しい事や異説を好むは、淺學の人のすることだ。

【通釋】

寺院の名でも、或はさうでない他の萬の物の名でも、その名をつけるに、昔の人は、少しも六ヶ敷い義理を穿鑿しない。たゞ飾らず、平易に付ける。然るに、此頃は深く考へて、自分の才覚を顯はさうとしてゐるやうに聞えるが、甚だわづらはしい。人の名でも、見馴れない

百十六段

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくること、昔の人は少しも求めず、たゞありのまゝに、やすくつけけるなり。この頃は深く案じ、才覚をあらはさんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目なれぬ文字をつかんとする、益なきことなり。何事もめづらしき事を求め、異説を好むは、淺才の人の、必ずあることなりとぞ。

◎さらぬよろづの物。また、さうでない其外のもろ／＼のもの。◎求めず。わざ／＼むづかしい義理を穿鑿せず。◎ありのまゝにやすく。飾らずに平易に。◎深く案じ才覚をあらはさんと。深く考へて自分の機智を世間にあらはさうと思つて。◎聞ゆる、いとむづかし。思はれるのは、甚だわづらはしい。◎目なれぬ文字をつかんとする。見馴れない珍しい文字を付けようとするのは。◎淺

文字の名を付けようとするのは、益のない事だ。

何事でも珍しい事を求めたり、異説を好んだりするのは、才學の淺い人の、必ず爲る事だと云ふ。

【大意】

友とするに惡しいものが七、よいものが三つある。

【通釋】

友達とするに惡い者が七種ある。一には身分の高く貴い人、二には年若い人、三には病をした事がない身體の強い人、四には酒を好む人、五には猛くて元氣のある人、六には虚言を吐く人、七には欲の深い人。よい友達に

才。學才の淺いこと。◎とぞ。といふ事である。

百十七段

友とするにわるきもの七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には猛く勇める人、六にはそらごととする人、七には欲ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二にはくすし、三には智慧ある人。

◎友とするに。論語「益者三友、損者三友、友直友諒友多聞、益矣、友便辟、友善柔、友便佞、損矣。」◎高くやんごとなき人。身分が高く貴い人。高位高官の人と交る時は、常に自分を屈して、心にもない諂辭を言ふから、惡友とするのだ。◎若き人。年若い人。血氣盛んに分別のないのを嫌ふのだ。陸放翁「少年豪英之交、不如同參夜雨。」◎病なく身つよき人。無病強壯の人は、自然、

三種ある。一には、物をくれる友、二には醫師、三には智慧のある友。

人に對する同情心のないものだ。◎酒をこのむ人。酒を好む人は、事が亂れて曲事の出来るものだ。◎猛く勇める人。かういふ人は、一旦の憤怒に身を忘れて、父母の憂を殘し、又は暴虎馘河の行があるものだ。◎そらごとする人。朋友に信義のない時は、友として價值がないからだ。◎欲ふかき人。欲深い人は友として交り難い。勢利の交は君子の憎むところ、論語にも「放於利而行多怨」とある。◎ものくるゝ友。子路が「願車馬衣輕裘。與朋友共。敝之、而無憾。」と言つたやうに、物をくれる程の人は、物質を超越した高い交が出来たものだ。◎くすし。醫師。◎智慧ある人。智慧のある人を友とすると啓蒙の資となるからだ。歎徳經云、「賢友者萬福之基也、現世免王者之牢獄、死則杜三途之門戶、升天得道皆賢友之助矣。」

百十八段

鯉のあつものくひたる日は、鬚そけすとなん。膠にもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉、さうな

【大意】鯉の効能を述べ、魚類では鯉、鳥類では雉、野菜では松茸が貴い品物である事を言ひ、序に「雁は貴人の御目近い場所に置

くべきでない。」といふ故實を、記してある。

【通釋】

鯉の養を喰うた日は鬚の毛がほつれないと云ふ事だ。この魚は膠にも製す物だから、ねばつたものであらう。鯉ばかりは貴い人の御前でも料理されるものであるから、貴い魚だ、鳥類では雉がならびなく貴い。雉・松茸などは、料理の間のやうな奥深い場所にも入り込んであるものも差がない。其外のものには、さう奥まで持ち込んであつては面白くない。曾て、後深草院の中宮の御料理の間の黒塗りの棚

きものなり。雉、松茸などは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は、心愛きことなり。中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山の入道殿、御覽じて、かへらせ給ひて、やがて御文にて、「かやうのもの、さながら、その姿にて、御棚にゐて候ひし事、見ならはず。さま悪しき事なり。はかばかしき人のさぶらはぬゆるるにこそ。」など、申されたりけり。

◎鯉のあつもの。鯉の養、鯉のあたゝかい汁。◎鬚そけすとなん。鬚の毛がほつれないといふ事である。「鬚」は頭の左右の側の毛。◎膠にもつくる。魚を膠にれるを鯉といふ。項碎錄「鯉魚の膠を墨に磨りて身にさせば、青黒にして髪すべし。」◎御前にても。貴い人の御前でも。◎切らるゝものなれば。料理されるものであるからして。「切らるゝ」の「るゝ」は受身。玄旨法印が鯉の庖丁をなさると「このしわざ、事々しきやうなれど、天子の御前にて鯉を切る時は、音楽に合する物なる故、かやうに習ひ傳ふる事なり。」と言つたことがある。◎やんごとなき魚。貴い魚。鯉は龍門に昇る魚で、昔から禮魚として貴ばれ、孔

に、雁が載つて居たのを、西園寺實氏が御覽になつて、御家へお歸りになつてから、直に、御手紙で「雁のやうな物が、そのまゝの姿で、御棚の上に置いてあつた事は、見馴れない事である。之は實に見つともない。それも、畢竟、故實に明かなしつかりした人が、居らないからであらう。」などと申された。

子も子息の名に鯉魚と名づけた程である。◎鳥には雉、さうなきものなり。鳥では雉がならびなく貴いものだ。◎雉、松茸などは湯殿の云々。雉、松茸は昔から賞翫されるものであるから、御湯殿の邊まで奥深く入り込んで通つてゐるのも差闕ない。儀禮「相見之贊各執雉、大夫執雁。注、雉取其守分不失節、雁取其候時而不亂行也。」◎御湯殿。飲食を料理する室。今の所謂湯殿即ち浴室ではない。◎その外は心憂きことなり。雉、松茸以外のものは、湯殿の邊にあるのは心外な面白くない事だ。◎中宮。後深草院の中宮。常盤井相國實氏公の女で、東二條院のこと。中宮は天皇の嫡妻。◎くろみ棚。點塗の棚。◎北山の入道殿。常磐井相國、西園寺實氏公。◎やがて御文にて。まもなく御文に書いて遣はすには。◎さながら、その姿にて。そのまゝ、手を入れない原形の姿で。「さながら」は「あて候ひし」にかゝる副詞。◎あて候ひし事見ならば。置いて御座いました事は見馴れない。◎さま悪しきなり。貴人の近くに置く可きでないものを置くのは、見つともない事だ。◎はかばかしき人。故實などに通じたシツカリシタ人。「はかばくし」は「埒の明く」「ハカバカスル」意。◎ゆゑにこそ。故であらう。こその下に「あらめ」といふ語を補うて釋く。

百十九段

【大意】
世が末になると、鯉魚といふやうな昔は卑下された魚まで、貴人の膳に上るものだ。

【通釋】
鎌倉の海にある、鯉魚といふ魚は、彼の土地ではならびない貴いもので、近頃珍重されるものだ。鎌倉に在る老人の言ひましたに、「此魚は自分達の若い頃までは、身分の貴い人の前へ出る事はなかつた。頭は下部すら喰はないで、切り棄てたものである。」と申した。このやうな卑しい魚でも、衰へた末世になると、高貴

鎌倉の海に、鯉魚といふ魚は、かの境には、さうなきものにて、この頃、もてなすものなり。それも、鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚、おのれらわかかりし世までは、はかばかしき人の前に、出づること侍らざりき。頭は、下部もくはず、切りて棄て侍りしものなり。」と申しき。かやうのものも、世の末になれば、上さままでも、入りたつわざにこそ侍れ。

◎鎌倉の海に。相模鎌倉の海にある。◎鯉魚。萬葉集などにも鯉魚釣の歌がある。按ふに、昔から有名な魚であつたらう、此魚を乾し固めて調味の料とする事も、久しい以前からだ。◎かの境。彼の土地。◎さうなきものにて。雙びなく喜ばれるもので。◎もてなす。もてはやす。賞翫する。◎おのれらわかかりし世までは。鎌倉の老人の詞。自分達が若かつた時代までは。◎はかばかしき

な家庭にまで入り込む事である。

【大意】
外國のものを寶としたり、得難い貨を貴んだりする必要がない。

【通釋】

外國の物は、藥以外は、なくても不自由はすまい。書などは、我國に廣く行き渡つて居るから、書き寫す事が出来よう。航海の容易でない船の中に、無用のものばかり満載してくるのは、最も愚かな事だ。外國産の物品を寶として尊重しない。

人の前に出づること。シツカリした身分の貴い人の膳に上ること。◎世の末になれば。道義のすたれ風俗の亂れた世になると。◎上さま。高貴な家庭。◎入りたつわざにこそ侍れ。入り込む事で御座いませう。

百二十段

唐のものは、藥の外はなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きもうつしてん。もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとり積みて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり。「遠きものを寶とせず。」とも、また「得がたき寶をたふとます。」とも、ふみにも侍るとかや。

◎唐のもの。唐土に産するもの。龍腦・麝香・牛黄の類。◎事かくまじ。不自由を感じまい。◎ひろまりぬれば。廣く行き互つてゐるから。◎書きもうつしてん。書き寫ししよう。◎は。感動詞。「てん」は未來完了の助動詞。◎たやす

又「容易に手に入らない品物をば貴ばない事だ。」などいふ事が、書物にも書いてあるとかいふ事だ。

【大意】

「鳥獸を檻にこめ、籠に入れて苦めるは、残忍な心である。」とて、王子猷の話や書經の詞を引いて、文意を捕うてゐる。

【通釋】

家に養ひ飼ふものには、馬牛がある。是等を檻に繋いで苦めるのは可愛相であるが、さうかと言ふ

からぬ道。往來の容易でない道中。◎所せくわたしもてくる。場所の狭い程、一ぱいに満載して、海を越え／＼して來る。「もて」は動作の進行をあらはす助詞。◎遠き物を云々。尙書「不レ寶ニ遠物ニ則遠人格。」「遠き物」は外國産の物品。◎得がたき寶。容易に手に入らない貨物。老子「不レ貴ニ難レ得之貨ニ使レ民不レ爲レ盜。」◎たふとます。貴ばない。◎ふみにも侍るとかや。書物にも書いてあるとかいふ事である。

百二十一 段

養ひ飼ふものには、馬牛、繋ぎくるしむるこそ、いたましければ、なくてかなはぬものなれば、いかゞはせん。犬はまもり防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなん。その外の鳥獸、すべて用なきものなり。はしる獸は檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼をきり、籠に入れられて、雲を懸ひ野山

て、これもなくては、用が達せられぬものであるから仕方がない。次に、犬は夜を守り、賊を防ぐ勤めをする點に於いて、人よりも勝つてゐる。之も必ず苦ふがよい。だが一面から言へば、之は家毎にあるもので、自分の家になくても、隣家のもので用が足りるから、殊更、かふといふことはせずにおかう。是等以外の鳥獸は、すべて不用のものだ。然るに、走る獸は檻におし籠められたり、くさりで身體をつながれたりし、飛ぶ鳥は翅を切られたり、籠に入れられたりして、或は雲の佇む

をおもふ。愁やむ時なし。そのおもひ、我身にあたりて忍び難くば、心あらん人、これを樂まんや。生をくるしめて目をよるこばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せしは、林にたのしむをみて、逍遙の友としき。捕へくるしめたるにあらず。およそめづらしき鳥、あやしき獸、國に養はず。」とこそ、文にも侍るなれ。

◎養ひ飼ふもの。周禮、六畜注、「獸可畜者六獸、牛馬羊犬豚鷄、養之曰獸用之曰牲、又云、在野曰獸在家曰畜。」◎繋ぎくるしむるこそ、いたましかれど。牛馬を厩に繋いで苦める事は哀れであるけれど。◎なくてはかなはぬものなれば。牛馬がなくては用を達する事が出来ないものであるから。事林廣記、「牛養之以耕、馬養之以戰、尤有國有家者之所不可緩也。」◎いかゞはせん。何んとして、仕方がない。◎犬はまもり防ぐつとめ。犬は夜を守り賊を防ぐつとめ。東坡「養猫以捕鼠、不可無鼠而養、不可捕之猫、畜犬以防盜、不可無盜而蓄、不可吠之犬。」◎必ずあるべし。必ず苦ふがよい。◎飼は

空を戀ひ、或は廣い野山を慕はしく思つて、愁ひ悲しみの止む折がない。是等鳥獸の憂愁を、人間自身の上にあてはめて見て、もしもつらい事と感ずるならば、人情のあらう人は、鳥獸を飼ふ事を樂みとしようか、樂みとはすまい。生物を苦めて、自己の眼を喜ばせるのは、畢竟、桀紂の如き残忍無道の心である。昔、王子猷が鳥を愛したのも、鳥が林中に樂み歌ふのを見て、自分が散歩の友としたので、それを捕へ苦めたのではない。大體、珍しい禽や、類の稀な獸は、國內に育てない

すともありなん。飼はなくても、こゝろ。「なん」は現在完了の「な」に未來の「む」の添うたもの。◎檻にこめ。檻の中にとぢこめ。檻は猛獸・狂人・罪人を閉ぢ籠めおく堅固な家。◎鎖をさゝれ。くさりで繋がれ。くさりを身體に纏はれ。◎雲を戀ひ。鳥が籠の中で昔自由に飛揚した雲のあるあたりを慕しく思ふ。◎野山をおもふ。獸が檻の中で昔自由に飛び廻つて野山を慕しく思ふ。◎愁やむ時なし。愁ひ悲みが止む折がない。◎そのおもひ。鳥獸の苦しい悲しい思ふ。◎我身にあたりて。我身の上にあてはめて見て。◎忍びがたくば。我慢が出来ないならば。◎心あらん人、これを樂まんや。人情のあらう人は鳥獸を飼ふ事を樂まうか樂まない。やは、反語。◎生をくるしめて。生きてゐるものを苦めて。◎桀紂が心なり。桀王紂王の如き残忍な心である。夏の桀王、湯の紂王、此二君は有名な暴君で、以後常に残忍暴戾の代表者に用ゐられてゐる。◎王子猷。王徽之のこと。子猷は字。風流の人で、當に竹を愛して之を植ゑ、名付けて此君というた。◎鳥を愛せしは。鳥を愛したその愛し方は。◎林にたのしむをみて。朗詠「阮籍賭場人歩月、子猷看處鳥棲烟。」鳥が林に樂しく鳴るのを見て。◎逍遙の友としき。ブラ／＼散歩する時の仲間とした。逍遙は、莊子逍遙篇の註、「優游自在貌。」詩經朱子註、「逍遙遊息也。」◎國に養はず。尙書旅獒篇「珍禽

といふ事が、書物にも書いてある。

【大意】人の學ぶべき才智藝能として、讀書、習字、醫術、武道、料理、細工の六種をあげ、「詩歌管絃の道は必要の藝でない。」といふてある。

【通釋】人の才智藝能は、書物に明かで、聖賢の教訓を知つてゐるのを第一とす。次に、字を書く事で、これはよしや專一にする事はなくとも、習ふがよい。その理由は、自然學問に便宜があるからである。次に、醫術を習

奇歌不_レ育千國。◎文にも侍るなれ。書物にも見えてゐる。

百二十二段

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。つぎには手かくこと、むねとする事はなくとも、これを習ふべし。學問にたよりあらん爲なり。つぎに、醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらざばあるべからず。つぎに、弓射、馬に乗ること、六藝に出せり。必ず、これをうかどふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばんをば、いたづらなる人といふべからず。つぎに、食は人の天なり、よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。つぎに、細工よろづに用多し。この外の事ども、多能は君子の恥

ふがよい。身を養うたり、人を助けたり、或は、忠孝のつとめも、醫の心得がなくは出来ぬ。次に弓射の術である。馬に乗ることは六藝の中にも出てゐる。是は必ず窺ひ知つてゐるがよい。以上の文武醫の三道は、その中の何れにしても、缺けてはならぬ事だ。随つて、之を學ぶ人を無益の人だとは言へない。次に、食物は人の命をつなぐ所のもので、よく其味を調へ、料理を知つてゐる人は、それを大なる利徳としてよい。次に、小刀細工で、之は萬の事に必要が多い。是等以外の事どもは

づるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣、これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むること、やうやくおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかざるが如し。

◎才能。才智藝能。◎文あきらか。書物に明かの意。◎聖の教。聖賢の人の遺された教訓。◎手かくこと。字を書く事。◎むねとする事はなくとも。專一にする事はなくとも。◎たよりあらん爲なり。便宜のあらう爲である。◎身を養ひ人を助け。近くは自分の身を養ひ、遠くは人を救恤する事が出来る。大成論序、「近足_ニ自衛_ニ遠可_レ濟_レ人。」◎醫にあらざばあるべからず。醫の心得がなくは君に忠をつくし、親に孝をつくす動も出来ないであらう。小學曰、「伊川先生曰、病臥_ニ於牀_ニ委_ニ之庸醫_ニ比_ニ之不慈不孝_ニ事_ニ親者亦不可_レ不知_レ醫。」◎つぎに弓射。次に弓射の術を習ふがよい。◎六藝。禮樂射御書數、謂_ニ之六藝。◎必ずこれをうかどふべし。蛇度此術を窺ひ知つてゐるがよい。◎まことに缺けてはあるべからず。讀書習字射御文武、及び醫術の道はいかにしなくてはならぬ。◎いたづらなる人。無益な人。◎食は人の天なり。食物は人が因て以て

知らなくもよろしい。多方面の事柄に堪能である事は、君子の耻とする所の事である。詩歌に巧みであり、音楽の道にすぐれてゐる事は、たとひ、昔、是等の事柄を幽玄の道として、君臣共に重んじたとはいへ、現代に於いては、時勢が變化してゐるから、是等の道で世を治める事は、次第に迂遠の方法となつて行くやうだ。例へば金は其質は勝れてゐても、鐵の用途が廣く益の多いには、及ばないのと同様である。

命をつなぐ所のものである。論語大全、「天者人資而生者也。」とあるやうに、天は人が資つて生ずる所、食も人命をつなぐ所のものだから食は天なりというのだ。帝範、務農篇、「夫食爲人天。農爲政本、倉廩實則知禮節、衣食乏則忘廉恥。」大なる徳とすべし。大なる利徳としてよい。◎多能は君子の恥づるところなり。多方面の事柄に堪能であるのは君子の恥とする事だ。論語「大宰問於子貢曰、夫子聖者歟、何其多能也。子貢曰、固天縱之、將聖又多能也。子開之曰、大宰知我乎、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不也也。」◎絲竹、管絃のこと。音楽。◎幽玄の道。奥深い道。◎君臣これを重んずるといへども。古の君も臣下も、共に詩歌管絃の道を以て、國を治め之を重んずるけれど。◎やうやくおろかなるに似たり。時勢が變化してゐるから、幽玄の道で世を治めるのは、次第々々に迂遠の方法であるに似てゐる。「似たり」は「如し」の意。◎鐵の益多きにかざるが如し。金の質は鐵よりも勝れてゐるが、用途は鐵の方が廣く利得が多い。詩歌管絃の道はすぐれてゐるが、文武醫詞細工の道の用途廣く利益の多いには又ばない。

百二十三段

【大意】人は衣食住及醫藥の四つが、僅に事足りて、閑かに世を送るがよい。それ以外を求めるとは驕である。

【通釋】

無益の事をして時間を過す人を、馬鹿の人とも、道理に叶はぬ事をする人とも、言うてよからう。人は、國の爲。君の爲によんどころなくて爲す事が多い。其等の事をした以外、餘りの時間は、いくらもないと考へる。まづ人の身にとつて、^{ヨンドコロ}據なくてなす所のものは、第一に食物をうる事、第二に着るものをつくる事、第三に居る處を構へ

無益の事をなして、時を移すを、愚なる人とも、^{ひがこと}僻事する人ともいふべし。國のため君のために、止むことを得ずして爲すべき事多し。そのあまりの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つに過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨におかされずして、^{しづか}閑に過すを樂とす。たゞし、人みな病あり。病に冒されぬれば、その愁忍びがたし。醫療を忘るべからず。薬を加へて、四つのこと求め得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外をもとめ營むを^{おこり}驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

◎無益の事をなして。次に述べてある、衣食住及び醫の四つが僅かに事足る以外の事柄を求めるとは無益と言つたのだ。◎僻事する人。間違つた事をする人。

る事で、人間の大事といふは此三種に過ぎない。食が足つて飢えず、着るものが調つて凍えず、居る處が備つて風雨に冒されず、その上、心閑かに月日を送るのを樂みとするのだ。但し、人は皆病がある。一度病氣になると、その憂は堪へ難い。醫療の入費を忘れてはならぬ。だから衣食住に、藥を加へて、此四つのものを求め得ない者を、貧しい人とする。この四つのもに不自由でないのを富んでゐる人とする。これ以外のものを、求めつくるのを驕とする。もしも四つの事柄を儉約に

道理に叶はぬ事をする人。◎そのあまりの暇いくばくならず思ふべし。國の爲に働き、君に忠をつくすなどいふ、止むを得ない事以外の餘りの時間は、いくらもないと考へるがよい。◎しづかに過すを樂とす。心閑かに月日を送るのを樂とする。論語、「賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。」◎醫療を忘るべからず。病に冒された時、醫を招いて療治する爲の費用を忘れてはならない。◎この四つ缺けざるを富めりとす。衣食居醫の四つが不足せず事足るのを、富んでゐる者とする。こゝに云ふ衣は單に寒暑を防ぐに足るもの、食は飢渴を防ぐに足るもの、居は雨露風雪を防ぐに足るもの、意。それ以上の贅澤を意味するのではない。◎四つの事儉約ならば、四つの事をつまやかにするならば。◎誰の人が足らずとせん。誰か生活が不自由で困るといふ者があらうぞ、困るものはない。「か」は反語。

百二十四段

是法法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞ、明暮念佛して、やすらかに世を過す有様、いとあらまほし。

して暮すならば、誰も此世で生活に不自由だといふものはあるまい。

【通釋】

是法法師は、淨土宗に於いて耻しくない學問のある人だ。然るに、その學問の道を主としないで、唯、朝夕念佛をして、氣樂に月日を過してゐる。その態度が甚だ好ましく思ふ。

【大意】

脱法の上質な聖を評して「法師の容貌が唐の狗に似てゐるから、聞く人が涙を流すのだ。」と或人がいうた話。また、その人が更に「酒をすゝめるに、自分がさきに飲んで

◎是法法師。念阿の弟子で、歌人としてもよい評判があつた人。その歌は、新千載集・新後拾遺集に見えてゐる。◎淨土宗に恥ぢずと。淨土宗に於ては誰にも恥しくない學問のある人だと。◎學匠をたてず。學問の道を主としない。◎念佛。阿彌陀佛の名號を唱へること。又は、凡て佛に對してその相好を觀察し、功德を憶想して、名號を稱念すること。◎やすらかに。氣樂に月日を送る。◎いとあらまほし。兼好が讚めた詞。甚だ好ましい事だ。

百二十五段

人におくれて、四十九日の佛事に、あるひじりを請じ侍りしに、説法をいみじくして、みな人、派を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、「いつよりも、殊に、今日は尊くおぼえ侍りつる。」と、感じあへりし返事に、或者のいはく、「何とも候へ、あれほど、唐の狗に似候ひなんうへは。」と言ひたりしに、あはれもさめて

人に勧めるは、劍で人を斬ると同様、自分が先に殞れて終ふものだ。」というた話。

【通釋】

人に先立たれて、四十九日の佛事に、或僧を招待しましたに、説法を大層よくし、皆それが爲に感涙を流した。そして、導師が歸つてから後、説法を聞いた人どもが、「平素よりも、今日は格別尊く感じました。」と有難がり合つた其返事に、或者が「何んともあれ、あれ程、妾が唐の狐に似て居ませう上は、人が皆涙を流すのも尤だ。」と、いうたので、折角心に感じた有

をかしかりけり。さる導師の譽めやうやはあるべき。また、「人に酒すゝむるとて、おのれ、まづたべて、人に強ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり。二方に及つきたるものなれば、もたぐる時、まづ我頭を斬る故に、人をば、え斬らぬなり。おのれ、まづ酔ひて臥しなば、人はよもめさじ。」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。

◎入におくれて。人に先立たれて。◎四十九日。七々日のこと。人が死んでから四十九日間の佛を供養する日。◎佛事。法會。法事。◎請じ侍りしに。招待しましたに。◎説法いみじくして。説法を大層よくして。◎導師。葬式。法會などの時、法儀の主となり、衆僧を率ゐて佛事を督む人。又は能く衆生を導いて無生死の道に導く人。十住斷結經曰、「號導師者、令衆生類示其正道故。」華首經曰、「能爲人說無生死道故名導師。」◎何とも候へ。何んともあれ。◎あれほど唐の狗に似候ひなんうへは。あれ程、妾が唐の狗に似て居ませうからには、人が皆涙を流すのも尤だ。◎あはれもさめて。心に感じた事も減殺し

難さも減じてをかしかつた。一體導師を讃めるに、そのやうな、ほめ方といふものがあらうか。その男が又一人に酒をすゝめる場合に、自分が先きに飲んでから、人に強ひて飲ませようとするのは、恰も劍で人を斬らうとするやうなものだ。劍は兩方に及がついてゐる物だから、ふり上げる時、まづ第一に、自分の頭を斬るから、人をば斬り得ない。之と同様に、自分が先に酔うて横になつて終つたなら、人は、よもや飲むまい。」というた。その男は劍で實際に斬つて見たのかどうか知らない

て。◎さる導師の譽めやうやはあるべき。導師をほめる譽めかたに、そのやうな譽めかたがあらうか、あるまい。即ち説法のことを評するのに。容貌を揃へて云々する方はないとの意。◎人に酒すゝむる。是より以下、聖を評した人の詞。◎もたぐる時。劍を振り上げる時。◎人はよもめさじ。人はよもや酒を召し上るまい。◎劍にて斬り試みたるにや。兼好の評語。其人は果して劍で斬つてためした事があるであらうか、その評が甚だ面白かつた。

百二十六段

ばくちの負け極まりて、残りなくうち入れんとせんにあひては、うつべからず。立ちかへり、つゞけて勝つべき時の至れるを知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなり。」と、あるもの申しき。

◎ばくち。博奕のこと。かけごと。◎負け極まりて。負けが極度に達して。◎

が、甚だ面白い言分であつた。

【大意】博奕の心得。

【通釋】

「博奕の負けが極度に達して、残金を全部うち込んで、打たうとする場合には、勝つた方の相手は決してそれ以上打つてはならない。相手の人に勝つべき運が向いて来たといふ事を知らねばならぬ。その勝敗の運の分れる時を洞察するものを、上手な博奕打ちといふのだ。」と、或人が言うた。

【通釋】

改めても、格別、益のない事柄は、一層改めない

残りなく打ち入れんとせんにあひては。残金を全部うち入れて打たうとする場合に出合つては、勝つた方の相手は、思ひ切りをよくして、それ以上に打つてはならぬ。これは負けた方の相手が残金全部をかけて終はうとする様な時には、勝つた方の相手は自分の其時の勝負の運を早く察して、思ひ切りをよく止めておくがよいとの意。◎立ちかへり。引きかへし。◎つゞけて勝つべき時の云々。今迄負けて居た人に引きかへして勝運が向いて来たのだと知らねばならぬ。◎その時を知るを。その勝つ時と負ける時との運勢を知る人を。よいばくちうちといふのだと、或人がいうた。

百二十七段

あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

◎あらためて益なき事。自分が改めても、自分の利得とならぬ事柄は改めないがよいとの意。益の有無といふ事が、事を改める改めないといふ事の標準となるのだといふのだ。論語「魯人爲長府、閔子騫曰、仍舊貫、如之何、何必改作。」

のをよいとするのだ。

【大意】

「雅房大納言が、犬の足を切つた爲に、院の機嫌を損じて、大將に昇進することが出来なかつたといふ話から、一切の有情を見て慈悲心の無い者は、人倫でない。」と云うてゐる。

【通釋】

雅房大納言は、學才の勝れた、身分の貴い人で、大將に昇進させたいと、後宇多院が思召して居られた頃、院の近習の人が、「只今興のさめる事柄を見ました。」と申しながら、院は「何事であるぞ。」と尋ねられたに、「雅房卿

百二十八段

雅房大納言は、才かこしく、よき人にて、大將にもなさばやおぼしける頃、院の近習なる人、「たゞ今、あさましきことを見侍りつ。」と申されければ、「何事ぞ。」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹にかはんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ。」と申されけるに、うとましく、にくくおぼしめて、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もしたまはざりけり。さばかりの人、鷹をもたれたりけるは思はずなれど、犬の足は、あとなきことなり。虚言は不便なれども、かゝることを聞かせ給ひて、にくませ給ひける、君の御心は、いとたふときことなり。大かた、生けるものを殺し、いため闘はしめて、遊び樂まん人は、畜生

が鷹に餌を與へようとして、生きてゐる犬の足の肉をそぎましたのを、私の中垣の穴から見ました。と申された爲に、雅房卿を、憎くお思ひになつて、日頃の御寵愛の御様子も違ひ、大將に進ませられなかつた。あれ程の雅房卿が、鷹を持つて居られたのは案外な事だが、犬の足を切つた事は跡方もない偽りである。勿論、虚言を言つたのは不都合な事だが、この様な事を聞かれて、その行をお憎みになつた後宇多院の御心は、甚だ尊い事だ。大體生物を殺したり、又は、其羽を切つたり、

殘害のたぐひなり。よろづの鳥獸、小き蟲までも、心をとめて、ありさまを見るに、子をおもひ親をなつかしくし、夫婦をとまひ、ねたみ、いかり、欲おほく、身をあいし、命を惜めるところ、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりて甚し。かれに苦みを與へ、命を奪はんこと、いかでかいたまはしからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

◎雅房大納言。太政大臣定實公の男、正二位大納言、近衛大將源雅房卿。後土御門と號す。◎才かしく。學才が勝れて。◎よき人。身分の貴い人。◎大將にもなさばや。大將にマアなしたるものだ。もは感動詞。大將とは近衛府の長官、左近衛大將、右近衛大將をいふ。職原抄、「大將、總取三將軍之稱也、非三諸第之花族者更不任之、多是大納言中、諸第上滿任之。」◎おぼしける頃。院が御思ひなされた頃。◎院。後宇多院。◎たゞ今あさましきこと。院の近習が雅房卿を譏誣する詞。只今驚き呆れる程、感興のさめる事柄を見ました。◎鷹にかはんとして。鷹に餌を與へようとして。◎生きてゐる犬の足を切り侍りつるを。生きて

足を縛つたり、互に闘はせたりして、これを見て遊び樂む人は、恰も、畜生が互に相害ひ合ふのと同類だ。萬の鳥獸・小蟲でも、よく氣をつけてその様子を見るに、子を愛し、親をなつかしく思ひ、夫婦相つれだち、或は嫉妬し、或は怒り、欲が深く、身を大切にし、命を惜んだりする事は、愚痴なものだけに、人よりも一層ひどい。そのやうな彼等を、苦めたり、命を取つたりする事は、どうして可愛想でない事があるらう。すべて、一切の心あるものを見て、それに對し慈悲の情のないもの

ゐる犬の足の肉をそいだのを。◎中垣。庭の隔てなどに作つてある垣。◎うとましく。院が、雅房卿をいとはしく憎く御思ひになつて。◎目ごころの御氣色もたがひ。院の雅房卿に對する平素の御寵愛の御様子も違ひ。◎昇進。官をすゝめのこと。雅房卿を大將に昇進させられなかつた。◎さばかりの人。あれ程、才學の優れて身分の貴い人。雅房卿をさす。◎もたれたりけるは。持つて居つたといふ事は。◎思はずなれど。案外な事だけれど。◎あとなきことなり。犬の足をきつた事は、跡方もない偽りである。◎虚言は不便なれども。近習が虚言をいうた事は、雅房にとつては不都合な事であるけれど。◎にくませ給ひける。その行をおにくみになつた。◎いため闘はしめて。羽を切り、足を縛つたりして痛め、又は、闘犬闘鶏などの事をして。◎畜生殘害のたぐひ。畜生が互に相そこなひ破るその類。畜生とは、人に畜はれる鳥獸・魚等の總稱。又は、單に獸をいふ。◎子を思ひ。子を愛すること。莊子に「虎狼仁也」といふてある、或時は恐しい虎狼でさへ慈愛の心があつて父子は相食はない、夜鶴が子を思ひ、巴猿が腸を斷つのも子を愛する心である。◎親をなつかしくし。親をなつかしく思ふをいふ。羊が跪いて乳を飲み、烏が反哺の孝をつくしたりするの親を思ふ情である。◎夫婦をとまひ。同宿の鴛鴦・雙飛の孔雀の類をいふ。

は、人間の仲間ではない。

◎れたみ。詩經に「螽斯羽、詵詵兮。」としてあるが、他の動物は皆嫉妬するのだから。◎いかり。蟹が怒つて戈をあげ、蟻螂が怒つて斧をたのむ類。◎人よりもまきりて甚し。禽獸は一途に愚かであるから、人よりも一脣、子を愛し、夫婦相伴ひ、嫉妬し、憤怒し、欲をかき、身を愛し、命を惜むなどといふ事がひどい。◎いかでかいたまはしからざらん。どうして可愛想でない事があらう、可愛想だ。「か」は、反語。◎有情を見て。心あるものを見て。鳥獸蟲魚の類。◎慈悲の心なからんは。なまじの心が無からう人は。悲は衆生に樂を與へ、慈は人の苦を抜くこと。大日經に「佛心者、大慈悲是也。智度論に、「夫言慈悲者、意存柔和、破他煩惱、不生瞋恨。夫言悲者、意存饒益、善順物情。」◎人倫にあらず。人間の仲間でない。倫は類の意、こゝでは五倫の意でない。

百二十九段

顔回は、志、人に勞を施さじとなり。すべて人を苦め物をしへたぐる事、賤しき民の志をも奪ふべからず。又いとさなき子を

【大意】
下賤の人の志を妨げたり、無智の幼兒の心を苦めてはならぬ。肉體を傷つけるよりも、心を痛め

る方が、一層残忍なことだ。人は肉體よりも心が主である。

【通釋】
顔回は、日ごろの心掛けが、人に苦勞をかけまいといふ事にあつた。すべて、人を苦め、或は、物を虐待する事はよろしくない。賤しい人民の志でも、それを妨げてはならぬ。又、幼稚な子供を欺いたり、恐れさせたり、言葉で辱めたりして、面白がる事がある。一人前の人は、それが事實でないから、何でもないと、思つてゐるけれど、幼稚な者の心にとつては、すかされたり、おどされ

賺しおどし、言ひはづかしめて興する事あり。おとなしき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて恐しく、恥しく、あさましきおもひ、誠に切なるべし。これを惱して興する事、慈悲の心にあらず。おとなしき人の、喜び、怒り、悲び、樂ぶも、皆虚妄なれども、たれか實有の相に著せざる。身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふことなほ甚し。病をうくる事も、多くは心よりうく。外より來る病はすくなし。藥をのみて汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝ事あれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額をかきて、白頭の人となりしためしなきにあらず。

◎顔回。顔淵ともいふ。孔子の高弟で、亞聖と云はれた程の人。◎志。平常の

たり、辱しめられたりする事が、身にしみてつらく恐しく感じ、あさましいと思ふ情が、いかにも痛切である。かういふもの、心を苦めて興するのは、慈悲のある人の心でない。又、大人の喜怒哀楽といふものも、實はとりとめもない妄念であるが、然し、人は皆實際眼前に横る所の事實として、それに執着しない者はない。さういふわけで、肉體に苦痛を興へる事よりも、心を苦めるのは、人を害する事が一層甚しい。病を受ける事も、多くは心の作用によるのだ。外界の關係から

心掛け。◎人に勞を施さじ。人に苦勞をかけまい。論語「子曰、蓋各言爾志。顏淵曰、願無伐善、無施勞。註云、勞、勞事也。事非己所不欲、故亦不欲施之於人。」◎物をしへたぐる事。罪のない者を虐待しムゴクスル事はよろしくない事で、例へば、賤しい民でも其民の考へる所のものな妨げてはならない。◎賤しき民の志。志とは、爲さうと思つてゐる考。論語「西夫不可奪志。」◎賤しおとし、言ひはづかしめて。だましたり、恐れさせたり、言葉ではづかしめて。◎おとなしき人。一人前の人。大人。◎まことならねば。事實でない戯であるからして。◎事にもあらず思へど。心を用ゐるほどの事でもないと思ふけれど。何んでもないと思ふけれど。◎幼き心には身にしみて云々。幼少の人の心には、すかし、おどし、はづかしめられた事が、身に深く感じて、おそろしく耻しく、驚き呆れるやうな思が、いかにも、痛切であらう。◎これを。幼少の者の心を。◎皆虚妄なれども。皆空しいとりとめもない妄念であるけれど。◎たれか實有の相に着せざる。誰れか其喜怒哀樂の相を實際眼前にある眞事實としてそれに執着しないものがあるか、ない。◎汗を求むるには。薬を飲んで汗を出すには、効能がない事があるけれど。文選に「夫服薬求汗、或有弗獲、而愧情一集、溼然流離。」◎凌雲の額。能書で有名な魏の章詠が、凌雲臺に登つ

受ける病氣は少い。例へば、薬を飲んで汗を出さうとしては効能がない場合があるが、一度恥ぢられる事があると、必ず汗が流れるのは、心の作用である事を知るであらう。凌雲の臺に登つて懼れつゝ、額を書き、心を過度に勞した爲に、白髮の人となつた魏の章詠の如き例がないでもない。

【大意】人は謙讓の美風を持つてゐるのがよい。勝負に勝つを興とし、人よりも智恵が勝れてゐるを興とするは、徳に背き禮に遠かつてゐる。友達から恨まれるのも、争の爲だ。だ

て懼れた爲に、忽ち白髮となつたといふ故事を引いて、心をいためると其身を害するとの意味をいふたのだ。三國志、「魏明帝立凌雲觀、觀先釘榜、乃以籠盛章詠、輒引上書之、去地二十五丈、既下、髮皓然、還語子弟、直絕此法。」世說新語補「章仲將、能書、魏明帝起殿欲安榜、使仲將登梯題之、既下、頭髮皓然、因歎兒孫勿復學書。」凌雲は凌雲臺のこと。雲を凌ぐ程の高き臺の意。

百三十段

物に争はず、おのれを枉げて人に随ひ、わが身を後にして、人を先にするにはしからず。萬のあそびにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。おのれが藝のまさりたることを喜ぶ。されば、負けて興なく覺ゆべきこと、又知られたり。われ負けて人を喜ばしめんと思はゞ、更にあそびの興なかるべし。人にほいなく思はせて、わが心を慰まんこと、徳に背けり。むつま

から、人は學問をして、善に誇らず、友に争はぬ謙讓の道を知るがよい。

【通釋】

物について人と争はないで、我意を枉げて、先方の言ふ所に随ひ、又は、我身を後廻しにして、人を先きにするといふ事に越した事はない。萬の遊戯にも、勝負を好む人は、勝つて興味があらうとするからである。自己の藝が勝れてゐるのを喜ぶのだ。されば、負けて不興に感ずる事も、又わかつてゐる。もしも、自分が負けて人を喜ばせようと思ふなら、その場合は一向、遊戯に面白くない

じき中に戯るゝも、人をはかり欺きて、おのれが智のまさりたることを興とす、これ又禮にあらず。されば、はじめ興宴より起りて、長きうらみを結ぶ類多し。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝たんことを思はゞ、たゞ學問して、その智を人にまさらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善にはこらず、ともがらに争ふべからずといふことを知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

◎物に争はず。物事に就いて人と争はない。論語「君子無所争。」曲禮「在醜不爭。」◎おのれを枉げて。自分の主張をまげて。◎わが身を後にして。自分を後廻しにして人を先きにする。論語「仁者己欲立而立人、己欲達而達人。」老子「欲先民必以身後之。」◎おのれが藝のまさりたること云々。勝負を好む人は、自分の藝能が人よりも勝つてゐることを喜ぶのだ。◎負けて興なく云々。負けた人は、負けて興味がないと感ずるであらうことが推測出来る。◎わ

であらう。人に面白くない思をさせて、自分の心を慰めようとする事は、仁の徳に背いてゐる。親友の間柄で戯れるのも、人をたばかり欺いて、自分の智恵が勝つてゐる事を、興のある事とする。是も亦、禮の徳でない。だから、よく遊興酒宴の席から事が始つて、長い間の怨恨を生ずる類が多い。是は皆、争を好む事から起る弊である。以上の如き理由だから、もしも人に勝らうと思ふならば、たゞ學問をして、其智恵が人よりも勝らうと考へるがよい。何故に學問して聖人の道を學ぶか

れ負けて云々。もしも仁者の道を守つて、自分が負けて相手の人を喜ばしめようと思ふならば、一向勝負に興味がなからう。◎人にほいなく思はせて。人に面白くなく思はせて、自分の心を慰めようとする事は仁の徳に背いてゐる。「ほいなく」は心をとげず残り惜しく思ふ意。◎むつまじき中に戯るゝも。親友の間柄で戯れ言を言ふのも。張子厚東銘「戲言出於思也、戲動作於謀也。」◎人をばかり欺きて。人を欺きだまして。◎おのれが智のまさりたる。自分の智恵が、欺かれる相手よりも勝つてゐるを興味のある事とする。◎これ又禮にあらず。是も亦禮の徳でない。◎興宴より起りて。親友間の遊興酒宴の席から事が始つて、長い間消えない憤りを生ずる類が多い。◎失なり。争を好むことから起る失弊である。◎たゞ學問して。たゞ一つ學問をして、その智恵が人よりも勝らうと考へるがよい。◎道を學ぶとならば。學問して聖人の道を學ぶといふならばそれは。◎善にはこらず、ともがらに争ふべからず。論語「願無伐善。」老子「天之道、不爭而善勝。又曰、以其善下之能爲百谷王、……以其不爭故天下莫能與之爭。又曰、聖人之道、爲而不爭。」◎大なる職をも辭し。高き官職は萬人の望む所であるから、自分よりも賢いものがあれば、これに讓らうが爲に喜んで辭するのだ。老子「聖人爲而不恃、成功而不居。」◎利をも捨

といふと、それは、善にほこつてはならない、仲間と争うてはならないといふ道理を知らうが爲である。高い官職をも辭し、利欲をも輕んずる事の出來るのは、學問をして道を知つてゐる御蔭である。

【大意】

自分の分限を知るのが智者である。分限以上の事をなすのが禮であると思ふは誤だ。

【通釋】

貧しい者は、自分の身分以上の財を費消する事を、禮の道と心得、老人は、分限以上の力を出す事を禮の道としてゐる。

つる。利徳も亦望む人が多から、人に取らせる爲に捨てることないふのだ。◎學問の力なり。職を辭し利をすてるは學問をして、道を知つた御蔭である。

百三十一段

貧しきものは、財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は、すみやかにやむを智といふべし。許さざらんは、人のあやまちなり。分を知らずして、強ひて勵むは、おのれがあやまちなり。貧しくて、分を知らざれば盗み、力衰へて、分を知らざれば病をうく。

◎貧しきものは財をもて禮とし。貧しい者は、己が分限以上の財貨を費消して禮の道であると思ふ。曲禮「貧者不_レ以_二貨財_一爲_レ禮、老者不_レ以_二筋力_一爲_レ禮。」とある裏をいうたのだ。◎老いたるものは力をもて。老人は分限以上の力を出すことを禮の道としてゐる。次に、世間の人には大概さう考へてゐるがそれは誤だ

これはつまりらぬ事だ。人は自分の分限を知り、人に及ばない時は速にやめて、分限を守るのを智といはう。分限以上の行をなさないからといって、それを承知しない人は、承知しない人の誤だ。分限を悟らずに無理に力を入れて爲すのは、爲す人自身の誤だ。貧しい人が驕奢なふるまひをする、果ては盜賊を働くやうになり、力が衰へて、不相應の力を出すと、その結果病氣になる。

【通釋】

鳥羽のつくり道は、鳥羽殿が建てられてから後に出來た名ではない、昔か

と、いふ語を置いて考へれば解かる。◎おのが分を知りて。自分の分限を知つて、人に及ばない時は速にそれをやめ、分限を守るを智といはう。◎許さざらんは。分限以上の行をなさないのなさないといつて承認しないのは、承認しない人の過失である。◎強ひて勵む。自分の分限を知らずに、自分の力の及ばない事を無理に力を入れて爲すのは、その人自身の過失である。◎貧しくて。例へば、自分が貧しいのに、その分を知らず、過失の財を費用すると、財が不足して盗むやうになる。◎力衰へて。力がなくなつてから、過分の力を出すと、それが爲に健康を害して病氣になる。

百三十二段

鳥羽のつくり道は、鳥羽殿たてられて後の名にはあらず、昔よりの號なり。元良親王、元日の奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽のつくり道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

らあつた名だ。元良親王の元日に慶賀を奏上した聲が、甚だ勝れて高く、大極殿から鳥羽のつくり道まで聞えたといふことが、李部王の著された記録に書いてあるとかいふ事だ。

【大意】

夜の枕は、東又は南にして、陽氣を受けるがよい。天子の御寢所は東枕である。大體、人は東を枕にして、陽の氣をうくべき筈であるから、孔子も東枕にせられた。寢殿の装

◎鳥羽のつくり道。鳥羽曠と云うて、九條から一直線に作つた道。田畑をつぶして作つたのだ。◎鳥羽殿。白河院應徳三年に立てられた仙洞御所である。◎元良親王。陽成院の御子。三品兵部卿親王のこと。◎元日の奏賀の聲。群臣が元日に参内して慶賀を奏する聲。◎甚だ殊勝にして。甚だすぐれて高くて。◎大極殿。禁中の御影の名。天子が出御ましまして群臣の奏賀を受けられた所。◎聞えけるよし。聞えたといふ趣。◎李部王の記。延喜帝の御子、式部卿重明親王の著された記録。李部は吏部の普通で、式部の唐名。

百三十三段

夜のおとゞは、東御枕なり。大かた、東を枕として、陽氣を受くべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。北は忌むことなり。また伊勢は南なり。大神宮の御方を、御あとにせさせ給ふこと、いかゞと、人申しけり。但し、大神宮の遙拜は、たつみ

に向はせ給ふ、南にはあらず。

飾は、或は南枕につくるのが普通の事だ、白河院は北へ頭をして寝られた。北は陰の氣であるから忌む事だ。又伊勢は南である。其大神宮の方向へ足を向けて寝る事は、どうであらうか、よろしくない事だと、人がいうた。然し、大神宮の方向は、遙拜の時、巽の方向に向はれるので、ほんとうの南ではない。

◎夜のおとゞ。天子の御寢所。◎東御枕。禮記「寢時東首。」禁秘抄「夜御殿四方有妻戸、南大妻戸一間也、帳同、清涼殿東枕云々。」◎陽氣を受くべき故に。晝は陽、夜は陽。又東南は陰、西北は陰である。夜は陰であるから陽の氣の東南に向いて陰の氣を防ぐのだ。◎孔子も東首。論語「疾君視之、東首加朝服。」拖神。朱子の註に、「東首以受生氣也。」◎寢殿のしつらひ。寢殿の裝飾。◎或は南枕常のことなり。或は南枕にするのは、南も陽の氣であるから尋常の事柄である。◎白河院。第七十二代の帝。◎北首に御寢なりけり。釋尊は涅槃の時、頭北面西右脇臥であつた。故に普通は北枕は忌むのだ。又北は陰の氣であるから之を忌む。◎大神宮の御方を。禁秘抄「凡禁中作法先神事、後他事、且暮敬神之觀慮無懈怠、白地以神宮并内侍所方、不爲御跡。」◎但し大神宮の遙拜。伊勢は南に在ると人がいふが、然し、遙拜の御時は巽の方向に向つてなされるのであるから、眞の南方ではない。遙拜ははるかにながむの意。

百三十四段

【大意】
 「法華堂の三昧僧が、自分の顔の見憎いのを知つて、更に人に交らなかつた。凡て、自己を知るのが、最もえらい人だ。」と述べ、次に、自分に關しては知らぬ事柄が多い事を列擧し、「自分の非に氣付いたら、早く身分相應の處置をとるがよい。總體、人は自己の非を知らず、又、貪る心が深く退くを知らぬ爲に恥を受けるものだ。この貪る心のあるのは、死の近き事を知らぬから起る。」といふて居る。

【通釋】
 高倉院の法華堂の三昧僧の某の律師とかいふもの

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、あの時鏡をとりて、顔をつくづくと見て、我かたちの見にくく、あさましきことを、あまりに心憂く覺えて、鏡さへうとまじき心地しければ、その後、長く鏡をおそれて、手にだにとらず、更に人に交る事なし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと、聞き侍りしこそ、有難く覺えしか。かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、己をば知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふ道理あるべからず。されば己を知るを、物知れる人といふべし。貌醜かたちけれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道のいたらざるをも知らず、身の上の非をも知らねば、まし

が、或時、鏡を手にとつて自分の顔をつくづくと見て、自分の容貌が醜く情ないのを、非常につらく感じ、鏡をも厭はしい心持がしたから、その後、長い間鏡を氣味悪く思つて、手にすら取らない、又、少しも、人と顔を合せる事もしない。御堂の御勤めだけに參會して、其外は家の内に籠つて居たといふ話を、傳へ聞いた時には、珍しく感心な事に思はれた。伶俐な者でも、人の身の上の事ばかり批評はするが、自分のことはサツバりわからないものだ。全體自分の事がわからない

て外のそしりを知らず。但し、かたちは鏡に見ゆ。年は數へてしる。我身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。かたちを改め、齡としひを若くせよとはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞ閑に身をやすくせざる。行愚まごひなりと知らば、何ぞこれを思ふことごとくにあらざる。凡て、人に愛樂あいげうせられずして、衆に交るは恥なり。かたちにくく心おくれにして、出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて、堪能の座に列り、雪の頭を戴きて盛なる人にならび、況や、及ばざる事を望み、かなはぬ事を憂へ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥に非ず。貪る心に引かれて、自ら身をはづかしむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事、今こ

で、他人の事を知る事の出来る道理がないであらう。それゆゑ、自分を知つてゐる者を、眞に、物を知つてゐる人と云うてよい。

自分の容貌が醜くても、それに気が付かない。心が愚かである事も知らない。藝の下手なものもわからない。數にも入らぬ程の卑しい身分であるのも知らない。年の老いたのも知らない。病の身を犯すかも知らない。死期の近い事かも知らない。自分の行ふ道が、道に叶うて居ない事も知らない。かく自己の身の上の事を知らないから、まして、

に來れりと、たしかに知らざればなり。

◎高倉院の法華堂。高倉院の御骨を納めてある法華堂。高倉院は、人皇第八十代、後白河院第三の御子、養和元年正月崩御。法華堂は「ほげだう」といひ、法華三昧を修する堂で、其所在は、山城國愛宕郡清閑寺中にある。◎三昧僧。萬の思をやめて法華經を讀誦する僧。三昧とは、雑念を絶つて専心に念誦するをいふ。智度論「善心一處不動、是名三昧。」◎律師。僧官の名。僧都の次の官で、昔は五位に準ぜられた。◎鏡さへうとまじき心地。自分の顔をうつす鏡までも厭はしい心持がしたから。◎鏡をおそれて。自分の顔の醜いを見るのがいやさに、其顔を映す鏡を恐れて手にさへとらなかつた。許渾の詩「高歌一曲掩明鏡、昨日少年今日白頭。」白樂天の詩、「今朝一拂拭、自照顛顏容、照罷重惆悵、背有雙盤龍。」◎つとめばかりにあひて。御堂のつとめだけに出席して。◎有難く。三昧僧が自分の顔の醜いを知つて退いて居たのをほめた兼好の詞。◎かもしげなる人。伶俐なる人。◎人の上をのみばかりて。人の身の上の事をのみ、かれこれと評議して。◎我を知らずして云々。自分の身の上を知らないうて、他人の事を知るといふ道理があるべきでない。即ち自分の事が十分わかつて其非を改め得る人でこそ、他人の是非曲直がわかるのだ。◎かたち醜けれ

他人が自分を悪くいふことをも知らない。もし、容貌は鏡に映る。年は數へればわかる。だから、實際に自分の事がわからぬといふのではないが、さて、容貌や、年齢などは、たとひそれがわかつて、美にし、若くする方法がないのであるから、知らないのに、同じだといはう。然し、自分のいふのは、容貌を美にし、年を若くするとの意味ではない。只、自分の藝能の未熟拙劣を知るならば、なぜすぐに隠退しないのか。年老いたと気が付いたら、なぜ心閉かに身を樂々とし

ども知らず。是から「まして外のそしりを知らず。」までは、自分の身の上を知らぬ事の例を擧げたのだ。自分の容貌が醜いけれど、それを知らない。◎おこなふ道のいたらざるをも知らず。自分の行ふ道が道に叶うてゐない事をもわからない。◎外のそしりを知らず。他人が自分の身の上をわるくいふのを知らない。◎我身の事知らぬにはあられど。かくの如く自分の身の上の事がわからぬのではないけれど。◎すべき方のなければ。容貌や年齢は知つたからとて、容貌をよくし、年齢を若くする方法がないから、知らぬのと同様であるといはう。◎かたちを改め云々。自分の言ふのは何も醜い容貌を改めつくり、老いたる年齢を若くしろといふのではない。眞の身の上を知つたならば次の如く身分相應の處置をとれといふのだ。◎拙きを知らば。自分が未熟である事を知るならば、なぜ、そのまゝ世を退いて引き籠らないのか。◎行愚なりと知らば。自分の行が愚であると気付いたならば。◎これを思ふこと、にあらざる。尙書、「帝念哉、念茲在茲、釋茲在茲。」といふ文句から來たので、自分の行が愚であるといふことを眞に思念して暫時も自己の愚なる事を忘れないやうにしないのかといふのだ。◎凡て人に愛樂せられずして。是から以下は、身分不相應の行爲が自分の恥辱である事をいふ。總體に、人に愛し好まれないで、衆人の

かであると思ふならば、なぜ愚なりと思ひ付いた事の所置をとらぬのかといふのだ。總て、人に愛し好まれないのに、衆人中へ出るのは耻だ。容貌が醜く、心が劣つてゐながら、猶朝廷に出仕したり、無智で大才の仲間に入つたり、不器用の藝で堪能の者の席に列つたり、白髮の身で壯年の者の間に出入したりなどし、まして、自分の力で出さない事を望み、自分の智では出来ない事柄を心配し、自分のやうな身分のものの上には廻つて來さうもない幸運利達を待ち、それが爲に人に恐れ、

中に立ち交るのは恥辱である。◎かたちみにく、心おくれにして出で仕へ。容貌が醜く心が劣つて居て朝廷に出仕し。◎不堪の藝。拙い藝。不器用の藝。◎堪能の座に列り。自分が拙い藝であるのを知らずに、技藝の上手な者の居る場所にならびつゝ。◎雪の頭。白髮の頭で壯年の者の席へ出る。曲禮、「三十曰壯。」◎及ばざる事を望み云々。自分の力では達し得ない事を望み。自分の智では出来ない事を心配し、又自分の上には到底來ない所の幸運榮達を保ち、それが爲に人に恐れたり、或は人に媚びへつらふのは、人がかゝせる恥でなく、自分から恥をかくだ。秋聲賦、「況思其力所不及、憂其智所不堪。」◎食る心に引かれて。深い慾心に導かれて。◎今こゝに來れり。死といふ大事が此に來て居る。◎たしかに知らざればなり。死といふものゝある事は誰でも知つてゐるが、痛切に身にしみて知つてゐないからだ。もしも死の近い事を眞に知つて居るならば、慾心などはない筈だ。

百三十五段

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、「わ

人に媚び諂ふのは、之は皆他人が興へる所の耻ではない。欲深い心に導かれて、自分から自分の身をばづかしめるのである。この欲心の止まない原因は、「死といふ大事が、今、茲に來てゐる。自分ばもう忽ち死んで終ふのだ。」と、確實に自覺してゐないからである。【大意】資季大納言が具氏宰相と問答して、その間に負け、嚴重な罰を受けた話。【通釋】資季大納言入道とか申した人が、具氏といふ參議中將に逢つて、「あなたのお尋ねになる位の事は、何でも御答へ申さぬ事は

ぬしの問はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや。」といはれければ、具氏、「いかゞ侍らん。」と申されけるを、「さらば、あらがひ給へ。」といはれて、「はかばかしき事は、かたはしもまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゝろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ。」と申されけり。「まして、こゝもとの淺き事は、何事なりともあきらめ申さん。」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて争はるべし。負けたらん人は、供御をまうけらるべし。」と定めて、御前にて召しあはせられたりけるに、具氏、「幼くより聞きならひ侍れど、その心知らぬこと侍り。『馬のきつりやうきつにのをか、なかくばれいりくれんどう、』と申すことは、いかなる心にか侍らん、承らん。」と申されけるに、

あるまい。」と仰つた。その時、具氏は「どうで御座いませうか。」と不審らしく答へたのを「それなら論じなさい。」と再び言はれて「私はしつかりした事は、少しも學び知つて居らぬから、お尋ね申す必要がない。唯、何といふ事もないツマラヌ事の中で、不明瞭な點のある事柄をお尋ねしませう。」と答へられた。

大納言入道、はたとつまりて、「これは、そらごととなれば、いふにも足らず。」といはれけるを、「もとより、ふるき道は知り侍らず、そらごとを尋ね奉らんと、定め申しつ。」と申されければ、大納言入道、負になりて、所課しよくわいかめしくせられたりけるとぞ。

◎資季大納言入道。法興院攝政兼家公の末孫、正二位藤原資季卿。楊梅と號し、法名を了心といふ。◎とかや聞えける人。とか申した人。◎具氏宰相中将にあひて。従三位源具氏卿に出で合うて言ふのには。◎わぬし。あなた。對稱代名詞。◎答へ申さらんや。御答へ申さない事があらうか、御答へ申さう。◎「は」反語。◎「いか」侍らん。どうで御座いませうか。具氏が資季の傲慢な言葉に不審を起したのだ。◎さらばあらがひ給へといはれて。さう不審に思ふならば、問答して争ひなさいと、資季卿にいはれて。「あらがひ」は、争ふこと。◎「はかしくしき事はかたはしも云々。シツカリシタ事は一部分も學び知つて居らぬから、御尋ねする必要がない。◎そらごと。つまらぬ事。とりとめない事。◎おぼつかなき事をこそ。不確な不明瞭な事を御尋ねしませう。◎まして、この淺き事は。資季卿の詞。況んや我國の意味の淺薄な事柄は何事でも明答致

からう。それに負けた者は、罰に御饗膳を支度なさるがよい。」と定めて、御前でこの兩人を對はせられたに、具氏が、「幼少の時から聞きなれてゐるが、その意味のわからぬ事がある。あの「むまのきつりやうきつ」のなか、なかくばれいりくれんどう。」といふ事は、どういふ意味でありませうか、御説明を願ひませう。」と質問せられたので、大納言入道はパツタリ行き詰つて、「これはツマラヌ事であるから、答へる程の價值がない。」と答辯された。具氏は「はじめから、古い聖賢の道は

しませう。◎近習。院の近習。◎御前。院の御前。◎負けたらん人は供御をまうけらるべし。問答に負けた人は御食膳を支度致しなさい。供御は主上の御膳部。◎御前にて召しあはせられたりけるに。院の御前で兩人を對せられたに。◎その心知らぬこと侍り。その意味のわからぬ事がある。◎馬のきつりやうきつにのなか、なかくばれいりくれんどう。「馬のきつ」は「馬退きつ」で、この五字を除去する意。「りやうきつ」のなか「九字を中間」と「り」と「か」とが残る。「いりくれんどう」とは天地返しナカボレの意で、「り」「か」を天地返しにして「かり」とする義。「かり」は雁の意で、隠語にしたのだ。◎承らん。御聞き申さう。◎はたとつまりて。パツタリ答がつまつて。◎いふにも足らず。意味を答へる必要がない。◎ふるき道。ふるい聖賢の道。具氏卿の詞。◎所課いかめしくせられたりけるとぞ。負けた者に課はせる所のふるまひ。即ち罰を嚴重にされたといふことだ。

百三十六段

醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御くごのまわりける

知りません、ツマラマ事
を御尋ねしませうと、と
りきめて置いたのだ。」と
申されたので、大納言の
負けとなり、負けたもの
に課する所の振舞を嚴重
にせられたと云ふ事だ。

【大意】

醫師のあつしげが法皇の
御前で自慢を言うた時
に、内大臣有房に事を問
はれて誤つた答をし、即
座に恥をかいた話。

【通釋】

あつしげといふ醫師が、
故法皇の御前に何候して
居られたに、丁度御膳が
参つたので、「今、参つた
御食膳の様々の食物の文
字も、効能も、御尋ね下

に、「今まゐり侍る低御のいろくを、文字も功能もたづね下さ
れて、そらに申し侍らば、本草に御覺じあはせられ侍れかし。
ひとつも申しあやまり侍らじ。」と申しける時しも、六條の故内
府、まゐり給ひて、「有房、ついでに、もの習ひ侍らん。」とて、
まづ、「しほといふ文字は、いづれの偏にか侍らん。」と問はれ
たりけるに、「土偏に候ふ。」と申したりければ、「才のほど、既
にあらはれにけり。今は、さばかりにて候へ。ゆかしきところ
なし。」と申されけるに、とよみになりて、まかり出でにけり。

◎あつしげ。醫師の名前。◎故法皇。花園院。萩原法皇と號す。◎さぶらひて。
何候して。◎供御のまゐりけるに。御膳がまゐりました時に。◎今まゐり侍る
供御のいろくを。あつしげの詞。今参つた御食物の種々様々なるのを。◎功
能。食物のキ、メ。食物の滋養。◎そらに申し侍らば。そらで御答へ申します
ならば。◎本草。神農氏が著したといはれてゐる藥物學の書。薬は草を本とし

さい。そして私がそれを、
そらで御答へ申したな
ら、本草といふ書物に照
り合せて、御覽なさい。一
つも嘘を申し上げますま
い。」と申された。其處へ
六條故内府殿が参内され
て、その自慢を聞き、「私
が序でに教へていたゞき
ませう。まづ、しほといふ
文字は何偏で御座いまし
たらうか。」と尋ねられ
た。あつしげは「土偏で御
座る。」と答へたから、内
府殿は「あなたの學問の
程度は、既に、明かになつ
た。今はそれだけの問答
で止めてお置きなさい。
奥深い所もない。」と申さ

て作るから、本草といふ。◎御覽じあはせられ侍れかし。御膳に上る物食の文
字功能について、私の申上げることな、本草に照り合せなさい。「かし」は念を
おしていふ感動詞。◎時しも。時その時。丁度その時。「し」は意味を強める助
詞。「も」は感動詞。◎六條故内府。従一位内大臣有房。和漢の才人で能書家。
内府は内大臣の唐名。◎いづれの偏にか侍らん。何偏で御座いませうか。◎才
のほど既に云々。有房の詞。あなたの學問の程度は最早明瞭になつて終つた。
土偏の塩は俗字で、正字は鹽であるからだ。◎今はさばかりにて候へ。今はそ
れだけで入らつしやい、それ以上いふ必要はない。◎ゆかしきところなし。な
つかしい點がない。これ以上聞いて見度いと思ふ點がない。◎とよみになりて。
マツトいふ笑ひになつて。人が皆笑ひ出しての意。「とよむ」は毒き響く意。嘯
り渡る意。◎まかり出でにけり。あつしげが御前を退出した。「まかり」は貴人
の前を退く意。

百三十七段

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは、雨にむかひ

れたので、人が皆ドツト笑ひ出して、あつしげは御前を退出して終つた。
 【大意】
 「満開の花、隈なく晴れた月許りが趣のあるのではない。咲かうとする梢、散り過ぎた庭などに、格別の風情がある。男女の情も、偏に、出逢うて見る時よりも、逢はずに心を碎く點に深い興味を感じる。月も、木間を洩れ来る影、雲の網間から照らす光、露けき草木の葉に宿る姿が、身に染みてよい。凡て、月花は目に見るよりも、心に思ふ方が、趣味が饒かた。上品な人は月花に對して、凡て、淡泊で

て月をこひ、たれこめて春の行くへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。」とも、「さはる事ありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れることかは。花の散り月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、「この枝かの枝ちりにけり。今は見所なし。」などとはいふめる。萬の事も、はじめをはりこそをかしけれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなるちぎりをかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井をおもひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいはめ。望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて待ち出でたるが、い

興味を味ふ事も等閑であるが、田舎人は、濃厚執拗で狂的な興じ方をする。といひ、次に、田舎人が祭見る態度の餘裕のない、趣味のかけてある下品な様や、都人の優長な温淑な氣高い有様を叙し、更に祭の過ぎはて、の淋しさから、世の定めない習に言ひ及ぼし、人の死期の近きを説き、最後に、「死期に臨むには家をも忘れ身をも忘れて、一心に後世のつとめをするがよい。」というてゐる。
 【通釋】
 花は満開の時に、月は照らさぬ隈もない澄み渡つた景色前りを、賞するも

と心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなく哀なり。椎柴、しらかしなどの、ぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は聞のうちながら思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興するさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねちより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、はては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、萬の物よそながら見ることなし。さやうの人の祭見しさま、いとめづ

のか、さういふものではない。雨の宵に月を戀ひ、簾の中に籠つて、春の進むを知らずに居るのも、矢張りみんと風情が多い。花は、これから満開にならうとする梢、又は、既に散り萎んだ庭などに、見所が多い。和歌の小序などにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。」ともしてあり、或は「さはる事ありてまからで。」なども書いてあるのは、「花を見て。」と書いてあるのに比して、その情趣が劣つてゐまい。花の散るのを惜み、月の山の端近く傾くのを慕ふ人情は、無

らかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは、棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて、酒飲み物くひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたり候ふ。」といふ時に、おのゝ肝つぶるゝやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はりいでて、押し合ひつゝ、一事も見漏さじとまもりて、「とあり、かゝり。」と、物ごとにいひて、わたり過ぎぬれば、「又渡らんまで。」といひておりぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、眠りていとも見ず。若くするゝなるは、宮仕にたちゐ、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。何となく、葵かけわたしてなまめかしきに、明け離れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど、思ひ寄すれば、牛飼、下部などの見知れるもあり。をかしく

理のない事であるが、殊に物の風情をも解しない頑固な人に限つて、この枝やかの枝が散つて終つた。今は見所がない。などと嘆くやうである。何事でも、始と終とが面白く、ひたすら相逢ふ事のみを感情が濃かだとは云へない。逢はないで終つたつらさを悲んだり、果敢ない約束を嘆いたり、或は、秋の夜長を獨寝の涙に明したり、遠い雲の彼方の空にゐる情人を思ひやつたり、淺茅の生ふる荒れた宿に、昔、馴染んだ戀人を思ひ浮べて思慕の情に暮れるのをこ

も、きら／＼しくも、さまざまに行きかふ、見るもつれ／＼ならず。暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なく竝みゐつる人も、いづかたへ行きつらん、程なくまれになりて、車どもものらうがはしさもすみぬれば、すだれ、たゝみも、とり拂ひ、目の前に淋しげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られておはれなれ。大路見たること、祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前を、こゝらゆきかふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ。世の人数も、さのみは多からぬにこそ。この人みな失せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大なるうつはものに、水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠るまなく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中におほき人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみ

そ、眞に情愛が深いとは言はう。
 十五夜のかけた所のない月を、千里の外まで見渡したよりも、廿日過ぎの遅い月が、夜の明け方になつてから、待受けて出たのが、趣が深く、又、青みを持つてゐるやうな、深山の杉の梢の間から漏れて見えた月光、通り雨がした後の村雲のかけになつてゐる間の月景色は、ならびない風情がある。小さい椎の木・白樫などの艶やかな葉の上に、キラ／＼と輝いてゐる光などは、一層身にしてみても、風流の心のあらう友を欲しいと、都の事を

ならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數おほかる日はあれど、おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうちおく程なし。わかきにもよらず、つよきにもよらず、思ひがけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫も世をのどかには思ひなんや。まゝ子だてといふものを、雙六の石にてつくりて立て竝べたる程は、とられんこと、いづれの石とも知らねども、數へあて、一つをとりぬれば、その外は遁れぬと見れど、またく數ふれば、かれこれ、まぬき行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へる、いとほかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき、きはひ來らざ

想ひ出してなつかしく思はれる。すべて、月とか

花とかいふものは、さう目で許り見るべき物ではない。春は必ずしも外に出かけないでも、又月の夜は闇の中に居ながら、も、ひそかに野外の春色、窓外の月景に、思をはせつゝ暮すのが、甚だ望の多いやうで興味がある。上品の人は、すべて物事に對して、偏に好き好んでゐるやうな様子には見えない。その面白がる様子もあつさりとしてゐる。然るに、片田舎の人は、濃厚に、萬事をば興じる。たとへば花の下には身を振る程にして近寄

らんや。その死にのぞめること、軍の陣にすゝめるに同じ。

◎花はさかりに、月はくまなきのみ云々。花は咲いてゐる盛りの時に、月は照らさぬ隈もない晴れ渡つて景色許りを第一の眺めとして見るものか、さうぢやない。「かは」の「か」は反語、「は」は感動。「のみ」はその物只一つだけといふやうに強く言ふ意の助詞。「くま」は物の分明に見えず蔭になつてゐる所。西行「なかなかに時々雲のかゝるこそ、月をもてなす景色なりけれ。」◎雨にむかひて月をこひ。雨の降る景色に對して、雨の爲にかくれて見えない月を戀ひ慕ひ。◎たれこめて。一室に簾を垂れて閉ぢ籠つて。古今集「たれこめて春の行方も知らぬ間に、待ちし櫻もうつるひにけり。」◎春の行くへ知るぬも。春の進むのを見らない事も。「行くへ」は、ゆく方、進む方向。◎なほあはれに情深し。矢張シミ／＼と感じて風情が多い。◎咲きぬべき程の梢。今に満開するであらうといふ程度の梢。「ぬ」は現在完了の助動詞。「咲きぬ」は咲いてしまふ即ち満開の意。◎しなる。シナブ。拗み湖む。力が衰へる。◎見どころ多けれ。愛すべき點が多い。◎歌のことばがき。和歌のはしがき。歌を詠んだ心もち、又は時・場所などを書き添へた短い文。◎花見にまかれりけるに。花見に行つたに。「まかれり」は「まかる」の過去完了。◎はやく散り過ぎにければ。最早花が散り過ぎて終つ

り、餘所見もせずに見守つて、酒を飲み、連歌をし、果てには、大きい枝をば何の考へもなく折り取つて終ふ。又、泉の中へは手足を漬けて見たり雪の庭にはおり立つて足跡をつけたりなどして、何事でも遠く離れてゐて見ることがない。

そのやうな片田舎の八人が、賀茂の祭を見物した様子が、いかにも珍しかった。れりものなどの通るのが、すつと遅い。それまでの間は、棧敷に居るのは無用の事だといふて、奥にある家で、酒を飲み、物を食ひ、圍碁・雙六などをして遊び、棧敷

たからして、讀んだ歌。◎さばる事ありて。差支があつて。◎まからで。行かないで、讀んだ歌。◎花を見てといへるに劣れることかは。花を見て讀んだ歌と云うてあるのに劣つてゐる事が、劣つて居ない。◎花の散り、月の傾くを慕ふならひ。花が散り、月が西に傾くのを、惜み慕ふ人情。◎さる事なれど。尤もなことであるけれど。◎殊にかたくななる人ぞ云々。格別に、頑固な人が、この枝かの枝が散つて終つた、今は賞すべき所がないなどといふやうだ。即ち、頑固な人に限つて、花は満開でなければ見所がないやうにおもふものだといふ意。◎萬の事も云々。月も花もさうだが、又、萬の事柄も同じく始と終とが面白い。◎偏に逢ひ見るをばいふものは。ひたすらに男と女とが相ひ逢うて見る事を情が多いといふものか、さうぢやない。◎逢はで止みにしうさを思ひ。逢はないで止んだつちさを考へ。◎あだなるちぎりなこち。共に相逢ふ事が出来ないはかない縁を根み嘆き。◎長き夜をひとりあかし。秋の長い夜を男女たがひに逢はないで獨り寝て夜を明かし。◎遠き雲井を思ひやり。遠い大空の彼方にある戀人をあれやこれやと推測し、雲井、雲の居る處の義で、大空、禁中、遠い所などの意。萬葉集「とほくありてくもに見ゆる妹が家に、はやくいたらんあゆめ黒駒。」◎淺茅が宿に昔を忍ぶ。茅がまばらに生えた荒れた家を

には人に番をよせて置いたから、その番人が愈々れり物が通ると知らせる時に、各々たまげ方程先を争うて棧敷に上り落ちさうになるまで簾。外にふくらみ出し、互に押し合ひ押し合ひして一事をも見落すまいと見守り、そして、兎や角と一々批評などをして、それが通つて終ふと、再び通るまで、また飲んで遊ばうといふて下りて終ふ。これは心で味はうなどいふ事はなく、たゞ物を眼で見ようとするのであらう。然し、優雅な心持を持つてゐる都の人は、かかる場合には眠るが如くしてよくも

見るにつけて、昔自分が共に相語つた戀人の事を心に思ひ出して懐しく思ふ。淺茅は、まばらに生えた茅。「昔見し妹が垣根は荒れにけり、つばな交りの藪のみして。」◎色このむとはいはれ。是等の事柄を情を好むとマア言はう。◎望月。満月。十五夜の月。◎千里の外までながめたるよりも。千里の外ホカの遠方まで、残りなく見渡したよりも。「千里の外」は、遠方の意。謝希逸、月賦「美人邁兮香塵潤、隔千里兮共明月。」唐の李嶠「三五二八夜、千里與君同。」白氏文集、「三五夜中新月色、二千里外故人心。」◎曉ちかくなりて。月の廿日過ぎの月をまつ意味だ。曉はアカトキで、明時、夜の明けるときの意。◎待ち出でたるが。夜の明け方近くなつてに、待ち受けて出た月が。◎いと心ふかう。甚だ情趣が深い。「ふかう」は深くの音便。◎青みたるやうにて。青々としてゐるやうで。◎深き山の杉の梢に見えたる木の間の影。深山の杉の梢の間から洩れてくる月光。◎うちしぐれたるむら雲がくれのほど。通り雨のした後の村雲に隠れてゐる時分の月が。◎またなく哀なり。ならびなく風情がある。◎椎柴。椎の木ノの枝。或は、椎の木。◎しらかし。白樫。◎ぬれたるやうなる葉。濡れてゐるやうな艶やかな葉。◎心あらん友もがな。風流心のある友がほしいものだ。「がな」は希望の意を表はす助詞。◎都こひしうおぼゆれ。昔都で共に月花を眺めて樂

見ない。年の若く身分の卑しい者は、主人の用達ヨウダツに立ち働き、又人の後の方に居る者は、決して悪い恰好などして前の人のしかるやうな事をせず、無理やりに見ようとする人もない。家には御簾・柱・諸道具まで何くれとなく葵を掛けて、優雅な情調が漂うてゐるのに、また夜の明け切らない時分から、人目を避けて棧敷に引き寄せる車などのあるのがなつかしく、その車の主が、あの人か、この人かなどと、想像をめぐらしてみると、中には牛飼や下男などの顔を見知つてゐる

んだ事を思ひ出して、其友の居る都の方が戀しく思はれる。兼好は雙岡ナラビガタカに居つたのだから、かく言うたのだらう。◎さのみ目にて見るものは。さう許り目で見ると、目ばかりで見るとものぢやない。心で観るべきだと言ふのだ。莊子「吾所謂明者、非謂其見彼也、自見而已矣。」運生八段五「水樂洞雨後聽泉、我輩豈無耳哉、更當不以耳聽、以心聽。」◎家を立ちさらでも、家を出ないでも。◎閨のうちながら。閨の中に居りながらも。閨は寢屋、寢ル室、ネドコ。◎思へるこそいとたのもしうをかしけれ。野外の春の様子、戸外の月の景色を想像したのが、甚だ、望あるやうで面白い。◎よき人。上品な人。◎ひとへにすけるさま。一途イチツに、すき好んだ様子に見えない。即ち、好樂の情を露骨に外形に表はさぬのだ。◎なほざりなり。面白がる様子もアツサリしてゐる。◎色こく、よろづはもて興ずれ。濃厚にシツコク、萬の事につけてマアもてはやし面白がる。◎れぢより。自分の身をれぢつて近寄り。◎あからめせずまもりて。餘所見もせずに見詰めて。◎心なく折りとりぬ。無分別に折り取つて終ふ。◎泉には手足さしひたして。清かな泉があると、その邊で涼しげに眺めることをせず、水中に手足を漬けてみたり。◎雪にはお立ちて跡つけなど。雪の庭には下り立つて足跡をつけたりなどして。◎よそながら見る事なし。遠く離れてゐて見るとい

のもある。面白くも、きらびやかに、様々な風で行き違ふのを見てゐるのも怠屈しない。日が暮れる頃には、立て並べてあつた物見車、棧敷にすき間なく並んでゐた人なども、何處へか散り失せたのであらう。間もなく雑沓ソウソクもすむと、棧敷の御簾や、墨スミをも取り拂ひ、見る／＼うちに淋しくなつて行くので、これらの様を見るにつけても、有爲轉變の世の習ひを知る事が出来て感が深い。されば、賀茂の祭のれりものなど見なくても、大路の有様を見れば世の習ひも知られるので、即ち賀茂

ふことがない。◎さやうの人。そのやうな田舎人。◎祭。賀茂の祭。◎いとめづらかなりき。甚だ珍しい事であつた。◎見ごととおそし。田舎人の詞。見ることどもが甚だ遅い。即ち、祭のれり物などの通るのが遅いとの意。◎そのほどは棧敷不用なり。れり物などの通らぬ間は、棧敷に居る事が無用である。棧敷は見物の爲に高く造る床ユカ。◎棧敷には人をおきたれば。棧敷には人に番させ置いてからして。◎わたり候ふといふ時に。その番人が、れり物がおとほりになりますといふ時に。◎肝つぶるゝやうに。タマケル程に。◎争ひ走りのほり。奥にある家から棧敷へ我さきにと争ひ走りのぼる。◎落ちぬべきまで。落ちて終はうとする程まで。◎簾はりいでて。簾をふくらみ出して。◎とありかゝると物ごとにいひて。兎や角と物事について批評して。◎わたり過ぎぬれば。れりものが通つて終ふと、再び通るまでは無用であるというて棧敷を下りて終ふ。◎都の人のゆゝしげなるは。都の人のすぐれてゐる事は。◎いと見ず。よくも見ない。◎若くすゑんくなるは。年若く、身分の末々の者は。◎宮仕にたちぬ。小姓。又は、腰元などの宮仕に出て、主人の用向きをなす爲に、働いて居る。◎人の後にさぶらふは。人の後に居るものは、強ひて見ようとして、前の人に、恰好わるく、のしかゝらない。◎わりなく見んとする。無理に

の祭を見物したのと同様だ。かの棧敷の前を大勢右往左往する其中に、知つてゐる者も澤山交つてゐるので次の事がわかつた。世間の人数もさうく多くはないのであらう。それゆゑ、この生きてゐる人たちが皆死んで終つてから後に、自分が死ぬと定つてゐた所で、間もなく死期を待ちつけるであらう。たとへば、大きな器に水を入れて細い穴をあけておかうに、たとひ水の漏れ滴ることが少量であるにしても、間断なく續けるならば、まもなく盡きて終ふ。あらう。そ

見ようとする人もない。○奏がけわたして。奏を一面にかけて。賀茂の祭には御簾・柱・書物・諸道具などに奏をかける。○明け離れぬほど。夜が明けはなれぬ時分。○忍びて寄する。人目を忍んでコツソリ棧敷に寄せる車などが、なつかしいのに。○思ひ寄すれば。その人が、かの人かなどと想像すると、牛飼や下男だけを知つてゐる車もある。○をかしくもきら／＼しくも云々。面白い様にも、きらびやかな様にも、様々に行きちがふのを見るのも怠屈でない。○立てならべつる車。たてならべてあつた物見車。○所なくみあつる人。すきまなく並んでをつた人。○程なくまれになりて。間もなく人が稀に淋しくなつて。○らうがはしき。みだりがはしき。らうは亂の音便。○すだれ、た、みも、とり拂ひ。棧敷の簾、疊もとりわけ。○世のためし。盛衰興亡の常ない世間の習慣。○思ひ知られて。心に知ることが出来て。○大路見たるこそ云々。祭の大路の様を見たのが、とりもなをさず、祭を見たのでマアあるよ。○こらゆきかふ人の見知れるが。大勢行きちがふ人で、分の知つてゐる人が。○あまたあるにて知りぬ。澤山にあるので、世間の人数も、さうく多くはないといふことが知れた。「知りぬ」は「世の人数もさのみ多からぬにこそ。」の次に置いて考へるべきだ。○多からぬにこそ。「多からぬにこそあらぬ」の略。多くな

れと同様に、都の中に澤山住む人の中で、一人も死なないといふ日はないであらう。それがまた一日に一人や二人ばかりではない。鳥部野・舟岡・その他の野山にも、死人を葬る数の多い日はあるが、葬らない日はない。随つて棺を賣る人が、それを作つて店に据ゑ置く時間がない。年の若いにもよらず、身の強壯なるにもよらず、不意に迫つて来るものは死期である。さう考へると、今日まで死を遁れて生存して居る事は珍しい不思議である。暫時でもこの世をばノンキには思へよう

いであらう。○この人みな失せなん後。此人達が皆死んで終ふであらう後に。○ほどなく待ちつけぬべし。この現在世にある人々が皆死んで終つてから後に、自分が始めて死ぬ事に定つて居ても、その死ぬ時が間もなく自分に到来するであらう。○大きな器のうつつはもの。僅少の水滴も、それが間断なく滴るときは、大きな器の水も自然盡きてしまふ如く、一人死に二人死の中には、數多い人も、自然死んで終ふ時が来るといふ譬。後漢書「山林不能給野火、江湖不能實漏卮。」念ふまなく。間断なく。○鳥部野、舟岡、京都の近くに葬送の場所。西行「舟岡の裾野のつかの敷をひて、昔の人に君をなしつる。」○さらぬ野山。さうでない、その他の野山。「さらぬ」はサアラヌである。○送る數。葬式を送る數。○棺をひさぐもの。人の屍を納れる箱を賣るもの。和名集、「棺、音官、一番貫。和名、比止岐、所以盛尸也。」○うちおく程なし。しまつておく時間がない。○思ひがけぬは死期なり。不意に迫り来るものは死ぬ時期である。○今日まで遁れきにけるは云々。今日まで自分が死なずに生き延びて来たといふ事は、珍しい不思議な事だ。○暫も世をのどかには思ひなんや。暫時もこの世を靜かにノンビリしたものと思ふであらうか、思はない。「なん」は現在完了の「な」と未來の「む」と連つたもの。「な」には物を承める強い意味がある。

か、思へない。あのまゝ子だてといふ遊戯を、雙六の石で作つて立て並べてある間は、どの石が抜き取られやうともわからなけれど、數へあて、その中の一を取ると、それ以外のは抜き取られるのを免れたやうなもの、又又、數へあててかの石この石と、抜き取つて行くうちに、最後には全部抜き取られて終ふのと同じである。

堀河百首、「けふとても世をのどかには思はれど、あすしらぬ身ぞ哀れなりける。」
 ◎まゝ子だて。黒石と白石とを、二・三・五・二・四・一・三・二・二・一といふ風に各十五づつ三十ならべ、任意の基點から數へて十にあたる石を取る遊戯。人も一日に一人二人づゝ死ぬ中には、丁度まゝ子だての石が段々にぬき取られて、終には皆なくなつて終ふが如く、皆死んで終ふといふ譬。◎とられんこと。抜き取られるであらう事は。◎その外は通れぬと見れど。その外の石は抜き取られる事を通れたといふ風に見えるけれど。◎またく。度重れて。◎かれこれまぬき行くほどに。かの石この石といふやうに、段々ところなくを抜いて行く間に。◎いづれも通れざるに似たり。世間の人が何れも皆死ぬ事を通れないで一人死し二人死ぬ中に全部死んで終ふ有様は、石が何れも通れずに全部抜き取られて終ふのに似てゐる。◎世をそむける草の庵。俗世間を遠く離れた草の庵。◎しづかに水石云々。心靜かに水を樂み岩を愛づること。◎これをよそに聞くと思へるいはかなし。死の近付いてゐるといふ事を、自今に關係ない事と思つてゐるのは、甚だツマラマ考だ。即ち世捨人でも死の近い事は、戰場に向ふ兵士が死の近いのと同ーだといふ意。兼好集「通れても榮のかり庵のかりの世に、いまいくほどのどけかるべき。◎無常のかたき、きはひ來らざらんや。無常

と、表紙につける説とあるから、どちらにつけてもわるくない。中でも文の箱は多くは右方につけ、手箱には左手につけるのが普通の事だ。」と仰せられた。

◎くりがた。箱の蓋に栗の實の形に似た半圓形の穴をあけてある所をいふ。緒をとほす爲の穴。◎軸につけ、表紙につくること、兩説なれば。左方に付ける事と、右方につけることとの兩説であるから。軸とは左、表紙とは右、「左右」とは蒔繪の本を我が手前にしての別けかたである。昔の書物は皆巻物である、そこから文をいれる箱の左右を軸がた、表紙がたといふのだ。◎いづれも難なし。どちらに付けてもよろしい。◎文の箱。消息文を入れて人に送る箱。◎ふばこ」といふ。◎手箱。手許のものを入れる小さい箱。◎つねのことなり。普通の事である。

九十六段

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見知りておくべし。

◎めなもみ。稀簽草。莖は眞直で、枝は節毎に向ひ合せて出る、葉には三つの角と細い毛とがあり、秋、黄色の小さい花をつける。本草に「稀簽は莖葉頗向

【通釋】
 めなもみといふ草がある、莖に整された人は、この草をもんで付けると、すぐになほるといふ事だ。萬一の用意に、その草を見知っておくがよい。